短編小説 クレアの幸せ

（1）クレアの幸せ①

主要登場人物

クレア・レイニー・ユキ・モーア・マリア

2016 年12 月21 日

ある宿屋にて

クレア「やっほー！レイニーいる！？」 レイニー「どうして俺がここにいることが分かったんだ！？」クレ

ア「この宿に入っていくのが見えたのさ！」レイニー「……」

クレア「今日、暇！？」

レイニー「……え？まあ家庭教師はないけど……」クレア「じゃあ、私ん家来て！」レイニー「……え？」

クレア「いいから早く！」

数 10 分後 クレアの家にて

クレア「3 日ぶりだね、私ん家来るの！」レイニー「……」 クレア「レイニー、私のこと、苦手でしょ！？」レイニー

「え！？」 クレア「隠さなくてもいいよ！私、そんなのすぐわかるから！」レイ

ニー「いや……苦手じゃなくて……その……」 クレア「じゃあ質問変える！ユキのことどう

思ってんの！？」レイニ

ー「え！？」

クレア「ユキのことだよ！」

レイニー「ユキは……いい人というか……」 クレア「それだけ！？」 レイニー「……それだけだ……」 クレア「だったら、

施設にいたイケメンの性格いい人、ユキに紹介してもいい！？」レイニー「え！？」 クレア「すっごいいい人！ユキとなら幸せになれる

だろうな～」レ

イニー「それは……ダメだ！」クレア「……なんで、止めるの！？」

レイニー「……いや、その……」

クレア「く～！じれったいな！ハッキリ言いなよ！」

約5 分後

クレア「好きなんだったらなんで告らないの！？」レイニー「……

いや、別に……」 クレア「さっきの施設の人は嘘だけど、このままじゃ～ホントに誰かに告られちゃうよ～！あの子、モテるんだから！」レイニー「……」

クレア「ホント、ウブなんだね！勇気だしなよ！」 レイニー「……ユキは王子様を待ってるか

ら……」 クレア「王子様！？……ああ、なんか聞いたことあるな！」レイニ

ー「クレアさんも知らないのか！？」 クレア「その『さん』っての、これからは禁止ね！深くは聞いたことないけど、昔助けてくれた『王子様』を探してるっていうのは聞いたけどね……」レイニー「じゃ

あ、その人と……」 クレア「レイニーはそれでいいの！？」レイニー「……」 クレア「あのさ～大事なのは他の人がどーかとかじゃなくて……レイニーがユキのこと好きか

どうかじゃない！？」レイニー「……」

クレア「まあ、しょせんその程度だったってわけか……」 レイニー「違う！俺はユキを愛している……ユキが一日中頭から離れない……」クレア「…

… だったら、いいじゃん！

その想い大事にしなよ！」レイニー「明後日、ユキの教会に行こうとしてた……」

クレア「明後日！？明日じゃダメなの！？」 レイニー「明後日はユキの誕生日だから……」

クレア「あ！そうだった！ダメだ……ずっと施設にいたから、お祝いしたことなかったんだ……でもよく覚えてるね！スゴイよ！」レイニー「俺と同じ誕生日なんだ

… … 」

クレア「これまたスゴイや！運命だよ、それ！」レイニー「……ユキ

は大丈夫かな？」 クレア「だから言っただろ？ケロっとしてるって！」レイ

ニー

「……」

クレア「じゃあ、明後日、告るんだね！？」レイニー「……いや、告

白は……」

クレア「く～！だんだん腹立ってきた！レイニーはどうしたいの！？」レイニー「……ユキと一緒にいられれば、それでいい……」 クレア「ふ～よくわからないね……でも、いつまでもそんなんじゃだめだ

よ！」レイニー「……分かってる……いつかは……」クレア「ユキには花を贈れば

いいよ！」レイニー「花……」

クレア「なんか、花が大好きらしくてさ……それであんな仕事してんの！」 レイニー「花か……」

クレア「そうそ！」

レイニー「クレアさん……いや、クレア……ありがとう」クレア「ど

うしたの！？急に改まって……」 レイニー「いや、クレアは俺よりずっと昔からユキのこと支えてくれてたんだな……ありがとう

… … 」クレア「ぷっ！それって、ユキの恋人みたいなことばだよね！」レイニー「いや！違う！正直なことば

だよ……」 クレア「まあ、いいや！こっちこそありがと！ユキ、レイニーに再会できて、ホントに嬉しそうだったよ！」

レイニー「俺がクレアを苦手だったのは……ユキと仲良しだからだよ……」クレア「うん！？」

レイニー「なんか、ユキのこと、俺より知ってる人が……なんかうらやましかったんだ……」 クレア「大変な人ね……これからライバルがどんどん現れて

も仕方ないよ！」レイニー「え！？」 クレア「嘘ウソ！まあ、ユキは私の親友だからね！ユキがいないと、私だって独りぼっちなんだよ！」レイニー「…

… 」 クレア「ユキを生き返らせてくれて……ありがと！」レイニー「い

や、別にあれは俺の力じゃ……」 クレア「うんうん！でも、誰にお礼っていいか、わからないから、とりあえず、レイニーにお礼言っとくよ！ありがと！ユキが生き返らなかったら……」レイニー

「……」

クレア「私もレイニーと同じことしてたさ……」レイニー「クレア

… … 」

クレア「ユキが笑顔でいてくれるのが、私の幸せだからね……ふ～っ、さっきの撤回ね！私の親友はユキとレイニーだけだから！」レイニー「俺も入れてくれるのか

… … ？」

クレア「もちろん！これからも 3 人で仲良くしようね！」

2016 年12 月22 日

ユキ「クレア……ちょっと、付き合ってくれない！？」クレア「どうしたの！？」

ユキ「明日、レイニーの誕生日なんだ！プレゼント買いたいんだよ～」

クレア「いいよ！近くでバザーがあって、珍しいものが買えそうだから、そこ行こうよ！」ユキ「うん！」

マリア「もう、あのバカ息子は……さっさと告白すればいいのよ……」モーア「あなたの息子さんですよ……」マリア「もう奥の手を使うわ！」 モーア「奥の手！？え！？ダメですよ！それは現世とあの世をつな

ぐ石！それはいざというときにしか使ってはいけません！」マリア「いざというときじゃない！」

モーア「……」

数10 分後

ユキ「あ！この本いいかも！なんも書いてない本！レイニーは本好きだけど、こんなの持ってないんじゃないかな！？」クレア「へえ、珍しいね……日記にでも使うのかな……？」ユキ「これにしよう！」

マリア「ユキちゃん！ナイスなものを選んだわ！これに息を吹き込もう！」

モーア「もう……どうなっても知りませんよ……」マリア「あ」

ユキ「あれ？1 ページ目に何か文字が書いてある……なんて読むの？」

クレア「『あ』だね……不思議な本だね……『あ』しか書いてない本って……」ユキ「これにしよう！」

数10 分後

ユキ「せっかく、プレゼント買ったけど、レイニーどこにいるかわからないや……」クレア「大丈夫！

また、ぽわ～っと現れるよ！」

ユキ「そうだよね！うん！また会える気がする！」

マリア「上手くいったわ！さあ、これでレイニーに告白するまで頑張ってもらうわ！」モーア「……」マリア「まずは、『邪悪なる光の石』を壊してっと……あと、ユキちゃんには病気になってもらうわ！」モーア「マリア様

が恐ろしい……」

教会にて

クレア（ユキとレイニーが結ばれますように……）

（2）クレアの幸せ②

主要登場人物

クレア・レイニー・ユキ・モーア・マリア

2017 年2 月4 日

教会にて

ユキ「……ただいま」 レイニー「……おかえり？」ユキ「ごはん食べた？」

レイニー「ああ……ユキは？」

ユキ「私も食べてきた！じゃあお風呂沸かすね……」レイニー

「……」

ユキ「どうしたの？」

レイニー「……なんか、元気ないな？」ユキ「え！？

そうかな！？」

レイニー「いつもの笑顔と違う……」ユキ「……」 レイニー「何があったんだ？」ユキ「……」 レイニー「……まあ、

何もなかったんなら、いいけどさ……」ユキ

「レイニーには何でもわかっちゃうんだね……」レイニー「……何があったんだ？」 ユキ「……誰かに後

をつけられてる気がする……」レイニー

「え！？」

ユキ「さっき、クレアの家に行くときも、ここに帰ってくるときも……誰かに後をつけられてる気がするんだ……クレアがその辺を探ってくれたんだけど……誰もい

なかった」

レイニー「……」 ユキ「あ！でも、勘違いだと思う！それよりお風呂……」レイ

ニー

「……花売りはしばらく辞めたらどうだ？」ユキ「それは嫌！私、

何もしてない方が嫌……」レイニー「……」

ユキ「……ごめんなさい」 レイニー「……じゃあ、俺も明日から一緒に花売りするよ……」

ユキ「え！？いいよ、夜の家庭教師の準備があるでしょ？」レイニ

ー「別に大丈夫だよ……朝早く起きるから！」ユキ「……」

レイニー「うん？」

ユキ「えへへ……じゃあ、お願いする！」

2017 年2 月5 日

街で花売りをするユキとレイニー

レイニー「どうだ？つけられてる感じはあるか？」

ユキ「うんうん！今は大丈夫！」レイニー「……そ

うか」子ども「お姉ちゃん！」

ユキ「あ！この前の子だね！」

子ども「お姉ちゃんにもらった花、お母さん喜んでくれてたよ！」

ユキ「ホント？よかった……」 子ども「これ！お母さんがお姉ちゃんに手紙書いたの！今、

読んで！」

ユキ「え……？」レイニー「……」 子ども「『今』、読んでよ～！」ユキ「……」

レイニー「……」 子ども「何だよ！もういいよ！」ユキ

「あ……」

レイニー「……」

夜、教会にて

ユキ「あの子、傷つけちゃった……」 レイニー「違うよ！あれは行き違いだ！向こうも知らなかっ

たんだし……」

ユキ「……文字が読めるようになりたい」レイニー「え……」 ユキ「私、もう危険じゃないかもしれないけど……文字は読めないまま……それがずっと嫌だったの……」

レイニー「……」ユキ「ダメ？」

レイニー「いいよ……特訓しよう！」

ユキ「え……今から？いいよ……レイニー、昼も夜も働いて疲れてるでしょ、明日でも……」レイニー「『今』したいんだよ……」

数10 分後

レイニー「……」 ユキ「ごめん……私、バカでしょ……」

レイニー「いや、俺の教え方が悪いんだ……ユキはバカじゃない！」ユキ「うんうん……私がバカだからいけないの……私が文字を読めたら、人を傷つけないで済んだのに……」 レイニー「あれはだから……『行き

違い』だよ！本当にバカなのは……マルクとか、ジャックとかみたいな奴らだろ？」ユキ「……」 レイニー「有能な人材じゃなくてもいい！俺は、幹部試験に最年少で合格したけど、幸せにはなれなかったよ？本当に頭の

いいひとは、自分も幸せで、他人も

幸せにできる人じゃないのか……？」ユキ「……」 レイニー「……一度しか言わないから……俺はユキといれて幸せなんだ……だから……明日また頑張ろう！」ユキ「……うん……ありがと……明日また

頑張ろ！」

2017 年2 月6・7・8・9・10 日

昼間はユキとレイニーで花を売り、夜はレイニーが家庭教師に帰ってきた後で、文字の読み書きの練習をするが、一向に上手くいかない。

2017 年 2 月 11 日 夜、教会にて

レイニー「じゃあ、これは？」ユキ「『あ』かな……？」 レイニー「これは『え』だ……うーん……」ユキ「ごめん……私が

バカだから……」 レイニー「バカじゃないって言ってるだろ？疲れてるんだよ、少し休もう……」

ユキ「うんうん！続ける！それより、レイニー、どうしたの？そのメガネ？」レイ

ニー「いや……最近、目が悪くなっただけだよ……」ユキ「クレアが似合って

るって言ってたよ？」レイニー「……そうか」

ユキ「はい、次の問題だして！」 レイニー「なあ……いいのか？」ユキ「うん？」 レイニー「ストーカーが

いるかもしれないのに……こんなことしてていいのか？」

ユキ「こんなことって！私にとっては大事なことだよ！」レイニー「わかってるよ

… … けど」ユキ「わかってない！」

（沈黙）

レイニー「なあ、文字が読めなくたっていいじゃないか……もっと別の生き方だって……」ユキ「それは文字が読める人の言い分！」 レイニー「……そんなに怒るなよ……俺だって、必死にユキのことわかろうとして

るんだから……」ユキ「……」 レイニー「やっぱり、警察に行った方がいいんじゃないか？」ユキ

「いいよ……ハッキリした証拠もないし……」レイニー「けど

… … 」

ユキ「レイニーは心配しすぎ！はい、次！」 レイニー「……もうやめだ……」

ユキ「え……？」

レイニー「文字の練習はストーカーを捕まえた後だ……それまで……こんなのんきなことしてられないよ……」ユキ「……」 レイニー「……」ユキ「！！」

レイニー「ユキ！何してるんだ？やめろ！」

ユキ「本なんかなかったらいいのに……こんな本……」レイニー

「やめろ！本に八つ当たりすんな！」ユキ「本なんか……大っ嫌

い！」

レイニー「いい加減にしろ！本が好きか嫌いかは読めてからにしろ！文字が読めないくせに！」ユキ「……」

レイニー「あ……ごめん……」

ユキは教会の部屋から出ていって、号泣する。レイニーはなだめようとするが……

レイニー（？人影……）

レイニー、人影についていく。

レイニー「おい！ユキをつけてただろ？誰だ？」

人影が姿を現す。

レイニー「……」

クレアの家にて

クレア「やっほー！って……レイニーだけ……？」レイニー「ちょっ

といいかな？」 クレア「いいよ！今、テレビ見てただけだし！」レイニー「…

… 」

クレア「暗いね……」 レイニー「色々あったんだけど……大きく言ったら 2 つ……」ク

レア「マシな方から聞こうか？」

レイニー「……ユキを泣かしちゃった……」

クレア「！？それがマシな方？何があったの？」 レイニー「ユキに『文字が読めないくせに』って言っちゃったんだ……」

クレア「……レイニー、目つぶって？」レイニー「え！？」 レイニー目をつぶる。そこへクレアの平手打ちが飛ぶ。

レイニー「……」 クレア「他の人ならいいけど……ユキ、そんなの慣れてるから……けど……」レイニー「……」 クレア「レイニーには言っ

てほしくなかったな！」レイニー「……ご

めん」

クレア「私に謝ることじゃないだろ？で、もう 1 つは？」レイニー

「……ストーカーが見つかったんだ……」 クレア「え？いいことじゃない！で、

警察に突き出したの？」レイ

ニー「いや……」

クレア「は？」

レイニー「あのストーカーの正体は……俺だったんだ……」クレ

ア「はぁ？」

レイニー「昔、本で読んだことがある……勇者は自分の感情を人の形にして、分身にすることができたんだ……怒りの感情で攻撃の魔法が使える分身を創っ

たり……悲しみの感情で人を癒す回復の魔法が使える分身を創ったり……」クレア「うんうん」 レイニー「で……俺の感情が独り歩きして、ユキのストーカーを創ってしまったんだ……俺が……あまりにユキのことが心配だから……」クレア「……」

レイニー「俺の分身は本体の俺に見られたことで、もう消えたけど……俺は、心配なんだ……ユキのことが……」 クレア「……分かったよ……レイニーがユキのこと、どんだけ思ってるかは分かった……けど…

… もう少し、信じてあげたら？」レイニー「信じてるよ！」 クレア「いや、信じてないな……レイニーはユキにびくびくしてる……いつか、嫌われるんじゃないかってね！」レイニー「……」 クレア「ねえ、どうして

ユキが文字を読みたいって言いだしたか知ってる？」レイニー「子どもを傷つけたから……」 クレア「それもあるけど……ユキはレイニーと同じ世界を見たかったんだよ！レイニーは本が好きだから、自分も本を読めるよう

になりたかったんだよ……」レイ

ニー「……そうだったのか……そんなことも知らずに……俺……」 クレア「でも、レイニーの思いは……ちょっと重たすぎるけど、本物だったってことは、ユキにも伝わってると思うよ！レイニーだって、ユキの見

てる世界を見たか

ったんだろ？」レイニー「え？」 クレア「あのメガネ……度がキツイ奴だよね？昔、施設にそういうメガネしてた子がいたから、わかる！あんな度がキツイメガネかけて……レイニー、別に目も悪

くないのに……」

レイニー「……」

クレア「あれで本を読んで、文字が読めない人の気持ちを理解したかったんだろ？」

レイニー「……まあ、うん」クレア「行き違いだね！」レイニー「……」 クレア「さあ！さっさと帰った！

帰った！仲直りしてきな！」レイニ

ー「ありがとう……クレア」

クレア「大丈夫だよ！昔言っただろ？ユキの笑顔が、私の幸せなんだよ！」レイニー「……」

クレア「ユキを笑顔にしてあげて！」

クレアの家の玄関にて

クレア「ユキがもう 1 つ言ってた！」レイニー「何を？」

クレア「レイニーのことばは美しいし、優しいけど……時々本当の気持ちが分からなくなるって！本音が聞きたい！って言ってたよ！」レイニー「……」

教会にて

ユキ「どこ行ってたの？心配してたんだよ！もう帰ってこないかと……思っちゃった」レイニー「ごめん……」

ユキ「私、レイニーに捨てられたら、どこにも居場所がないもん……」

レイニー「ごめん……ストーカーを捕まえてきたんだ……」ユキ

「え！？」

レイニー「近くに住んでいる若い男だった……もう警察に突き出したから大丈夫だよ……これで安心して、文字の練習ができる……」

ユキ「……もういいよ」レイニー「え……？」

ユキ「……書けるようになったから……」

ユキ、「レイニ」と紙に書く。

レイニー「これ… …？」 ユキ「さっき、練習してたんだ……これだけ書けたら、もう満足！」

レイニー「ユキ、自分の名前も書けるのか？」ユキ「うんうん！こ

れだけ！」レイニー「…………」

ユキ「これで仲直りだね……？」

レイニー「ごめん……あ、ちょっと散歩してきていいか？」ユキ「え

… … ？」

レイニー「帰ってくるから！ちょっと、考え事だよ！」

ユキ「わかった……いってらっしゃい！」

夜、就寝する前の時間、ベッドにて。

ユキ「私、窓側って初めてだね！」レイニー「そうだな……」

ユキ「ねえ、手見せて？」レイニー「え？ああ……」 ユキ「あの時と同じ……靴貸してくれたときと同じきれいな手……」レイニー「よせよ……照れるよ……」

ユキ、レイニーの左手の傷痕に気づく。

ユキ「！！」

レイニー（まずい……）

ユキ「……」

レイニー「昔、だよ……へゲル団にいたときにつけたんだ……今は……やってないよ……」ユキ「……」

レイニー「……」

ユキ「隠し事するのは仕方ないと思う……けど、一度言ったことばは元には戻らないよ……」

レイニー「……」ユキ「信じるよ？」 レイニー「……ごめん、さっき外でつけたんだ……」ユキ「……」 レイニー「……ごめ

ん」ユキ「手見せて！」

レイニー「え？」

ユキ「私はレイニーの苦しみは理解してあげられない……一生無理だと思う……」レイニー「……」 ユキ「けど、こうやって手握ることはできるから……」レイニー

「……」

マリア「ダメね……あの子、もっと強くならないと！」モーア

「次は何をされるんですか……？」マリア「モーア！私の

ために動いて！」

モーア「はぁ……」

2017 年 4 月 2 日 レイニー、家庭教師の帰り道にて

レイニー「……？」 モーア「レイニーだね？」レイニー「誰だ？」

ザリア「ごめんなさいね……」

レイニー「？？？？？」

ザリア「さあ、言って？あなたは誰のために生きてるの？」レイニ

ー「……ザリア様です……」

モーア「さあ、行こうか？君が強くなるための、壮大な物語の始まりだ……」

短編小説 風雪の愛

第Ⅰ部 第1 章誕生日 第2

章 邪悪なる光の石

第 3 章 愛しき人よ

第Ⅱ部

第 1 章 消えた愛しき人第

2 章 憎しみ 第 3 章 死とい

う選択第

4 章復活の種

第5 章強さ

エンディング

＜主要登場人物＞

レイニーユキクレアマイリオジャック

シュタインアルベルザリアサニーモーア

マリア

第Ⅰ部

第1 章誕生日

2016 年 12 月 18 日。冬の寒い日が続くが、世界は平和そのものだ。2015 年 12 月に起きたレイニーやユキたちとマルチン（ジャック）の衝突から 1 年

が経った。ジャックはあの世へ行き、ユキは現世に黄泉がえり、全ては平穏な生活の中に消えようとしていた。

レイニーはへゲル団には戻らず、その知識を活かして、家庭教師として生計を立てていた。家は持たず、町の宿屋を転々とする生活を送っていた。1 週間に

10 人ほどの生徒を持っていた。

レイニーはある街の夜にたたずんでいた。その日泊まっていた宿から出かけて、散歩をしていた。何も変わらない平凡な日々が続いていた。レイニーはこの数年

間、マフィアとして戦いの中で生きていた。だから、このような平坦な日々には慣れていなかった。時々、生きていて意味があるのかと思うこともあるくらいだ。

「俺ってなんのために生まれてきたんだろう……」 その変わらない日常が再び変わろうとしてい

た。

レイニーが街を歩いていると、後ろから誰かが走ってくる音が聞こえた。レイニーは腰につけてあるムチに手をやり、後ろを振り向いた。（誰だ……へゲル団か？マルク団？ジャックの手下の生き残りか……？）レイニーは

いつ命が狙われてもおかしくないという闘志のようなものを持っていた。

「レイニー！」

聞き覚えのある声、懐かしい声にすぐ誰かわかった。

「ユキ！」

ユキと友人のクレアが立っていた。

「わあ！私のこと覚えてくれていたんだね！」 ユキのその無邪気な声を聞くのは久しぶりだった。

（忘れるわけがない……俺を闇から抜け出すきっかけをくれたユキのことを……）レイニーはそう思った。

「久しぶりだね！」 クレアが口を開いた。「あ……クレアさんも」

レイニーは少しクレアのことが苦手でいた。ユキとクレアは 2 人とも明るい性格だが、レイニーはクレアにはなぜか苦手意識を持っていた。

「もう、その『さん』って言うのやめてよ！」 クレアが笑っ

た。

レイニーがユキに何を話そうか考えている最中、ユキは興味津々そうにレイニーを見ては「本物だ～」「すご～い」などと言っていた。

（全然変わってないな、ユキは……)レイニーは安心した。

「ねえ、今からクレアの家に来ない？」 レイニーは不意を突かれた。宿には日が変わるまでに戻ればよかった。レイニーが躊躇していると、ユキは強引にレイニーの腕を引っ張り、「行こうよ～ 行こうよ

～」と甘えてきた。レイニーは困惑しながら、少し嬉しくなり、ユキたちに従うことにした。

レイニーたちはクレアの家に着いた。クレアは養護施設に住んでいたが、2016 年 4 月からユキの住む教会の近くのアパートで 1 人暮らしを始めた。真ん中

にリビングルームがあり、左側にキッチンとバスルーム、右側に 2 つ小部屋があった。

リビングルームの椅子にレイニーとユキは腰かけた。クレアは飲み物を用意している。ユキは笑顔でレイニーを見つめていた。レイニーは恥ずかしくなって目をそ

らした。

「ユキは……その、変わってないな……」 レイニーが静かに声を出し

た。

「レイニーも変わってないね！その照れながら笑うところとか！」 ユキがそう言うと、レイニーは驚いて自分の口に手をやった。笑顔など当分忘れていた気がしたからだ。ユキはそれを見て、一層笑顔を強めた。

2 人はお互いの近況を語り合った。ユキは教会で暮らし、花売りを続けているらしい。レイニーが家庭教師をしていることを伝えると、ユキは「すご～い……」と感心した。それにレイニーは嬉しいながらも、照れるしかなかった。

クレアがコーヒーと紅茶 2 つを持ってきた。レイニーは眠そうにしていた。ユキがそれに気づいた。

「眠い？ごめんね……無理やり連れてきちゃって……」 レイニーはいやいやと言った。

「横の部屋でちょっと休んでもらう？」 クレアが言った。レイニーは申し訳なさそうに、「お願いする」と小さな声で言った。レイニーはリビングルームの横の 1 室にあるベッドで眠ることにした。

レイニーが寝ている間、ユキとクレアは女性同士の語り合いに花を咲かせた。その話のほとんどがレイニーのことだった。クレアが急に立ち上がり、レイニーの寝

ている部屋の扉をこっそり開けた。クレアは突然思いついたように行動するタイプだった。

ユキはダメだよと言いながらも、それについていった。クレアが眠っているレイニーの顔を見つめていた。

「見て！寝顔かわいいよ！」 クレアがそう言うと、ユキは「もう！」と言いながらも、レイニーを見つめた。

「ほんとだ……かわいい……」 ユキも静かに言っ

た。

「良かった……また逢えて……」 ユキはそうつぶやきながら、レイニーと出会った日のことを思い出していた。

クレアはレイニーの眠っているベッドの上側の物置にある物を見つけた。薬だった。薬は 2 種類あって、半分飲まれた後だった。

「なんの薬だろう……？」

そう言って、クレアは薬を手に取った。

「もう！ダメだよ、クレア！」

そういうユキに構わず、クレアは薬の名前を確認し、その部屋にあるパソコンのインターネットで何の薬か調べだした。

「もう！ダメだってば！」

ユキは少し怒っていた。クレアが突発的な行動をとるのはこれが初めてではないが、さすがにまずいと思ったのだ。

「これ……精神安定剤！」

クレアは薬の名前をインターネットで見つけた。「え？」ユキは驚いてパソコンを見つめたが、何を書いているかは分からなかった。ユキは生まれつき、文字が読

めないのだ。

もう 1 種類の薬は睡眠剤だった。しかも、精神安定剤も睡眠剤もこの世で一番強いもので、つまり重病の患者が飲むものだった。

ユキとクレアはお互いをしばらく見つめ合った。

「ねえ……レイニーの過去のことは聴いてる？」 クレアがそう尋ねると、ユキは首を横に振っ

た。

「じゃあ、見よう！『記憶の魔法』で！」 クレアが目を輝かせて言った。

「ダメだよ！勝手に人の過去を見ちゃ……」 ユキがそう言うと、クレアが言った。

「でも、レイニーもユキの過去を見たんだろう？お互い様だよ！」

そのことばにユキは困ってしまった。勝手に人の過去を見るのはよくない。しかし、興味はある。レイニーがどんなものを見てきたのか、それを知りたいとユキは

思っていた。

「やっぱりだめだよ……レイニー、怒るよ……怒るだけならいいけど、傷つけちゃうかも……」

ユキがそう言うと、クレアは笑って「いいんだよ！バレなきゃ！それにユキの方が知りたいでしょ？レイニーの過去！」と言った。ユキはそのことばに何も言えなか

った。

ユキは杖を取り出し、レイニーの頭の上にかざした。光が集まり、杖を移動させると、それに従って、光も移動した。ユキとクレアはリビングルームに行き、光の中のレイニーの過去を見た。

ユキとクレアは一部始終をじっと見つめていた。クレアは途中で涙目になった。ユキは必死に涙をこらえた。レイニーがへゲル団に入った日のことを映し出したと

き、扉が開く音がした。レイニーが出てきた。

「何やってるんだ……？」 ユキとクレアは何も言えず、黙っていた。

「さっきからこっそり見ていたんだ……それは、前のユキのときの魔法じゃないか？俺の過去か……？」 ユキは急いで杖を降ろして、光は消えた。

「ごめんなさい……私が……レイニーの過去を見たいって言ったの……」

ユキは下を見つめながら、静かに言った。クレアが「いや、違うんだよ！私が……」と言い出すと、ユキはクレアの目の前に手をやり、（何も言わないで）と心で

思った。

「ごめんなさい……」

ユキは申し訳なさそうにそう言うと、レイニーの怒声が部屋中に響いた。

「馬鹿か！！」

ユキはそのレイニーの怒声に驚いた表情をして、固まってしまった。

「前にも言っただろう？人の過去を穿り出すなって！」

レイニーは怒りに満ちて、怒鳴りつけた。クレアも固まってしまった。レイニーが怒った拍子に、腰につけていたムチが床に落ちた。レイニーはムチを拾った。

ユキがしゃべりだした。

「そのムチで……私を叩くの……？」 レイニーはぎょっとし

た。

「叩くの……？」

レイニーは何言っているんだ？という表情を浮かべた。

「ユキ？」

レイニーがユキに向かっていくと、ユキは取り乱して叫んだ。

「お願い！私を叩かないで！」 レイニーはハラハラしてしまった。クレアがユキの肩をポンと叩き、優しそうに言った。「ユキ……目の前にいるのは誰だい？レイニーだよ……」 ユキは「レイニ

ー……」とぽつりと言った。

「レイニーがユキのこと、叩くなんてあると思うかい？」 クレアのそのことばにユキは首を横に振っ

た。

「疲れてるんだよ……隣の部屋で休みな」 そう言って、クレアはユキをレイニーの寝ていた部屋に連れて行った。

ユキはベッドで眠り始めた。クレアがレイニーのところへ戻ってきた。レイニーが謝罪をしようとすると、クレアが「ごめん！」と言って、お辞儀をした。レイニーは何

が何だかわからなかった。

「私がレイニーの過去を見たいって言ったんだ！ユキは悪くないよ！」 クレアがいつもにはない真剣な目でそう言うと、レイニーはそうだったのか……とつぶやき、下を向いた。

「でも、ユキはどうしたんだ？あんなユキ、初めて見た……」 レイニーが焦りながらそう言うと、クレアは少し笑って言った。

「ユキの過去は見ただろう？」 レイニーはクレアのそのことばに少し罪悪感を感じながら、頷いた。 「レイニーはことばを大切にする

人って聞いたけど？」 レイニーはそのクレアのことばに戸惑った。

「だから、『馬鹿』って言われて、昔のことを思い出したんじゃないかな……？ムチでたたかれるの、ほんとに痛かったらしいし……」 クレアのそのことばに、レイ

ニーはすっかり参ってしまった。

クレアは笑顔を作り直し、言った。

「大丈夫！たまにあるんだ、ああいうときが！フラッシュバックっていうの？昔のことを思い出しちゃうの！明日になったら、ケロっとしてるよ！でも、ユキはレイニ

ーにまた会えて、ほんとに嬉しそうだったよ！」

レイニーはそうなのかな……？と言いながら、髪を掻いた。

レイニーは時計を見た。

「いけない！12 時までに宿に戻らなきゃいけないんだ！」 クレアは慌てるレイニーを笑いながら見つめていた。レイニーはアパートの入り口に行くと、クレアの方を振り返って言った。

「あの……ユキに伝えてくるか？」 クレアはなにを？というような顔でレイニーを見つめ返した。レイニーは下を向き、叫んだ。

「やっぱり……自分で言う……今日はありがとう！」

そのまま、入り口から出て行った。クレアは手を振りながら、笑顔のまま、レイニーが出ていくのを見つめた。

2016 年 12 月 23 日。レイニーはユキの住む教会を訪れた。手には何かを持っていた。ユキが教会の外でいた。花に水をやっていた。ユキは何も躊躇した表

情を見せず、レイニーに笑顔で「やっほー！」と言った。（本当にケロッとしてる……）レイニーは先日のユキを思わせないユキの素振りから、ユキの強さを感じ

た。

レイニーはユキの近くに行った。そして「ごめん！」と言うと、ユキも同時に「ごめんなさい！」と言った。お互い目を見つめ合い、笑った。

「なんで謝るんだよ？」 レイニーが先に聞くと、ユキが申し訳なさそうに言った。

「だって……レイニーの過去を観ちゃったし、あんな姿見せて……レイニー困ったでしょ？」 レイニーは首を横に振りながら、ユキと似た表情で言っ

た。

「いや、俺が悪いんだ……本当にごめん……バカとか言って……」 ユキが答え

た。

「いいよ……だって～私バカだもん！」 レイニーは首を横に振っ

た。

「ユキは馬鹿じゃない！俺がそれを一番知ってる……」

「うん！ありがと……入る？」 ユキは笑顔でレイニーを教会に招いた。

教会の真ん中ほどにある椅子に 2 人は腰かけた。レイニーは持っていた物をユキに見せた。

「あの……誕生日、今日だろ？」 ユキは驚いてい

た。

「覚えててくれたの？私の誕生日！？」

「記憶の魔法で、今日が誕生日だったから！それに、俺と一緒の日だろ？忘れるわけないよ！」そう言いながら、レイニーは花がいっぱい入ったかごをユキに渡

した。

ユキは目を輝かせて、笑った。

「ありがとう！」

本当に嬉しそうだったのを見て、レイニーは安心した。

「私、誕生日プレゼント貰うの、生まれて初めてなんだ……クレアも今まで、施設にいたから、この時期、クリスマスでしょ？だから、誰からも祝ってもらえなかったんだ……」

ユキのそのことばに、レイニーはユキの過去を思い出した。

ユキは急に立ち上がって、教会の講堂の横にある部屋に走っていった。レイニーはそれについていった。ユキの部屋だった。ユキらしい、色々かわいらしい飾りが

たくさんしてある部屋だった。

ユキは紙に包まれたある物をレイニーに渡した。「はい！誕生日プレゼント！」レイニーは驚嘆していた。

「覚えてくれていたのか……？」

レイニーが恐る恐るそう言うと、ユキは笑顔で頷いた。レイニーは小さなころ、村で住んでいたときは、よく誕生日を祝ってもらっていたが、しばらくはないことだ

った。

「開けて！」

ユキのそのことばに、レイニーは急いで、その紙をいじり始めたが、弾みでそれを地面に落としてしまった。レイニーは焦りと申し訳なさと恥じらいでパニック状

態だった。

「ごめん……」 レイニーのそのことばに、ユキは笑いながら、その物を拾った。

「意外と、ドジっ子なんだね！」 ユキのその笑顔にレイニーは「ごめん……」としか言えなかった。

「うんうん！ますます親近感湧いた！中のものを出してみて！」 ユキのその笑顔に包まれたことばに、レイニーは我に帰った。

紙の中から出てきたのは、1 冊の本だった。中を開いてみると、何も書かれてなかった。「レイニーは本好きだけど、こんな本は初めてなんじゃないかと思って！」

ユキのその無邪気そうな声にレイニーは少し笑って「ありがとう……」と言った。

レイニーが恐る恐る話した。

「その花、花言葉があるんだ……その……『仲直り』って意味なんだ……」ユキはそのことばに笑顔を作り直して「うん！」と言った。

（本当の花言葉の意味は……「私を受け入れて」って意味なんだけどな……）レイニーは心の中でそう思った。

しばらく、ユキの部屋で 2 人で語り合った。ユキは始終笑顔だった。

「こんな風にレイニーを部屋に入れる日が来るなんて思ってもみなかった！」ユキは純真そうに笑った。レイニーも少し笑顔を見せた。 少し間をおいて、レイニーが言った。

「あの……初めに言ったこと、嘘だからな……」 ユキが返

す。

「何が？」 レイニーは静かに言った。

「あの……嫌いって言ったこと……」 ユキは笑ってい

た。

「はじめは嫌いだったんでしょ？」 レイニーは首を横に振って、強く言った。

「違う！本当に……なんか、ユキは俺にはまぶしすぎて……あんなこと言ったんだ……」 ユキはやはり笑顔だった。

「わかった！」

レイニーが続ける。

「だから……俺のことも……嫌いにならないでくれ……」

そう言って、レイニーは顔を下に向けてしまった。ユキは不意を突かれたようだが、少し間をおいて、レイニーの頭を撫で始めた。（かわいい……レイニーってこんな表情見せる人だったんだ……）頭を上げたレイニーは、弱弱しい表情を浮かべていた。

「大丈夫！私、レイニーのこと、好きだよ！」 ユキのそのことばにレイニーは「え？」と言った。

「人間的に……って意味だよ！」 ユキはそう笑った。屈託のない笑顔だった。

「ああ……分かってるよ」レイニーはそう言って、少し笑った。

「ユキはどうしていつも裸足なんだ？寒くないのか？」 レイニーがずっと疑問に思っていたことを尋ねた。ユキは笑いながら言った。

「えへへ、内緒。でも大丈夫だよ！」 話はさらに進んで

く。

「今まで男の人と付き合ったことはないのか？」 レイニーがそう聞くと、ユキは笑顔で首を横に振った。

「告白されたことはあるけど……街の人にね！」 ユキのそのことばに、少しがっかりした自分の姿を見せまいとレイニーは必死に平静を保とうとした。しかし、次のことばにレイニーは驚愕の思いをさせられた。

「私は、王子様を待ってるの！昔、私を助けてくれた王子様を！」 レイニーは意味が分からなかったが、深くは聞かないようにした。これ以上聞くと、自分が傷つくと思ったからだ。

「レイニーこそ、誰かと付き合ったことはないの？」 ユキは興味津々そうに聞いた。レイニーは「ないよ……」と冷や汗をかきながら言った。「ふ～ん……レイニー、誠実だから、モテそうなのに……」 ユキのそのこ

とばで少しレイニーは寂しさを感じた。

少し間が出来た。ユキが意を決したように、レイニーに尋ねた。

「あの……ごめん。前、ちょっとレイニーの薬を見ちゃった」レイニーははっとした。「精神安定剤と睡眠薬のことか……？」 レイニーはゆっくりと聞いた。ユキは静

かに頷いた。

また間が出来た。ユキがその沈黙を破った。

「何を苦しんでるの……？」 ユキは真剣そうにレイニーを見つめた。レイニーが静かに話し始めた。

「時々、昔のことを思い出すんだ……俺は他人を不幸にしかできないんじゃないかって……」 ユキはレイニーを見つめ続けた。そして口を開い

た。

「そんなことないよ！私、幸せだよ！」 レイニーはユキのそのことばが情けのように聞こえた。ユキはそれを感じ取ったのか、話し始めた。

「私、男の人って、みんな強くて怖いのかと思ってた。レイニーみたいに繊細で優しい男の人……初めて！」 レイニーはそのことばに驚きを隠せなかっ

た。

「俺は……優しくなんかないよ……ただ、他人に嫌われたくないだけだよ……」 レイニーはそう言って下をうつむいた。しばらくして顔を上げると、ユキは笑っていた。「でも、他の人を傷つけようっては思わないんで

しょ？」 ユキのそのことば

にレイニーは静かに言った。

「嫌われたくないからな……」 ユキは笑顔でそれに返し

た。

「人を傷つけようとしないだけで、優しいよ！優しい男の人に出会えて、私、幸せ！」レイニーはしばらく考えて、「ありがとう……」と言った。

夜遅くまで 2 人は語り合った。12 時前にレイニーは教会を後にすることにした。ユキは最後まで笑顔を崩さなかった。少し歩いて、レイニーはユキの方へ振り

返った。

「誕生日おめでとう、ユキ！」 ユキは笑顔を一層強めた。

「誕生日おめでとう、レイニー！」

それからレイニーは後ろを振り向かずに、前へと進んだ。

第 2 章 邪悪なる光の石

2016 年 12 月 26 日、レイニーはユキからもらった空白の本を見つめていた。

（これ、どう使うんだろう……） ユキと別れてから、レイニーはずっとユキのことを考えていた。ユキのことが頭から一日中離れなかった。

（王子様か……） レイニーはそのことばを思い出すたびに、がっくりした。家庭教師の授業をしているときでさえ、ユキのことを考えていた。教科書に「雪」ということばが出てくる

と、敏感に反応してしまう自分が情けなかった。

その日、夜宿で寝る前に、ベッドで横たわりながらユキからもらった本を眺めていた。（あれ？1

ページ目に「あ」と書いてある。何も書いてないんじゃなかったっけ……？） 不思議そうに、レイ

ニーはその本を見つめていた。

すると、本の 1 ページ目に文字が浮かび始めた。「見えてる？」レイニーは身体を起こした。見間違えじゃない。「見えてる？」と書かれてある。しばらく変化はな

かった。レイニーは思い立って、ペンで「はい、見えてます」と書いた。

すると、新しい文字が浮かびあがった。「母親に敬語っておかしくない？」レイニーは何が何だかわからなかった。「私よ、マリアよ……」

「母さん！」

レイニーはベッドから飛び出して、机に向かった。

（どうして、母さんが？こんな本に？） しばらく応答がなかったが、また文字が浮かび始めた。「良かった見えてるのね。久しぶりね。お母さん、あなたのことずっと見てたのよ」レイニーは今起こってい

る状況を呑み込めずにいたが、その「マリア」のことばを信じることにした。何が起こっても不思議ではない世の中だとレイニーは身体で知っていた。

「いっぱい失敗したわね」レイニーは顔が赤くなった。母親のマリアは天国で、自分のことをずっと見ていたのだろう。急に恥ずかしくなってきた。

「でも素敵な出会いもできたわね」レイニーは身体が熱くなってきた。ユキのことを言っているのはすぐにわかった。

「ユキちゃんを現世、つまりあなたたちの世界に戻す説得をしたのは私よ」レイニーの眉がぴくんと動いた。ユキの部屋で話しているときに、ユキは黄泉の世界に

行き、謎の女性が助けてくれたということをレイニーは聞いていた。それがまさか、自分の母親のマリアだったとは……。

「よく聞いて。いや見てか。ユキちゃんは心配事を持っているの……」何を？とレイニーは考えた。

「自分が魔王の生まれ変わりであることが嫌なの。自分のことが嫌いなの……」レイニーは妙に納得した。いつも明るく天真爛漫で無邪気で楽しそうに見えるユ

キだが、心に闇を抱えていることもわかっていたからだ。

「あなたがユキちゃんを救うの……」レイニーはいぶかしんだ。

（本当に俺ができるのか？） そう思ったとたん、マリアの文字が急に口調を変えて言ってきた。「あなた、ユキちゃんにもらってばっかり。少しはユキちゃんに与えてあげないと……」自分の心

まで読まれていることに驚いたが、レイニーはその決心をした。

「どうすればいいんだ？」レイニーはペンで本に書いた。「邪悪なる光の石を壊すの。それでもうユキちゃんが魔王に変わることはないわ！」レイニーは納得した。

邪悪なる光の石とは、魔王の生まれ変わりであるユキに持たせると、ユキの邪悪なるパワーを引き出して、ユキの善の心を奪い、魔王と変えてしまう石のこと

だ。昨年の戦いで、ジャックが言っていたことを思い出した。

（いつかまたユキの邪悪なるパワーを呼び起こそうとする輩が現れる） そう、あの石がなくなれば、ユキは魔王でなくなるようなもの

だ。

「どこにある？」レイニーが急いでペンで本に書いた。「マルク団の跡地……あそこの奥深いところに眠ってる」レイニーは地図で調べた。かつてマルク団がアジトとしていた土地は立ち入り禁止の廃墟になってはいるが、この街の隣街にある。場所も調べた。

「母さん、行ってくるよ！」レイニーはペンを走らせた。マリアからは応答はなかった。レイニーは本を持ったまま、その足で走り始めた。

2016 年 12 月 27 日夜、レイニーは隣町に着いた。ひたすら歩いて、隣街までやってきた。レイニーは 1 日かけて街から街まで歩いていけるほど、自分にパワーがあるのが不思議だと感じていた。そして、地図で見

たように、マルク団のアジトの跡地へとやってきた。門には警官がいて、誰も入れないようになっている。

レイニーは風の魔法を使った。近くの建物に置いてあった鉄の山を風で吹き飛ばしたのだ。

「なんだ？何が起こったんだ？勘弁してくれよ……」 警官は鉄を拾おうと、場所を離れた。そのすきに、レイニーは見つからないように、アジトの跡地へと向かった。

全てが廃墟になっていて、ところどころに血の痕がある。

（ユキの血もあるかもしれないな……） レイニーは少しつらい感情を抱きながら、邪悪なる光の石を探した。

奥の方までやってきた。恐らく、マルクが滞在していた部屋だと思われる少し他の部分とは印象が異なる空間だ。レイニーは直感的にこの空間に邪悪なる光の

石があると思った。

しばらく、レイニーがしゃがみながら、がれきを手探りで探っていると、人間の足が見えた。顔を見上げると、1 人の中年の男性が立っていた。

（やばい！警察か？）

そう思って、立ち上がると、その男性は急にレイニーを殴りつけた。

「何するんだ？」 あまりダメージはなかったが、少しの間倒れ込んでしまった。

「あんたは誰だ？」 レイニーが叫ん

だ。

「名前を言うなら、先に言えよ」 中年の男性が

言った。「俺はレイニーだ……」

中年の男性は不敵な笑みを浮かべた。

「ふん、風の勇者か……」 レイニーは驚い

た。

「どうして、俺のことを？あんたは誰だ？」

そのレイニーのことばに不敵な笑みを浮かべたまま中年の男性は小さな声で言った。「私はシュタイン。マルクの息子だ……」 レイニーは驚愕の思いを抱い

た。しばらく黙り込んでしまった。

「お前たちがマルク団を亡ぼし、息子を死へと追いやった……この恨みは返してもらうぞ」 シュタインはそう言って、レイニーに襲い掛かった。レイニーはムチを取り出し、シュタインを殴りつけた。シュタインはあっけな

く倒れた。

「ふん、なかなかだな……ならばこれならどうだ？」 そう言ったシュタインはポケットから小さな杖を取り出し、天に向かって突き刺した。黒い光が集まってきて、それは人の形になった。それはジャックだった。

レイニーは何がなんだか分からなかった。

「記憶の魔法でジャックを蘇らせたのだ。いわば、『記憶のジャック』か？」 ジャックとシュタインはレイニーに襲い掛かった。レイニーは風の魔法でかまいたちを作り、ジャックとシュタインにぶつけた。シュタインはその場で倒れ込んだ

が、ジャックは平気そうだった。

「俺は記憶の中でしか生きていない。お前たち現世の人間とは違う。俺にダメージを与えることは無理だ！」 そう言って、ジャックはナイフを取り出し、レイニーの

腹を刺した。レイニーはうずくまり、うめき声をあげた。その傷の部分にジャックは何度も蹴りを入れた。レイニーは何度も腹をけられ、意識が朦朧としてきた。ふと、もってあった例の本のページが開いた。そこに文字が浮かび上

がった。「私の息子まで殺すなんて、そうはいかないわよ」すると、本から真っ白な光が立ち上

がり、また人の形になった。

「母さん！」

それはマリアだった。少し光がかって見えにくいが、確かにマリアだった。

「レイニー、久しぶり。でも今は挨拶なんてしてる場合じゃないわ」 そう言い、レイニーの腹に手をやっ

た。

「痛い！」

レイニーはマリアをにらんだが、すぐに傷口はふさがれていった。

（回復の魔法……）

「あのときの決着をつけるわよ、ジャック！」 マリアが威勢の良い声で言っ

た。

「は？あのとき、お前は負けただろう？俺が殺したんだからな。のこのこ出てきやがって。お前なんかに何ができる？」

レイニーは倒れ込んだまま、マリアとジャックが対峙するのを見ていた。シュタインが動き出しそうだったので、レイニーは風の魔法で、シュタインを遠くへ吹き飛

ばした。

「あなた、ユキちゃんが好きなんでしょ？」

マリアのそのことばに誰もが驚いた。ジャックはそれまでの不敵な笑みをやめて、急にシリアスな顔になった。レイニーもマリアが突然言い始めたことにことばが

出なかった。

「ユキちゃんが好きだから、自分のものにしたいんでしょ？あなたにとって、魔王の復活なんて、どうてもいい。ただ、ユキちゃんを彼女にしたいだけ……」 マリ

アは自信をもって言った。

皆、しばらく黙っていたが、沈黙を破ったのはジャックだった。

「それがどうした？俺はあいつの見た目に惚れたのさ。俺はあいつを自分の思い通りにしたい。自分だけの奴隷にしたい。あいつをコントロールしたいだけだ」

ジャックの声は少し涙ぐんでいた。 マリアが少し笑みを見せて言った。

「残念ね。そんなの愛じゃないわ。この子はね、レイニーはユキちゃんの心が好きなの。勝てると思う？」 そのことばが放たれたとたん、ジャックは「うるせーー！」と叫びながら、マリアに向かっていった。しかし、マリアの

周りにはバリアのようなものが築かれていて、

ジャックはマリアに触れることすらできなかった。

「かわいそうね……愛を知らない人は……大人しくしたら、こんな魔法を使わなくて済むけど……」

ジャックはひたすら発狂していた。すると、マリアが両手を天にかざし、光が舞い込んできた。その光に誘導されるように、ジャックは空中へと浮いていった。

「なんだ？これ？おい、なんだこれ？」

ジャックはそのまま光に導かれて、空へと消えていった。

一部始終を自分の目で見ていたレイニーだが、何が起こったのかを理解するのは不可能のようだった。するとシュタインが起き上がった。レイニーは身構えた。

シュタインが残念そうに言いだした。

「持って行け。邪悪なる光の石……俺は父上に言われて、これをここでずっと守っていた。だが、もう必要はない……」 そう言って、自分のポケットの中から、石

を取り出し、レイニーに投げてきた。見ると、ただの石だった。

「その石を魔王の生まれ変わりに持たせると、その石の持つ物質が魔王の生まれ変わりの身体に反応して、身体をまずは作り替える。身体と心はつながってい

る。邪悪な身体になった魔王の生まれ変わりは、やがて心まで支配されるということだ……持って行け」

レイニーはあ然としていた。さっきまで殺気立っていたこのシュタインという男の変貌ぶりもそうだが、今まで起こった出来事が不可解でならなかった。

レイニーは光に包まれたマリアと一緒に街へと戻ってきた。2 人はマリアが殺された現場である川へやってきた。「ここから、あなたとユキちゃんの物語は始ま

ったの……」 マリアが少し笑ってそう言った。

「あの、俺、ユキのことは……」 レイニーが照れながら言うと、マリアは笑いを強めて言った。

「あの子がいないと生きていけないでしょ、今のあなた？」 レイニーはしばらく黙っていたが、すぐに照れながら頷いた。

「天使みたいな子ね……」

マリアのことばにレイニーはやはり照れながら頷いた。

「これで終りね！」 そう言って、マリアは邪悪なる光の石を思い切って、地面に落とし、それは粉々につぶれた。その粉々になった痕を丁寧にマリアは拾った。

「これは天国へもっていくわ。今の私ができるのはこれくらい……」 マリアが笑いながら言っ

た。

「いや、十分だよ。でも、あの本はなんだ？母さんは生き返ったのか？」 レイニーは少しわくわくしながら訪ねた。マリアはレイニーの頬に手をやり言った。

「生き返ってはないの。あの本は現世とあの世を繋ぐ本。なかなかの骨董品だわ。でも、魔法を使える人にしか使えない。あの本でしか、あなたとは交流が出来

なかった」

レイニーは不可思議そうに言った。

「でも、今目の前にいる……」

マリアは言った。

「これもあと少しで終わるわ。私は使命を果たした。もう行かなきゃいけないの……」 レイニーの目から急に涙が流れ始め

た。

「嫌だよ……いかないでよ。俺は母さんとずっと……」 レイニーはそう言って、マリアの手を取ろうとしたが、マリアがそれを拒んだ。 「レイニー……強く生きて。あなたは

もう大丈夫。ユキちゃんがついてるわ！」 レイニーは涙を流してい

た。

「大きくなったね、レイニー。あなたとユキちゃんならこれから起きることに絶対に立ち向かって、乗り越えていける！」 レイニーは涙を流すので必死で、マリアの

話を集中して聞けなかった。

「ねえ、レイニー？ユキちゃんがどうしていつも裸足なのか知りたくない？」 マリアが言った。レイニーは涙を止めてつぶやいた。

「ああ、それは知りたかったことだ。母さんは知ってるのか？」 しばらく沈黙が襲っ

た。

「口で言うより、目で見た方がいいんじゃない？」 そう言って、マリアは手を前にかざし、光が集まってきた。

「これ、ユキちゃんの記憶。ユキちゃんがレイニーに見せてない記憶があるの……」 そう言って、レイニーはマリアと一緒にユキの過去を見た。

お別れのときが来た。

「次にあなたが私の所へ来るのはずっと先よ。あなたがおじいちゃんになった後よ。約束してよね！」 マリアのそのことばにレイニーは強く頷い

た。

「この後、あなたとユキちゃんには試練が訪れる。それを乗り越えなきゃいけないの……」

マリアが急に真顔になって言った。

「試練って？何？」 レイニーも真剣に尋ねた。

「まだ言えない。自分の目で確かめて。でも、あなたとユキちゃんなら乗り越えられる！」 レイニーは何を言っているのか理解できなかったが、そのことばを胸にしまっておくことにした。

「ある人の力を借りなきゃいけないけどね！」

マリアがそう言うと、マリアの身体が透明になっていった。

「母さん！母さん！」

レイニーが涙ながらに叫ぶ声を聴きながら、マリアは笑っていた。レイニーは涙を拭って、言った。

「母さん、大好きだよ…」

そしてマリアは微笑んだまま消えていった。

第 3 章 愛しき人よ

2016 年 12 月 28 日、レイニーはユキの教会を訪れた。いつもなら、ユキが花に水をやっている時間だが、今日はいなかった。

「入るぞ……」 レイニーは教会の門を開けた。行動にも誰もいなかった。奥のユキの部屋へ入っていった。 最初は誰もいないと思った。しかし、

地面を見ると、ユキが倒れ込んでいた。

「ユキ！ユキ！どうしたんだ？しっかりしろ！」 レイニーのそのことばにもユキは何も反応せず、ただ苦しむだけだった。

レイニーはクレアを読んできて、2 人でユキを街の病院へと送った。ユキはある部屋でいろんな機械につながれていた。レイニーとクレアはその部屋で心配そう

にユキを見つめた。しばらくすると、2 人の男が入ってきた。1 人は年老いた様子で、もう 1 人は助手のような若い男性だった。年老いた医者が言った。

「この子はもう助からないな……」 レイニーとクレアは立ち上がった。クレアが何か言いかける前にレイニーが叫んだ。

「どうしてですか？なんの病気なんですか、ユキは？」 年老いた医者が言った。

「ここは病院だ。もっと静かにしたまえ。この子は『ぺルベル』という病気にかかっている。難病だ。どうしてほったらかした？」 レイニーは座り込んだ。本で読んだことがあった。ぺルベルとは、身体の中のエネルギーが弱ま

り、生命の危機に陥る謎の病気だ。

「ユキは助からないの？」 クレアが叫んだ。年老いた男性は表情を変えず、冷酷に告げた。

「薬はある。しかし、高いぞ。君たちみたいな貧乏人に買えるかな？」 クレアはそれを聞いた途端、年老いた医者に殴りかかっ

た。

「あんた！私たちを何だと思ってんの？医者は人の命を救うのが仕事じゃないの？」 若い医者がまあまあと言いながら、クレアをなだめた。そして、若い医者が話し始めた。「薬を使うには 10000000 シェル必要

だ。これは全世界の医学界で

決められている……」 レイニーとクレアはお互いの目を見つめ合った。10000000 シェル？レイニーの 1 年の家庭教師の給料だって 1000000 シェルだ。その 10 倍を一気に

払うなど、不可能なことだった。

「まあ、無理なら諦めることだな……貧乏人には生きる資格はないのだよ……」

そう年老いた医者が言うと、クレアは何を言っているのかわからないように叫びだし、年老いた医者に飛びついた。また、若い医者がなだめた。 レイニーとクレアは部屋へ残された。眠っているユキと一緒に。

「10000000 シェルなんて……払えないよ」 クレアが弱気になって言った。レイニーはしばらく考えた。

「街の人たちに頼もう。みんなでお金を集めるんだ。ユキは街の人気者だ。みんな、ユキのために立ち上がってくれるはずだ！クレア、行こう！」 そう言って、レイ

ニーとクレアは病院を出た。

（くそう、母さんが言ってた試練ってこのことか……） レイニーは走りながら考えた。

年老いた医者は実は医院長だった。彼は医院長室で先ほどの若い医者と話をしていた。「まあ、運が悪かったんだな。ぺルベルにかかる病人は 100 万人に

1 人だ。どうすることもできないじゃないか……」 若い医者はただ同意するだけだっ

た。

「しかし、あそこにいた青年はあの女の彼氏か？」年老いた医者は訪ねた。

「いえ、彼氏かどうかは分かりませんが、名前はレイニーというらしいです……」 若い医者がからかうような笑みを見せて言っ

た。

レイニー……」

年老いた医者は何か考えているようだった。

レイニーとクレアは街中を駆け巡り、住民たちのところへ行った。「ユキちゃんが死ぬなんて、そんなこと許さねえ！

もっていきな！」

住民たちは金銭をめぐんでくれた。しかし、街中を走ったが、半分の 5000000 シェルしか集まらなかった。

レイニーとクレアはユキの部屋へ戻ってきた。ユキは少し目を覚ましていた。

「私……死ぬの？」 ユキは静かな消え入りそうな声で言った。レイニーは首を横に振りながら言った。

「薬があれば助かる！絶対、その薬を手に入れて見せるから！」 そう言って、ユキの手を強く握った。ユキは少し間をおいて言った。

「レイニーは……どうしてここまでやってくれるの？」 意外なことばだった。レイニーは何も言わなかった。そのまま沈黙が部屋を襲った。ユキは言った。

「今度は天国へ行けるかな？……それか、一度黄泉がえったから……また地獄行きかな？」 クレアが叫んだ。

「死ぬなんて考えるな！」 クレアは泣いていた。レイニーも泣き出しそうだったが、必死に耐えた。

「私が死んだら……レイニーに教会に住んでもらう……あの花たちのことお願いね……」 そう言って、ユキは目をつぶった。

「ユキ！」

レニーとクレアが叫んだ。

すぐに医者を呼んできた。例の若い医者がやってきて冷酷に告げた。

「昏睡状態だ……生命エネルギーがほとんどない……あとは、もう……わからないな……」 クレアは大粒の涙を流しながら、その場で座り込んだ。レイニーは苦しむユキと泣いているクレアを見て、いてもいられな

くなった。

レイニーは医院長室へと行った。ドアをノックすると、「どうぞ」という声が聞こえた。「なんだ、また君か？」医院長は不機嫌そうに言った。その直後、レイニーは土下座をした。

「お願いします！10000000 シェルは必ず、将来渡します！だから、あいつを、ユキを助けてください！」 医院長がレイニーに近づいた。

「あの子は君にとってどんな存在だ？恋人か？」 レイニーはそれを聞くと、顔が真っ赤になった。

「いえ、ただの友達です……」

「ただの友達にどうしてここまでする？」 医院長は冷静に聞く。レイニーは顔を下げたまま言った。

「大切な人です！」

すると、しばらく 2 人は黙り込んでしまった。すこししてから、医院長が言った。

「顔を上げなさい」

レイニーは首を横に振り、顔を下げたままだった。目もつぶっていた。

「顔を上げろ！」 そう言われて、レイニーは顔を上げた。

医院長が突然言い始めた。

「……マリアはずいぶん熱い男に育てたようだな……」

（マリア……？どうしてこの人が俺の母さんの名前を知ってる？） レイニーが考えていると、医院長は机の引き出しから写真を取り出した。そこに写っていたのは……自分の母親であるマリアの若い頃だった。隣に若い男

性が

写っている。それは……この医院長だった。

「先生は母さんを知ってるんですか？」 レイニーは恐る恐る尋ねた。医院長は答えた。

「知ってるも何も……君をこの世に生んだのは私とマリアだからな……」

（！？）

レイニーはしばらく黙り込んでいた。頭の中に何千ものことばが浮かんでは消えていた。しかし、それらが外に出されることはなかった。医院長が静かに語り始めた。

「私の名前はアルベル。私は昔、マリアという女性に出会った。しかし、20 歳のときに赤ん坊を身ごもってしまった。当時、私は大学生でね。マリアの親は厳格だ

から、私との結婚は認めなかった。私は赤ん坊を流産させようとマリアに言った。しかし、マリアは拒んだ。マリアは家を勘当された。だから、私は必死にマリアを助けようとしたんだ。街のはずれにあるエンデ村という島は、誰で

も受け入れると聞いた。だから、そこへ行け！と命令したんだ。マリアは悩んださ。でも、子どもを

育てていく決心は決まっていた。それで私と別れて、マリアは赤ん坊と一緒に島へ行った。その赤ん坊が君だ……」

「マリアが何者かに殺されたと聞いたとき、私は自分の罪を感じたさ。私が守ってやれれば、こんなことにはならなかったのにってね。だから、私はマリアに間接

的にお詫びがしたくて、必死に働いた。それで今は医院長にまで上り詰めた……」

「逢いたかったぞ……私の息子……レイニー」

ユキが目を覚ました。機械とユキの身体をつないでいたチューブのようなものは全て取り外されていた。ユキは不思議そうだった。そこへ、アルベルがやってき

た。

「あの……私、死んだんじゃ？」 ユキが恐る恐る尋ねた。アルベルが厳粛なムードのまま言った。

「ありがとう。君が私とレイニーを繋いでくれた。感謝する……」

ユキは意味が分からないまま、ただお辞儀をした。そして、アルベルから事の真相を聴いた。

「お父さん……レイニーのお父さん！」 ユキは笑顔になった。アルベルも少し笑っていた。アルベルは机の上にあるある物を指さした。 「それを見れば、あいつがどんな気持ちだった

かわかる……あいつのところへ行ってくれないか？」 ユキはその「もの」を見た途端、ベッドから立ち上がっ

た。

「レイニーはどこに？」

「前庭さ」

ユキが前庭に行くと、レイニーがベンチに座っていた。レイニーがユキに気づいた。

「よう。もう元気になったんだな？」 ユキは何も言わず、少し怒った表情でレイニーのところへと近づいて行った。そして、後ろに隠していたナイフを取り出した。

「これ、ナイフ……レイニー死のうとしてたでしょ？私が死んだら死のうとしてた！前の黄泉の世界のときもそう！」 ユキはレイニーにナイフを渡した。レイニーは

下をうつむき何も言わなかった。

「どうして、どうしてこんなことするの？もうやめて！レイニーが死んじゃったら、私、消滅しても罪を償えない……」 レイニーはやはり黙っていた。

「だって、レイニーと私はただの他人だよ？他人のせいで命を捨てちゃだめだよ！命を粗末にしないでって言ったでしょ？」 レイニーは「他人」ということばを聞

いて、拳をぎゅっと握った。

「もうやめて……お願いだから」

「嫌だ！」

ユキのことばにレイニーは叫び声で返した。

「何で？何でこんなことするの？」ユキは訪ね続けた。

「それは……その……」

レイニーは何も言えずにいた。すると、玄関にアルベルとクレアが立っているのが見えた。レイニーは意を決した。

「そんなの 1 つしかないだろう！？」 ユキは少し驚いたが、真剣な表情は変えずにいた。レイニーは下をうつむいてしまった。

しばらくして、ユキが語りだした。ユキの口元は少し緩んでいた。

「顔を上げて……ねえ、ちゃんと言って？ねえ？」 レイニーは今にも泣き出しそうだった。しかし、アルベルとクレアが微笑んでいるのが見えて、勇気を振り絞って言った。

「俺は……その、ユキが好きなんだ……ユキのことずっと考えてる……ユキは大切な人だ……」 しばら

く 2 人の間に沈黙が流れた。それをユキが破った。

「……忘れないでね。私は魔王で、レイニーは勇者。これは宿命なの。変えられないの……だから……」 ユキが言い終わる前に、レイニーが叫ん

だ。

「宿命とか、運命とか、そんなのどうだっていいだろう！？」

「俺がユキを好きなんだから、それでいいだろう！？」 ユキはじっとレイニーを見つめてい

た。

「それに……邪悪なる光の石は壊したよ。もうユキは魔王かもしれないけど、危険じゃない。嘘じゃないよ……」 そう言って、レイニーは邪悪なる光の石のかけらをユキに見せた。ユキはそれを手に取った。何も起こらな

かった。 「でも、ユキが魔王とか関係ないけどな……俺はユキの心が好きだから……」レイニーは髪を掻きながら、照れ臭そうに言った。

「どうして……レイニーは私を……泣かすの……？」 ユキは涙を一滴こぼした。涙は雪に変わっ

た。

「私ね、ずっと自分が嫌いだった……魔王の生まれ変わりだし……文字も読めないし……レイニーみたいに頭もよくない……」ユキのその最後のことばに、レイニーはしずかに首を横に振った。

「男の人って、みんな怖いと思ってた。みんな私を殴るのかと思ってた。今でも、街の人でも怖いことがある……でも、信じていいのかな……？」 ユキは涙を流し

ながら言う。

「俺のことは信じてほしいな……」 レイニーが静かに言

う。

「私、もうちょっと自分のこと好きになってもいいのかな……？」 ユキが涙をぬぐいながら言っ

た。

「ユキはユキのままでいいんだよ……」

そのレイニーのことばに、ユキの目から大粒の涙が飛び出した。

「ありがと……」 しばらく沈黙が続いた。またもやユキがそれを切り破った。

「私もレイニーのこと好きだよ！」

「ああ、でも人間的にって意味だろう？」レイニーは下を見ながら言った。

「結婚したいって意味だよ！」ユキがそう言うと、レイニーは持っていたナイフを落とした。

「え……？」

また沈黙が続いた。今度はレイニーがそれを打ち破った。

「え？いつから……？」 レイニーの頭の中はパニックになっていた。

「ずっといいなって思ってたけど、あのとき……黄泉の世界から黄泉がえったとき、レイニーがずっといてくれて……レイニーの愛を感じたよ……」 ユキは涙を流

しながら言い続ける。

「私、幸せだよ。レイニーみたいに愛に満ちた人に愛してもらって。これまでそんなこと……なかったから」 ユキがそう言い終わると、空から雪が降り始めた。こ

の土地で雪が降るのは珍しいことだった。

「ほら、祝福してくれてるよ……」 レイニーが照れながら笑って言った。ユキも笑った。

「なあ、ユキ？1 つだけ教えてくれ……あ、ちょっと嫌な過去のこと思い出さしちゃうかもしれないけど……」 レイニーが恐る恐る尋ねると、ユキは涙を流しなが

ら、満面の笑みで頷いた。

「ユキがマルク団にいたときに……ある少年に会わなかったか？」 ユキは思い出そうとしていた。

「ユキに靴を貸してあげた……」 ユキは思い出したようだった。

2005 年 5 月 4 日、ユキがマルク団にいたときだった。そう、サニーがマルク団に来た日のことだった。ユキは教科書が読めないことを馬鹿にされ、外に出されていたのだった。教官に言われ、裸足のまま外に出された。

そこへ、ある少年がやってきた。少年は尋ねた。「どうしたの？なんで裸足なの？」 ユキは言った。

「私、死ぬのを待ってるの……」 少年は混乱状態になって言った。

「ダメだよ、死んじゃ！僕もつらいけど、生きてたら楽しいこともあるよ！」

そう言って、少年は裸足のユキに自分のサンダルを渡した。ユキはそれを見て、少し笑った。少年は言った。

「じゃあ、行くね！」

ユキは名前を聞きたかったが、少年はもう行ってしまった。

「どうして、あのことを……？私、あれ誰にも言ってない……クレアにも……どうしてレイニーがそのことを知ってるの？」 ユキは驚きに満ちていた。

（そう……あのときもらったサンダルを汚したくないから、ずっと教会まで持ってきてた。それで裸足だったんだ。でも、なんでレイニーが？）

「あのサンダル……返してくれないか？」 レイニーが少し微笑みを見せながら言った。

「え……？ちょっとまだ整理できてない……あのときの……え？」 ユキは本当に混乱していた。

「ユキ、これは運命なんだ。宿命は変えられないけど、運命は変えられる。俺たちは出会う必要があったんだ……」 レイニーは笑いながら少し大きな声で言っ

た。

「嘘……あのときの……私が探してた王子様……うそ……」 そう言って、ユキは大声で泣き始めた。これまでの涙が小さな粒のように、大声で叫びながら泣き始めた。レイニーも涙の雨を流しながら、ユキを抱きしめ

た。

アルベルとクレアは 2 人を見て、お互いの目を合わせて笑った。

2016 年 12 月 31 日、レイニーとユキはエンデ村の島にいた。島はボロボロで、家の跡が少し残っているだけだった。レイニーとユキは大きな木の下にやっ

てきた。木は昔のままだった。ユキは靴を履いていた。ユキが聞いた。

「レイニーはいつから、私のことを好きでいてくれてたの？」 レイニーが答え

た。

「あの、叩かれたときかな……？」 ユキは申し訳なさそうな顔をした。 「俺のこと、本気で

怒ってくれる人なんて、なかなかいなかったから……」

2 人は大きな木の下で笑った。

ユキが突然言い出した。

「ねえ、キスしようか？」

レイニーは不意のことばに圧倒されていた。

「ねえ、キス～」

そう言うと、ユキはレイニーの頬にキスをした。レイニーの顔は真っ赤になった。

「レイニーかわいい！やっぱりレイニーはレイニーだよ！」

第Ⅱ部

第 1 章 消えた愛しき人

「クレア！レイニー来てない！？」

2017 年 4 月 2 日の夜遅く、ユキがクレアの家に駆けこんできた。

「は？来てないよ？」

クレアは就寝の準備をしていた。突然、ユキがやってくることは珍しくなかったが、今日のユキは表情がいつもと異なっていた。

ユキは笑顔に力がある。街で花売りをしているが、ユキの笑顔を見るためだけに、花を買いにくる人もいるほど、ユキの笑顔には定評があった。そのユキの笑顔

が、今日はみじんも見えなかった。

ユキとレイニーは教会で共に暮らしていた。レイニーはいつも家庭教師の仕事を終え、夜 9 時ごろには帰宅するが、今日は帰っていないというのがユキの主張

だった。

クレアはあまり動揺していなかった。ことがどれほど重大か理解できていなかったのもあるが、ユキがあまりに動転していて、それに拍車をかけるのはよくないと

感じていた。

クレアはすぐにユキがどうして自分の家を訪れたのか理解できた。ユキは紙を持っていた。そこには家庭教師の生徒の住所が書いてあった。しかし、ユキは文字

が読めなかった。クレアはその日の生徒の住所を調べた。

「すぐそこじゃん！」

クレアはこのことばを出した途端、後悔した。ユキの顔にどんどん不安な表情が浮かんでくる。家の近くなのに、どうして帰ってこない？クレアもすぐに同じ思い

を抱いた。

「どうしよう……私、レイニーにも捨てられたら……どこにも居場所がなくなっちゃう……」泣き出しそうなユキを見て、クレアは叫んだ。

「そんなこと、あるもんか！何か、あったんだよ！」

ユキはまだ不安そうだった。何か言いかけたが、ことばにならなかった。

「信じなよ！レイニーのこと！」 クレアのそのことばに、ユキは静かに頷いた。そして、2 人で家庭教師の生徒の家に行った。

家庭教師で受け持っている生徒の家に着くと、母親が出てきた。

「もう、先生は帰りましたよ……」

2 人の不安はさらに強まった。2 人はただ確認したかっただけと、母親に伝え、家を後にした。母親も 2 人の不安定な様子を感じ取っていたが、何も言わなった。

クレアとユキは教会の周りを走った。どこかに倒れているかもしれない……などと想像しながら、教会の周りを走ったが、何も出てこなかった。

レイニーは酒も飲まないため、街の酒場にいる可能性も少ないだろうというのが、ユキの見立てだった。試しに、教会の一番近くのバーに行ったが、やはり何も出てこなかった。

ユキの顔色が悪くなっていくのが、クレアにはわかった。ユキとレイニーはいつも一緒にいた。少しでも離れ離れになることがなかったのだ。クレアに恋人はいな

いが、親に早くに死なれたクレアには、その寂しさや虚しさが少し理解できているのだ。誰かに置いてきぼりにされることほど、この世に寂しいことはない…

… クレアはそう感じていた。

「今日はもう遅いよ……警察に行く？」 クレアはユキをなるべく刺激しないように、静かに話した。どんな刺激も、ユキの不安材料になりそうな気がしていた。

「うんうん……なんか、大事にしちゃいけない気がするから……警察はいい……家で待ってみる……」 ユキは静かにそう言った。クレアも頷いた。しかし、ユキはその場から動こうとしなかった。クレアは理解した。

「わかったよ！今日は一緒にいてあげる！」 クレアの思いやりにユキは目をこすった。

「ありがとう……」

2 人は誰もいない教会へと戻った。

教会のユキとレイニーの寝室へやってきた 2 人は、電気を消して、ベッドに一緒に横たわった。部屋の壁にはレイニーの描いた絵がたくさん貼られていた。ユキ

はクレアと一緒に眠ることが初めてだと気づいた。クレアは何も言わなかった。ただ、ユキを見つめて、口を緩めて笑っていた。クレアはユキの手を握った。そんな

クレアに安心感を覚えたユキは、少し冷静になった。

「寝ていいよ、クレア……」

ユキの静かなことばにクレアは目をつぶったが、眠ろうとしていないのは、ユキにはすぐ理解できた。

しばらく時間が過ぎた。

突然、部屋が明るくなった。2 人は驚いて、飛び起きた。

2 人の目の前には光り輝く 1 人の男が立っていた。

ユキはすぐさま、枕の横にあった杖を取り出した。クレアは枕をつかんで、武器にしようとしていた。

光が収まり、男の姿がよく見えるようになった。背の高い、40 歳くらいの男性だった。

「誰？」

ユキとクレアが同時に叫んだ。

「私はモーア。この世とあの世をつなぐ者だよ」 モーアと名乗った男性の不可思議な様子に、2 人は何も言えずにいた。 「レイ

ニーは頂いたよ」 少しずつしか喋らないが、突拍子もないことを言っているこのモーアという男性にいら立ちを見せたクレアが叫んだ。

「何言ってんの？あんた、正気？」 モーアは少し笑い、言った。

「このまま、レイニーが帰ってこなければ、君たちも信じるだろう？」 クレアはユキを見た。静かに震え、モーアのことばに耐えられない様子だったのがクレアにはわかった。

「おい！悪者だったら、ヒントくらい出せよ！ここに行けば、レイニーが助かる！さあ、来れるかな？……とか！」 クレアはなんとかユキの不安を取り除こうと、必

死に思いつくまま叫んでいた。

モーアはしばらく考えていた。その時間、クレアはユキを見つめた。ユキが平常心を壊しそうな限界点まで来ているのが、クレアにはひしひしと感じられた。

「こうしよう。マルク団の跡地に来なさい。何かがわかるかもしれない」 モーアはそう言い、手を宙にかざし、消えていっ

た。

ユキとクレアはしばらく呆然としていた。1 人で先ほどの光景を見ただけなら、夢物語だろうが、2 人で見たことによって、現実だと理解していた。

「行こう！マルク団の跡地へ！」 クレアはそれしかないというように、言ったが、ユキは少し怖がっていた。かつてユキはマルク団で地獄のような時間を過ごした。あの空気を吸うことになるなど、

ユキには考えられないことだった。

「ユキは教会で待ってな！私が行くか……」

言い終わる前に、ユキが叫んだ。

「私も行く！」

そのまま 2 人は旅立つことにした。夜 11 時くらいだった。マルク団の跡地はこの街の隣町にあった。歩いていけば、1 日くらいはかかるだろう。しかし、2 人

はなるべく早く行動してほうがいいという同意を精神上で行っていた。 クレアとユキが街を歩いていると、ある女性 2 人に声をかけられた。

「クレア、こんな時間になにしてるのよ？」

「あ！クレア！」

ユキは知らない顔だった。聞けば、クレアが養護施設にいた頃に仲良かった 2 人らしい。クレアは久しぶりの再会による高揚によって、あることを思いついた。

「リオ！あなた、今馬車の販売してるよね？1 つ貸してくれない？」 リオという長髪の女性にそうクレアは言った。ユキはこのリオという女性がマジメそうな性格をしているのを見抜き、ダメだよと言いかけた。

「実は、このユキの彼氏が悪いマフィアにつかまってさ！助けに行くの！」 その前にクレアが言ってしまった。リオという女性は真剣な顔になった。

「ああ、あなたがユキちゃんね！いや、彼氏が捕まったって、大事じゃん！私も行くよ！」 横にいた小柄な女性が言った。

「あ、マイも行く？」

横にいた小柄な女性はマイという名前らしい。リオよりはクレア寄り、つまり好奇心が強そうだと、ユキはすぐさまに感じた。

クレアとユキは詳しいことをリオとマイに話した。リオとマイは話を聴き終わるや否や、すぐに準備を始めた。

「安心しな！あの 2 人は施設の親友だから！強いしね！」

ユキはクレアが施設でどのような生活を送っていたかはある程度は聞いていたが、これほど信用されているとは知らなかった。ユキはクレアに心底感謝するしかなかった。

馬車も手に入り、4 人の女性はマルク団の跡地へと向かった。

第2 章憎しみ

馬車はリオが操縦した。馬車の中でユキとクレアとマイは話をしていた。

「レイニーってどんな人？」 好奇心旺盛なマイは動じることなく尋ねる。

「かわいい人だよ！」 話したくなさそうな雰囲気を見せているユキに気づいたクレアが代わりに答えた。ねっとクレアがユキの方を向くと、ユキも笑いながら頷いた。

半日馬車は走り、2017 年 4 月 3 日の昼、隣町へ着いた。馬車はさらに進み、ユキの誘導のもと、マルク団の跡地へ着いた。クレアはユキを気遣っていたが、

ユキは辛そうな表情は見せなかった。かつてこの地で精神的にも肉体的にも傷つけられた過去を持つユキだが、懸命に平静さを装っているようにクレアには見

えた。マイもリオもそんなユキの過去を知るはずはなかった。

馬車から降りて、4 人は跡地へ入っていった。門に警官のような人物が待ち構えていた。ユキは杖を取り出し、遠くの距離から警官めがけて光を放った。警官は

突然倒れ、眠り始めた。

そのすきに、4 人はマルク団の跡地へ入っていった。奥へ奥へと進んで行く。大きな部屋にたどりついた。そこに 1 人の女性と青年がいた。

「レイニー！」

ユキが青年の方に駆け寄った。すると、レイニーはムチをユキの身体にぶつかる寸前のところへ打ち込んだ。レイニーは黙っていた。ユキはあっけにとられて、そ

の場へしゃがみこんだ。

「大丈夫？」 ユキに駆け寄ったのはマイだった。クレアとリオもそれに続いた。

ユキはレイニーの顔を見つめた。ユキはレイニーと初めて会った時のことを思い出した。あの時のような、無機質な機械のような表情を見せている。

すると、隣にいた女性が話し始めた。

「無駄よ。こいつは私の意のままに操られているから！」 ユキたちは女性をにらんだ。明らかに悪意の様子がうかがえる女性だった。

「あんたはモーアって奴の仲間？」 クレアが叫ん

だ。

「仲間というか、同じ世界の同僚のようなものね」 女性が静かな声で話し

た。

「私はザリア。こいつは私のペットになったのよ」 ザリアという女性が不敵な笑みを見せながら言った。

ユキたちはその場で立ちすくんでいた。

「目を覚まして……」 ユキが小さな声でレイニーに話しかけた。レイニーは何も言わなかった。 「2 人で一緒に遊んだこと、

覚えてないの？」 ユキがやはり小さな声で話しかけるが、レイニーは沈黙を守っている。

「私の王子様じゃなかったの……？」

ユキは目をこすった。ユキの周りに雪が舞い散った。リオとマイはそれを見て驚いていた。しかし、それに驚ているどころではないことは皆わかっていた。

「目を覚ましてもらう！私と戦って！」

ユキがそう言うと、レイニーはそのことばを待っていたように、すぐに動き出した。風がレイニーの身体から巻き起こり、ユキを吹き飛ばした。

「大丈夫！？」

クレアたちがユキに駆け寄ろうとしたが、ユキがそれを手で制止した。

しばらくユキがレイニーに近づこうとするが、風で吹き飛ばされる光景が続いた。リオはそれを見て泣き始めた。

「ユキ、ユキがかわいそう……」 クレアは何も言わず、真剣な顔で光景を見つめていた。マイはそんなクレアを少し怖がったが、自分もその真似をした。

倒れ込むユキに、レイニーが近づいた。レイニーはムチをユキに向けた。

「やっぱりレイニーはレイニーだね……」 そのことばに一同意表を突かれた表情を浮かべた。一番驚く表情を見せていたのはレイニーだった。「レイニーが本気を出せば、私なんて一発で殺せるもん。そ

れに私のこと、絶対殴ろうとしないし……」 ユキは笑いながら、レイニーを見つめた。レイニーはユキから目をそらした。

突然、レイニーは天井めがけて、風を巻き起こした。天井の一部がレイニーめがけて落下してきた。

「レイニー！」

ユキがレイニーに駆け寄った。ぎりぎりのところで、2 人は無事だった。

ユキは倒れ込んだレイニーの真上で静かに身を下ろしていた。

「俺は……」 レイニーがこの場所で初めて声を出した。ユキはそれだけで少し嬉しそうに微笑んだ。

「俺の全てはザリア様だ。ザリア様が俺の全てだ。ザリア様の役に立てないなら、俺は……」 レイニーが言い終わる前に、レイニーの頬にユキの平手が飛んでいた。クレアたちは皆口を開けて同じ表情をして驚いていた。

「簡単に死ぬなんて言わないでって……何度言ったらわかるの？」 ユキは涙を流していた。涙は全て雪に変わっ

た。

「もういいわ。あんたは役に立たない」 ザリアが冷たい声で言っ

た。

「その娘は私が殺すから」 そう言うと、ザリアの腕が伸びて、ユキの首を絞め始めた。ユキはもがき苦しんでいる。

「死になさい。呪われた娘……」 ザリアはもう片方の手にナイフを取り、その手が伸びようとした。すると、レイニーがザリアめがけて、ムチを打ち込んだ。ザリアは倒れ、腕ももとに戻った。

倒れて咳込んでいるユキの身体を起こし、レイニーは言った。

「大丈夫か、ユキ？」

レイニーが元に戻ったのを感じ、ユキはそれまで見せなかった笑顔を見せた。

「作戦失敗ね。でもこれで勝ったなんて思わないでね。モーアは世界統一を目指しているの。彼を止めないと、あなたたちは絶望を見ることになるわ……」 ザリ

アがそう静かに言うと、ようやくいつもの調子を取り戻したユキが叫んだ。

「モーアは何者なの？」「この世とあの世をつなぐ者。この世の人間を全てあの世に送り込むことだってできるの。でも、狙いはこの世の人間の心を全て操るこ

と。あなたちに止められるかしら？」

ここまで秘密を話し続ける敵が不可解だったが、レイニーたちは黙り込むしかできなかった。そして、ザリアは静かに消えていった。

「俺は心が操られていたんだ……」

2017 年 4 月 3 日の夜、5 人はもとの街へ戻ってきていた。教会近くのバーでこれまでの苦労を労っていた。

「操られているときのことは覚えているの？」

「覚えてる……けど、あの時はどうしてもああやって動くしかできなかった……なんか、心だけ別物みたいな感じで、身体は確かにあるんだけど……」 ユキとレ

イニーが話し合っていた。リオとマイが飲み物を持って、戻ってきた。

「レイニーとユキ……なんか、初めて会うけど、久しぶりって感じがする！仲良しなんだね！」 マイが

2 人を見て笑った。レイニーは照れ臭そうに下を見た。ユキは笑みを浮かべていた。

「かわいい！本当にクレアたちの言う通り、こんなかわいい男の子、見たことない！」

マイは面白いものを見つけたように、レイニーにことばを浴びせ続けた。レイニーはやはり下を見つめていた。顔が真っ赤になり、それがまた、マイの好奇心を刺

激し続けていた。

「本当にかわいいわね……」 リオもマイに同調した。レイニーの顔は真っ赤になっていた。

少し間をおいてから、ユキとクレアが飲み物を取りに行った。向こう側でユキとクレアが大笑いしながら喋っているのが聞こえてくる。

「ユキ！おつまみの食べ物、取りすぎだよ！」

「もう～いいじゃん、クレア～！」 レイニーたちはそれを微笑ましく見つめていた。

「ユキの笑顔って素敵だね。なんか、笑顔に力があるというか……」 マイがそう言うと、リオが同意し

た。

「あの子の笑顔を見ると、こっちまで笑顔になれるわね……」 レイニー

は 2 人の話を聞いて、少し時間をおいてから言った。

「でも、意外と弱いところもあるんだよ……」 レイニーのそのことばに、マイとリオは信じられないというような顔をしていた。その「弱い」という意味を、それほど重要に思っていないようにも見えた。

レイニーたちの話が途切れたとき、彼らのところへ 2 人の見知らぬ中年男性が近づいてきた。

「あの子、お前の彼女か？」

1 人の中年男性がレイニーに尋ねる。この男も面白そうな物を見るようにレイニーを見ていたが、マイとは違い、嫌な気配がしていた。 レイニーが靜かに頷くと、もう 1 人の男性が大声で笑いながら言った。

「やめとけ。お前とあの子じゃ釣り合わねーよ。あんなかわいい子にはもっと、強そうな男が似合ってるんだよ。お前みたいな貧弱そうな若造に、あの子は幸せに

はできないよ」 突然見知らぬ者のところへやってきて、無責任なことを言い放つ、この 2 人の中年男性が得体のしれないもののように見えて、レイニーも、マイも、リオも呆気に

取られていた。

しかし、少し間を置いて、マイが勝気な態度を取り戻した。

「何なの、あんたたち？いきなり来て失礼じゃない？」 そうマイが叫ぶと、2 人の中年男性はその場で倒れ込んでしまった。マイとリオは酔っぱらって絡んできたのだろうと解

釈した。

しかし、レイニーはそう思うだけではいかなかった。突然、席を立ちあがり、外へ走っていった。突然だったので、マイもリオもレイニーの名前を呼ぶだけで、捕ま

えられなかった。

ユキとクレアが戻ってきて、レイニーの不在に気づいた。リオが丁寧にこれまで起こったことを説明した。それを聴き終わると、ユキは突然倒れている 2 人の中年男性をたたき出した。

「なんてこと言うの？あなたたち、なんなの？」

2 人の中年男性はその弾みで起き上がり、何が起こったのかわかっていない様子だった。

「俺、さっき身体が急に動き出して、あんなこと言ってしまったんだ……本当だよ！」 先ほどとは打って変わって優しそうな表情を見せる 2 人の中年男性を見て、ユキたちは何が起こったのかわからないでいた。一番早く

気づいたのはリオだっ

た。（この世の人間の心を全て操る……）ザリアの言ったことを 4 人の女性は思い出していた。しかし、今はレイニーを捕まえることだった。せっかく見つけたのに、これでは今までのことが無駄になってしまうと一同考えた。

外は雨が降り始め、風が強く舞っていた。

「絶対、教会に戻ってる！」 ユキは確信めいてそう言った。大雨を超えて、教会に向かうと、部屋に明かりがついている。ユキの予想は正しかったようだ。

部屋の扉をマイが開けようとした。そこへユキが止めに入った。

「ダメ！はいっちゃ！」

マイはユキの言っていることが理解できなかった。せっかく親切心で足を踏み入れようとしているのに……と少し不愉快に思った。

「たまにあるの……レイニーは……その『心の病気』だから……」 マイとリオは驚愕の表情でその場で立ちすくんだ。クレアは事情を知っていたので、納得しているようだった。

「レイニーは心が弱いの……精神安定剤と睡眠薬でようやく自分自身を保っているの……いつもお薬をポケットに入れてるの……」 ユキの続けざまの告白に

リオは手を口に当てていた。マイは下を見つめていた。

「こういうときは、冷静にならないと、あの人、ホントに壊れちゃうから……」

こういうことはよくあるような様子のユキに、他の女性たちは従うことにした。

ユキが静かに部屋の扉を開いて、他の女性たちは外で聞き耳を立てていた。ユキがレイニーに近づいていくのを、他の女性たちは感じ取っていた。

「何を苦しんでいるの……？」

ユキが静かにベッドで眠っているレイニーに語り掛けるのが聞こえてきた。

「うるさい！」

突然、レイニーが叫ぶ声が聞こえた。レイニーは穏やかそうに見えたので、その怒声にマイとリオはびくっとしてしまった。

「ねえ、教えてよ。何が苦しいの……？」

ユキは冷静に語り掛けていた。レイニーは何も言わなかった。

「また黙り込むの！？」 ユキはそれまでの声の表情を変え、大きな声で怒るように尋ねた。他の女性たちは思わず、扉を開けて、中の光景が気になって入っていった。

「レイニーはいつもそう！都合が悪くなると、黙り込む！自分のことしか考えてないんだよ！いつも人の顔色ばっかり気にして、自分を持ってない！私を心配して

るっていつも言うけど、それも嘘！私に嫌われたくないだけ！私のこと全然信じてない！そんなの愛じゃないよ！……憎しみだよ！」 そう言い放ったユキに、マ

イが駆け寄った。

「言い過ぎだよ！」 マイはハラハラしていた。レイニーの先ほどの声もそうだが、ユキのこのような怒声を聴くことなるとは思わなかったため、半分パニックだった。リオはその場で

下を見つめていた。クレアもユキのこのような姿は見たことがないようで、何か言いたそうだが、ことばが出てこないようだった。

突然、ベッドからレイニーは起き上がり、ユキの手をつかんだ。殴られると思ったユキは泣き出しそうな顔でキャッと言いながら、下を見つめた。

レイニーはユキの手を握りしめ、涙を流していた。ユキは予想外のレイニーの姿に動揺を隠せなかったが、なんとか平静を保っていた。しばらくして、レイニーが

つぶやき始めた。

「ありがとう……俺に……そんなこと言ってくれるのは……ユキだけだ……」 この不安定な青年の手をしっかりと離さないように、ユキは手を握り返していた。

「もう、ホントにレイニーは不器用なんだから……」

ユキはもう片方の手でレイニーの頭を撫で始めた。クレアとマイ、リオはそれをほほえましく見つめていた。

第 3 章 死という選択

レイニーとユキたちは困り果てていた。ザリアが最後に語っていたことを思い出し、モーアが現世の人間たちの心を支配し、世界を統一しようとしているという目

論見があることだけは分かっていた。そして、実際に人間の心が支配されている光景を見てしまった。

レイニーとユキたちはモーアの消息を探ろうとしたが、何もヒントはなかった。2017 年 4 月 4 日、モーアの周辺人物たちは姿を現さなかった。

その夜、レイニーとユキは街のはずれにある森の中にいた。

「1 つ気になってたことがあるの……」 ユキが尋ねた。レイニーは何？と聞き返した。

「レイニーは勇者の生まれ変わりってことは……勇者は地獄に落ちたってこと？」 ユキは恐る恐る尋ねているように見えた。レイニーは息を吸って、一気に語り始めた。

「俺が知ってるのは……勇者たちは魔王を倒した後、城の国王になったんだ。火と水と土の勇者は。でも、風の勇者は国王になることを拒んで、その後、人里離

れたところで 1 人で暮らし始めた。それから国王になった勇者たちは戦争を始めたんだ。人々はこれなら魔王に支配されている方がましだと思ったらしい。そうやって戦争をしている中、それぞれの勇者たちが直接的に対決するよ

うになった。ある大きな洞窟に集まって、お互いが頂上決戦をして、勝った勇者の国が世界を支配するってことに決めた。そこに風の勇者が現れて、戦争を辞めるよう説得した。でも、他の勇者たちは戦いを辞めなかった。そこで、

風の勇者は何か魔法

を使って、その洞窟自体を破壊したんだ。勇者たちは全員死んだ。風の勇者は自殺をしたってことだ。それで、地獄に落ちて、生まれ変わったのが…… 俺だ」

ユキは下をうつむいたまま聞いていた。レイニーの弱弱しくも、情の深い部分は、そのような平和主義的な風の勇者から来ているのだろうと感じていた。

「また、世界は支配されるのかな……」 レイニーが頭を掻きながら、言っ

た。

「私……この世界が好き。嫌なこともいっぱいあったけど、キレイなものや優しいものもいっぱい見せてくれた。そんなこの世界が好き。だから、支配されるのは

… … つらいな……」

2 人は黙り込んでしまった。沈黙が嫌に気になるレイニーは思いついたことを話し始めた。

「俺は……憎しみか？」

ユキは「うん？」と聞き返した。

「俺が持ってるのは……愛じゃなくて……憎しみか？」 ユキはしばらく黙り込ん

だ。

「自分ではどう思ってるの？」 ユキはいつになく困惑した表情で言った。

「わからないんだ！わからない……だから、教えてくれ！」 レイニーはユキに迫った。ユキはレイニーを見つめて言った。

「言いたくない……嘘、つきたくないもん……」 そのことばを消化できないまま、レイニーは「ユキ！」とユキの肩を握った。

そこへ、ユキの後ろから黒装束の男が 2 人現われ、ユキをつかんでいった。

レイニーの後ろにも黒装束の男が 2 人現われ、レイニーを倒れさせた。

「レイニー！」

その直後、ユキはレイニーの周りに灰色の光が現れるのを見た。レイニーはその外へは出ることが出来なくなった。どのような魔法を使っても、その灰色の光か

らは出ることが許されなかった。

森の奥から 1 人の男が現れた。

「モーア！」

レイニーとユキが同時に叫んだ。

「一言目のセリフが『君たちには失望した』か……」 モーアが困ったような表情で言っ

た。

「いくら待っても、私を見つけられないから、こうして来てやったんだよ」 すると、モーアは黒装束の男につかまっているユキの目の前に大きな剣を見せた。

「こいつは……殺す」

レイニーはそのことばより、恐ろしくて不安がる表情のユキを見て、叫んだ。

「何言ってるんだ？どうしてユキを……？」 モーアが語り始めた。

「私の標的は君だよ、レイニー。君の心の弱さを活用したかったんだ。君は怒りや様々な負の感情を起こすと、世界に影響を及ぼすようになっている。君が怒った

ときに、風が強く吹いた覚えはないか？」

レイニーは子どものときや先日のバーでのことを思い出していた

「君が負の感情を強めると、世界中に嵐が怒る。だから、私があえて手を出さなくても、君の心を壊してしまえば、世界は滅亡するというわけだ……」 レイニーと

ユキは黙って聞いていた。ユキの怖がる表情が、やはりレイニーには心配だった。

「ユキを殺せば、君の心は確実に壊れる。だから、君にユキを殺してもらおうとしたが、ダメだった。そこで、自ら手を下すことにしたのさ。世界中を破壊した後で、

生き残った少数の人間の心を支配する方が合理的だ。そうは思わないか？」 そして、モーアは剣の先をユキの胸に当てた。

「やめろ！」

レイニーは半分泣きながら叫んだが、どうしようもないとも考えていた。

ユキが突然声を震わしながら話し始めた。

「レイニー……よく聞いて……私はずっとレイニーの着てる服が好きだった」 レイニーは何を言っているんだという表情でユキを見つめた。突然話し始めたユキをモーアも不思議そうに見つめた。

「私、昔男の人にすっごく乱暴なことされて……レイニーはそんな男の人とは違うって思ってた……優しいことばしか使わないし……レイニーのことばが好きだ

ったの……でも間違ってるって気づいた。レイニーの中にあるのは愛じゃなくて、憎しみ……」 ユキは涙を流し始めた。しかし、口元は笑っていた。

「レイニーの方が……昔逢った男の人より怖いよ……」 レイニーは真剣な表情のまま、ユキを見つめ続け

た。

「私は……もうあなたのことを愛してないの……ごめん……」 全て話し終わったユキは何か満足そうな表情をしていた。一同固まってしまった。

突然、レイニーがポケットから何かを取り出した。20 錠ほど入っている睡眠薬だった。レイニーはその薬のケースを破り始めた。

「何やってるの？やめて……」

ユキが叫んだが、レイニーは止まらなかった。レイニーはその 20 錠の睡眠薬を一気に口の中に入れ、飲み込んだ。

「やめて！」

ユキの叫び声が響く中、レイニーは血を吐き出し、その場に倒れ込んだ。

モーアは一部始終を見終わると、黒装束の男にユキを開放するよう伝えた。レイニーの周りにあった灰色の光も消え、ユキは倒れているレイニーの身体を強く揺らしながら、名前を呼び続けた。だが、レイニーは動かなかった。

第4 章復活の種

「嘘つき！ユキはレイニーに自分のこと信じてないって言ってたくせに……愛してないなんて……」 マイがユキを平手打ちした。マイは叫びながら、教会から出

て行った。リオがそれを追いかけた。 レイニーは教会に運ばれ、ベッドの上にいた。生命確認装置という機械が繋がれた。レイニーの父であるアルベルがレイニーの診察を行っていた。

ユキはマイに叩かれて倒れていたが、体勢を取り直し、しゃがみこんだ。

「知ってると思うが、この睡眠薬はこの世で一番強い。1 錠飲むだけで、次の瞬間に深い眠りに落ちる。それをこれだけ飲めば……」 アルベルのことばに、ユキ

と横にいたクレアは絶望の淵に立たされた。

「昏睡状態だ。今夜持つかどうか……」 そう言って、アルベルは外へ出て行った。目をこすっているのがユキとクレアには見えた。

ユキはしゃがみこんだまま、地面の一点を見つめていた。横からクレアが抱き込むように、ユキに近づいた。

「私が……レイニーの心を壊しちゃった……」 ユキは雪崩が流れるように泣き叫び始めた。クレアはユキの身体をさすることしかできなかった。

夜が来た。クレアは教会の講堂の椅子で眠っていた。ユキはその場を動こうとしなかった。動かないレイニーの方をずっと、じっと見つめていた。ユキが立ち上が

り、レイニーに近づいた。レイニーの頬を撫でた。何の応答もなかった。

ユキの涙はレイニーの顔に流れ落ちた。その直後、レイニーの口が少し動いた気がした。ユキは夜の中、アルベルの病院へと走り、アルベルを呼んできた。 ア

ルベルが部屋に入り、レイニーの身体を調べている。その間、ユキも起き上がったクレアも次に出てくるアルベルのことばが何なのか気が気でなかった。

「ユキ……」 次のアルベルのことばは何でも呑み込もうと、ユキは覚悟した。

「よくレイニーを見ていてくれた……よく気づいてくれた……助かるぞ……」

そのことばにクレアが喜びの叫びをあげた。ユキは再びしゃがみこみ、涙を流し始めた。アルベルはレイニーの身体に刺激を送り続けた。

2017 年 4 月 5 日の朝、レイニーは目を覚ました。その日、ユキだけが部屋にいた。ユキは一言も話さなかった。レイニーも黙っていた。しばらく時間が過ぎ

た。

突然、部屋の扉が開いた。クレアが来たと思ったユキは跳ねながら扉を開けた。そこにいたのは、モーアだった。

「レイニーは動かないで！」 そう言って、ユキは杖を急いで取りに行き、モーアに向けた。ユキは何も言わず、杖をモーアに当て続けた。

「渡すものがある……」 そう言うと、モーアは小さな箱をユキに渡した。その中には種が入っていた。

「『復活の種』だ。この世とあの世をつなぐ私だけが作れるものだ。レイニーが元気になったら、大好きな本で調べてみろ。使い方がわかるはずだ……」 モーア

の顔には覇気がなかった。ユキもレイニーも警戒していたが、モーアからは闘志が感じられなかった。

「世界の統一はやめだ。私は目標を失った。もう二度と会うことはないと思うが、達者でな……」 そう言うと、モーアはその場で消えてしまった。

2017 年 4 月 7 日、レイニーは身体が動くようになったので、部屋の本棚から百科事典を取り出した。確かに「復活の種」という伝説上の種のことが書いてあった。 「この種を植えて花が咲くと、赤い光が飛び出す。そ

の光をつかみながら、復活させたい人間の名前を心の中で呼ぶと、その人間はあの世から現世に戻ってくる

… … 」

レイニーは信じられないようだった。しかし、ユキは笑っていた。

「使ったら？お母さんのこと、復活させたいんでしょ？」 レイニーは呆然としたまま、ユキを見つめた。

「たまにはわがまま言ってもいいんじゃない？結果的にレイニーは世界を救ったんだから！これで家族で暮らせるよ！」 ユキは無邪気に笑っていた。レイニーは「わ

かった」と言い、教会の花壇に種を植

えた。

その夜、もうすでに花が咲いていた。レイニーとユキが近づくと、確かに赤い光が現れた。ユキはレイニーに目配せをした。レイニーは頷いて、その光を手にした。

レイニーは目をつぶり、何かを考えているようだった。ユキはずっと待っていた。しばらくして、光から新たな光が飛び出し、人の形になった。それは少しずつ姿が

見えるようになってきた。

ユキは微笑みながら、光を見つめた。しかし、その姿が明確になると、ユキの表情から微笑みが消えた。その姿から現れたのはサニーだった。

サニーは赤い服を着ていた。目をつぶっていたが、しばらくして目を開けた。そして、レイニーの側に寄っていった。

「私でよかったの？」 サニーが言った。レイニーはうんと頷いた。

突然、ユキが遠くへ走っていった。

「ユキ！」

レイニーとサニーは名前を呼びながら、ユキを追いかけた。

ユキはしばらく走ると、その場で座り込んだ。レイニーはユキを立ち上がらせた。ユキは涙ぐんでいた。

「……サニーとレイニーで……幸せになってね……」 レイニーは眉をひそめた。何か言いたそうだったが、サニーが先に声を上げた。

「ユキ！『記憶の魔法』を使って！これまでレイニーが何を見てきたのか、見て！」

レイニーたちは教会の部屋へ戻り、ユキは杖を取り出し、レイニーの記憶を取り出した。それは、レイニーが睡眠薬を飲んで倒れてからの記憶だった。

第5 章強さ

レイニーはモーアと対峙した森とは別の森の中にいた。ユキは見覚えがあった。死者が行く「黄泉の世界」だった。

レイニーはしばらく森の中を歩いた。すると、1 人の女性に出会った。それはサニーだった。

「久しぶり！」

「サニー！」

幼少期以来の再会に 2 人は歓喜の声を上げた。2 人は 5 時間ほど語り合った。これまでのことをずっと語り続けた。レイニーにとってこのような喜びの時間は

あまりないことだった。

「ね！ずっとここでいようよ！私と！」

サニーが無邪気な笑顔でレイニーに問いかけた。レイニーは下をうつむいた。

「俺……帰らなきゃ……」 サニーはレイニーの顔を覗き込んだ。

「あいつのところへ……」

サニーは少し表情を変えて、尋ねた。

「ユキでしょ？」 レイニーは静かに、しかしサニーの目を見て答えた。

「ああ。ユキのところへ……」 すると、突然サニーが飛び上がり、「やったー！」と叫んだ。

レイニーは何が何だかわからなかった。

「ね！聞いたでしょ？早く、扉を開いて！」

すると、宙に穴が開いた。レイニーは全く理解が出来なかった。サニーが元気そうに語り始めた。「ユキが黄泉の世界へ来てから、黄泉の世界の幹部の人たちは

話し合ったの。現世では、死にたくないのに、死んじゃう人もいるって。そういう人を現世に残すことはできないかって……それで、『黄泉の番人』っていう『人たち』……かな？ を置くことにしたの。黄泉の番人が死者に喜

びの感情を与えて、死者の世界に残りたいって思わすの。それでも現世に帰りたいって言った人だけが、現世に帰れるようになったの！ へへ、私、出世したんだよ！」 レイニーはやはり不可解だったが、サニーの言うことを信じ

ることにした。自分は死んだが、現

世に帰ることができると理解した。

「サニー……ごめんな……」 レイニーは頭を深く下げて、謝った。

「なんで謝るの？私、嬉しんだよ！レイニーのことも大好きだけど、ユキのことも大好きだから！2 人で幸せになってよ！」 レイニーは寂しそうな表情を浮かべ

た。

「でも、ユキはもう俺のことは愛してない……」 サニーは何か言いかけたが、レイニーが先に喋り始めた。

「でも、いいよな……俺がユキを好きなんだから、別にそれで問題ないよな？」 サニーはそのことばを聴いて、笑っ

た。

「あれね……私も見てたけど、嘘だよ！」

「え！？」

レイニーは不意を突かれたようだった。

「レイニーの心を遠ざけて、レイニーの心を壊さないようにって、ユキが考えたことなんだよ！」 レイニーはその場でしゃがみこん

だ。

「ああ……なんかおかしいと思ったんだ……ユキの声もおかしかったし……」 サニーは笑みを強め

た。

「それくらいユキのことがわかってるんなら、大丈夫！さあ、ユキのところへ行ってあげて！」

記憶はここで途切れた。ユキの目からは涙が溢れていた。

「ごめん……ごめんね、レイニー……私がレイニーのガラスみたいな心、壊しちゃった……」

ユキはレイニーにもたれかかりながら泣いていた。レイニーは少し微笑んで言った。

「違うよ……」

「え？」

ユキは目を見開いた。レイニーとユキはお互いを見つめ合った。

「俺が自殺をしたのは、ユキに言われたことに傷ついたからじゃない……」 レイニーのそのことばの真意がわからないまま、ユキは尋ね

た。

「世界を守るため……？」

ユキは涙を流しながら尋ねた。

「それも違う……俺が自殺をしたのは、ユキを守るためだ……俺が死んだら、ユキは殺されなくて済むって、あのとき考えたんだ……」 ユキのまぶたから涙が

次々と零れ落ちた。

「俺は確かに弱い……けど、ユキがいたら強くなれる。ユキは俺の全てだ。ユキは……俺が絶対譲れない、大切な存在だ……」 ユキは呆然としながら、レイニ

ーを見つめた。そして、レイニーに抱きついて、大声を上げて泣いた。

しばらくして、ユキはサニーの方を向いた。涙で声が声になっていなかった。

「サニー……」

「私を復活させたのも、ユキに喜んでほしかったからだよ！自分のことより、ユキの方が大切なの、この人は……」 ユキはサニーに抱きつき、再び大声で泣き始

めた。

「ユキ……会いたかった……ずっとお礼が言いたかった……ありがとう……レイニーを幸せにしてくれて……」 サニーも泣いていた。レイニーも泣いていた。

「お礼を言うのは私の方だよ……会いたかったよ……」

ユキの涙は雪になり、その場で降り積もった。

2017 年 4 月 10 日の夜、レイニーとユキとサニーは教会の外で食事会を開いていた。マイとリオもやってきた。しばらく笑顔の会話が続いた。突然、遠くで花

火が鳴った。

「こんな季節に花火？……しかも 1 発って？」 マイが不思議そうに空を見つめた。リオも不思議に思ったが、なんだかおかしくて笑った。

「何が起きても、おかしくないわよ！亡くなった人が復活しちゃうくらいだから！」

それを聞いて、クレアは笑いながら、サニーを見つめた。サニーも笑った。ユキもレイニーも笑っていた。

食事会が終わると、レイニーとユキは部屋に帰った。

「今回はホントにごめんね……」 ユキが真剣な顔で謝った。

「いや、俺の方こそ、ごめん……」 レイニーも謝っ

た。

「言ったことばは戻らないけど……レイニーが持ってるのは『憎しみ』じゃないよ……私のこと、ずっと信じてくれた……レイニーはやっぱり『愛』に満ち溢れてる

人だよ……」

ユキのそのことばに、レイニーは照れ臭そうにした。

「また、レイニーのこと、叩いちゃったね……私のことも叩いて……」 ユキは目をつぶりながら言った。レイニーはユキの頭にポンと触れた。

「……レイニーは、一度も私のこと叩かなかったね……」 ユキのことばを聴くと、レイニーは何かをポケットから取り出した。それは復活の種が入っていた箱だった。

ユキはその箱を開けると、小さなミサンガが 2 つ入っていた。

「あの……俺、金ないから……これ、指輪のつもりなんけど……」

「やっぱりごめん！金貯めて、きちんとしたの買うから……」

レイニーのその焦燥感に満ちたことばに、ユキは笑い、その「指輪」を薬指につけた。

「レイニーも！」

ユキはレイニーの薬指に「指輪」をはめた。

「やっぱり不器用だね……レイニーは……そこが大好きだけどね！」 ユキとレイニーは大いに笑顔の花を咲かせた。

エンディング

モーア「マリア様……いや、黄泉の番人長様……これでよろしかったでしょうか？」マリア「バッチリ！

ところどころ、予想外の動きがあったけど、大体 OK！」 モーア「マリア様が時々、怖くなります……禁じられている現世とあの世の交信を行い、息子に愛の告白をさせ、強くなってもらうために、こんな大掛かりなこと

をするなんて……」 マリア「さすが、現世とあの世をつなぐ者ね！あなたに頼んでよかったわ！ラストの花火もうまく決まってナイスだわ！」モーア「もう、こんなことはゴメンです

… … 」マリア「でも……あの子がまさかユキちゃんのために、自分で死を選ぶなんて思わなかったな……あの子、いつの間にかホントに強くなったのね……」

モーア「レイニーの心を一度壊して、それに向き合わせて強くさせるつもりだったのですね……しかし、ユキを亡き者にした後、復活させるためにとっておいた復

活の種が、あんな形で使われるとは……」 マリア「そうよね！でも、サニーも復活したし、予想以上のハッピーエンドだわ！よかった！よかった！」モーア「もう、こんなことはゴメンです……」

マリア「そうね！これで物語は終わりだわ！ハッピーエンドでよかったわ！」

短編小説 雪が降ってきた 花と雪

2017 年11 月4 日

2017 年 10 月 9 日、レイニーとユキは結婚した。サニーはクレアのマンションに住むようになった。今日はクレアはユキの教会に泊まり、レイニーはサニーと一緒にいる。

サニー「こうやって 2 人だけですごすのって久しぶりだね！」レイニー「ああ……まあな」 サニー「ユキとはうまく

いってるみたいね！」レイニー「ああ……おかげさまで」 サニー「なんか無愛想！レイニー、昔はそんなんじゃなかっ

た！」

レイニー「俺にも色々あったんだよ！見てたんだろう？」サニー

「うん……見てた。大変だったね」レイニー「……」 サニー「ユキとクレアが心

配なの？」レイニー「いや……別に」

サニー「レイニー、クレアのこと苦手でしょ？」 レイニー「苦手というか……別に悪い人じゃないけど……」サニー

「ねえ、クレアの幸せってなんだか知ってる？」レイニー「うん？」 サニー「昔、レイニーには言っ

たはずだよ、クレア！」レイニー「ああ……ユキの笑顔か……」サニー「ど

うしてだと思う？」

レイニー「さぁ……仲がいいからじゃないか？」 サニー「ここだけの話……クレアの『過去』見ちゃおうか？」レイニー「は？」 サニー「ユキに教えてもらったの！『記

憶』の魔法！ねえ、いいでしょ？」レイニー「……いや、人の過去を勝手に見るのは……」 サニー「クレアには言われてるんだ！「レイニー」になら見せていいって！」レ

イニー「はあ……」

サニー「クレアの見方変わると思うよ……」

サニーは渋るレイニーを強引に納得させ、ユキたちの教会に向けて杖をかざした。クレアの記憶が集まってくる。

第1 章双子

今日は 2005 年 5 月 1 日。私は 10 歳の少女。裕福な家庭で育ってきたの。お母さんは教育熱心で、お父さんは仕事一筋。お父さんが何の仕事をしている

かは秘密だけどね。お母さんは学校のテストを見せるといつも怒鳴ってくるの。こんな成績じゃ高校はおろか大学なんて行けやしないって。私は別にいいけどね。高校も大学も行かなくても。 こんな感じで毎日を過ごしていた。お

母さんもお父さんも怒らせると怖いけど、愛してくれてるってわかってたし、私は成績は悪かったけど、毎日が充実してい

た。

昔、お母さんが私を病院に連れて行ったことがあったの。そうしたら、多動性……名前は忘れちゃったけど、なんか脳みその障がいなんだって。でも、私はそんな

こと気にしたことないし、本も読めるし、運動の授業も他の友達より速く動けるし、不自由したことなんかない。こんな日々が愛おしかった。

私は花が好きだった。毎日学校から帰ってくるときに花を摘んで帰ってきた。それでお母さんに毎日叱られてたっけ。でもお母さんは許してくれて、私の机の上

は花でいっぱいになった。

2005 年 5 月 4 日、お母さんの突然の告白でその日常が変わってしまった。学校から帰ってくると、お母さんとお父さんがリビングルームのソファで座ってる。

すごく怖そうな顔して。私はいない方がいいのかな？って一瞬思ったけど、お母さんと目が合っちゃった。お母さんは「クレア、こっちへ来なさい」って怖い顔の

ままで私を呼び出した。

最初はいつもみたいに成績のこと言われるのだと思ってた。でも、なんだか雰囲気が違う。お母さんとお父さんが目を合わせるのが見えた。そして、お母さんが

切り出した。いつも話し始めるのはお母さんだ。

「クレア、あなたには妹がいるの……」 はあ？妹？どうしてそんなことを急に？というか、私って一人っ子じゃなかったの？私はあっけにとられてた。何をしゃべっていいのかわからなかった。お父さん

がそんな私の表情を感じて、しゃべり出した。

「クレアの双子の妹だ。妹は……赤ん坊のときに捨てたんだ……」 私は雷に打たれたようにじっと固まってしまった。妹を捨てた？この 2 人が……？次の瞬間、私の目に

は涙があふれていた。

「どうして？どうしてそんなことしたの？私の妹なのに……」 お母さんとお父さんは交代で理由を話した。そのほとんどが私には理解できない話だった。ほとんど迷信のように聞こえる理由だった。この世界には不思議な

ことは起こるって聞いてたけど、まさかこんなことが起きるなんて…。

お母さんも泣いてた。「私たちを許して……」お母さんは手を伸ばしてきたけど、私はそれを振りほどいた。「それは妹に言って！」私は部屋を飛び出して、自分

の部屋にこもった。

ベッドの中ですすり泣くしかなかった。

真っ暗な部屋の扉が少し開いて、光が少し差し込んできた。「妹の名前……ここに書いておくよ」お父さんだった。お父さんはその「紙」を私の部屋の机の上に

置いた。

私はすぐに動いてしまうタイプだから、次の瞬間にはもう決意が出来ていた。この家を出よう。この家を出て、妹を見つけるんだ。私は夜の 11 時ごろに時計が

回ったのを見て、荷物をまとめ出した。3～4 日分の着替えをバッグに入れて、持ち運べるようにした。大きなバッグに小さな女の子が動かされているのを外の

人に見られたら、家出少女丸出しだろうな。

私がここまで衝動的に動いてしまったのは何も妹だけが理由じゃない。いつも友達と成績を比べてくるお母さん。夜遅くに帰ってきて、まともな会話もしないで

寝込んでしまうおとうさん。そんな「裕福な家庭」に嫌気がさしていたの。 でも私はかまわなかった。私の血を分けた妹を見つけるまでは、こんな家戻ってくるもんかと決めていた。時計が 12 時を回る前に玄関から出て行っ

た。誰にも気づかれなかったみたい。私は走った。なるべく遠くまで走り続けた。この家が小さく見えるまで走ろうと決心していた。 しばらく走ると、私は真っ白な教会に着

いていた。教会の扉は開いていて、中に礼拝堂があった。私はまっすぐ進んで、一番正面の天子様の銅像のところまで進んだ。

（どうか……妹と出会えますように……） 私は学校でも真剣にお祈りをしたことはないけど、今日は本気だった。もし神様がいるならば、妹と会わせてと本気で思った。

しばらくお祈りしていると、後ろ側にある教会の扉が開いた。私は「ひゃっ」と声をあげて、その場で倒れこんだ。おじいさんが立っていた。見るからにやさしそう

なおじいさんだった。

おじいさんはゆっくりと話し始めた。「どこの子かい？」私は焦った。「ええと……」「君、ここらへんの子じゃないね……見たことないものの……」「あの……どう

言っていいか」「捨てられたのかい？」「へ？」「お父さんとお母さんに捨てられたのかい？」 私はピンと来た。「はい……今日出てけ！って言われて」そう言いながらも後悔した。家に連れて行かれるんじゃないかって

思った。でも、おじいさんはやさしそう

な微笑しか見せなかった。

「よかったら、私のところへ来ないかい？私の施設には君みたいに親に捨てられた子たちばかりがいる」私はこれだと思った。「お願いします！どこにも行き場がなくて……」おじいさんは私の頭をなでた。私の目から涙が流

れた。

第 2 章 あなたを探して

2005 年 5 月 5 日の昼、私は児童養護施設に入った。私くらいの年の子から私より年上の子達がいっぱいいた。おじいさんの名前はサイドさんって言って、この施設の館長をしてるみたい。みんなから慕われていて、み

んなのお父さん、おじいさんかな？その代わりのような存在だった。サイドさんは私を一番奥の部屋に連れて行った。

「今日からここが君の部屋だよ」私は持ち前の性格で全然動じなかった。ドアを思いっきり開けてみると、二段ベッドが左右に 2 つあって、そこに女の子が寝ていた。サイドさんが私の目を見ながら優しく言った。「マイとリオ

だ。これから君たちの仲間になるクレアだ。」リオはおとなしそうな女の子で、お辞儀をするだけだった。マイは好奇心旺盛の目で私をしばらく眺めて「よろしくね！」と笑った。私も「よろしく！」と言った。

私はマイとリオといっぱいおしゃべりをした。マイは虐待を受けてお家でいれなくなったみたい。リオは小さいときにお父さんとお母さんが交通事故で亡くなっ

たって聞いた。「みんな、つらい思いしてきたんだね……」私は少し涙目になって 2 人の話を聞いていた。「ところでクレアはどうしてここに来たの？」マイが突然聞いてきた。「その……なんというか……」もじもじす

る私をいっそう 2 人は眺めた。「私、妹を探しているの……」2 人はうん？という顔をした。私は 2 人に

はうそをつけないと思って、全てを話した。

私は最初怖かった。無邪気なマイなら聞いてくれると思ってたけど、優等生タイプのリオは聞いてくれないんじゃないかって思ってた。でも、2 人とも受け入れて

くれた。「じゃあ、妹さんが見つかるまでの間一緒だね？」リオが笑顔で言ってきた。私は息を吸って吐き出すように言った。「私、家には帰らない！」2 人とも

「え？」って顔をしてた。「私の妹を変な迷信を信じて捨てる人たちだよ？私だって何されるかわからない……私はあの家にいたくない！」 リオが何か言おうとしたけど、それをさえぎって、マイが私を抱きしめてきた。

「いいよ……妹ちゃんとここで暮らしなよ！ちょうどベッド 1 個分あいてるし……」

私の目から涙が流れ落ちた。3 人で肩を抱き合って泣いて泣いた。 養護施設は毎日近くの学校に通って、学校が終わったら、施設に帰ってくるという感じだった。新参者の私に近づいてくれる親切な人はいなくて、いつも同じ

クラスのマイとリオと一緒だった。マイもリオも運動が得意だとわかった。マイはわかるけど、はっきり言って、リオは意外だった。おしとやかに見えたから。

それからが大変だった。妹を探すって旅に出たのはいいけど、宛てがわからない。私の唯一の救いはあの白い教会に行くことだった。施設の日課を終わらせた

後は、いつもあの教会に行った。そこで神様にお祈りをした。（妹と早く逢えますように……）これが毎日続いた。

途中でさすがのマイとリオももう止めようとしてきた。でも私はあきらめなかった。毎日神様にお祈りしていた。

2005 年 10 月 1 日の夜、教会でお祈りをしていると、教会の扉が開いた。私はきたっ！と思って後ろを振り向いた。おばあさんが立っていた。おばあさんは中

に入って来て、お祈りを始めた。「私はね……世界中を旅してるの……こんな真っ白な教会珍しくてねえ……」私ははあっと言って聞いていた。「小さな女の子を見かけませんでしたか？」おばあさんはしばらく考えて、

「そりゃ女の子にはいっぱい会ったわ……」とため息まじりに話した。私は肩を落として、おばあさんがお祈りをするのを見てた。おばあさんはしばらくすると、私にお辞儀をして、外へ出て行った。

2005 年 12 月 1 日、街がクリスマスムードで一色だった。私の施設もクリスマスの飾りつけがたくさんされた。けど、私はとてもうきうきした気分にはな

かなかった。今日も教会に行った。お祈りをしていると、教会の扉が開いた。今度はおじいさんが立っていた。おじいさんはこっちに近づいてきて、「メリークリス

マス」と言って、お菓子をくれた。「ありがとう……ございます」私はお辞儀をした。おじいさんはすぐに出て行った。

その夜、マイとリオにこれまでのことを話した。「すごいね！お年寄りと縁があるんだね！」「将来福祉の仕事とかしたら？」リオとマイが私を慰めてくれているの

がわかる。しばらく話をして、とうとうマイが言った。「……もうあきらめたら？」私はムッとした。それをお見通しだったマイは落ち着いた様子でこっちを眺めてきた。私は何も言えなかった。「私も気持ちはわかるよ……

私も死んだお父さんたちと会いたいもん……」リオが同情してくれているのもわかった。

「でも、私の双子の妹だよ！お母さんのお腹の中で育った……」そう言ったとたん、私は罪悪感でいっぱいになって涙を流し始めた。マイとリオは「どうしたの？」と聞いてきたけど、ほとんどは聞き取れなかった。

「私、お母さんを捨てちゃった……すごく嫌なやつ……」マイとリオは私の肩を抱きしめた。誰も何も言えなかった。

年が明けても、私は教会に通い続けた。2006 年 3 月 1 日。もうすぐここに来て 1 年になるけど、何も状況は変わらなかった。

2006 年 4 月 1 日。学校の始業式が終わって、私たちは早めに施設に帰った。部屋でいつものようにたわいもない会話をしていると、私は急にしんみり

してしまった。「来るか来ないかわからない人を待つってつらいね……頭では半分もう会えないってわかってるのに、『また明日なら』って身体が動いちゃう

… … 」私はその場でしゃがみこんだ。マイは時々起こるこんな私の抜け殻のようになった状況にどうしていいのかわからないようだった。そんなとき、いつもリオ

が慰めてくれる。「それが『信じる』ってことじゃないのかな？」私はリオとマイを見つめた。私は涙目で笑った。マイとリオも笑った。

第3 章2 人

2006 年 7 月 2 日、私はいつものように教会にいた。すると、教会の扉が開いた。後ろを振り向くと、小さな女の子が立っていた。私は小走りに走っていった。

女の子は少しぎょっとしていた。「あなた……名前は？」「ユキ……」「ユキっていうんだ……」 私はちょっとお茶入れてくるから待っててと言って、ユキという女の子を待たせた。教会の隣の給湯室に行って、私は泣

き崩れた。

（やっと……会えた。ユキ……） 私はユキとお茶を飲みながら色々な話をした。ユキが魔王の生まれ変わりでこの教会に捨てられていたこと、その後、マルク団っていうところでひどい目にあったこと、サニーっていう親友

に出会えたこと、そしてレイニーっていう男の子を捜していること。私は全部受け入れて聞いた。だって、魔王の生まれ変わりで捨てら

れたってことは知ってたし、それに……双子の妹のこと、信じたいじゃない？ 私はユキにこの教会で住むことを薦めた。誰も住んでいないみたいだし、教会の隣の部屋を掃除したら住めそうだし。ユキに何か仕事をすることを

薦めた。そし

たらユキが言ったの。「花売りしたいな……」私はちょっと意外だったけど、ユキは静かに話し始めた。「私、マルク団ってところで罰を受けたときに、花に水遣りをしてたの……それで花が好きになって」私はちょっとうれ

しかった。「私も花好きなんだよ！この教会の周りに花壇作って、一緒に育てようか？」私のその誘いにユキははじめた笑顔を見せた。

エピローグ

レイニー「……え？そんな……うそだろう？」サニー

「ホントだよ！」

レイニー「じゃあ、ユキとクレアは……？」 サニー「双子の姉妹！二卵性だけどね！誕生日もレイニーとユキとクレアは一緒なんだ！」レイニー

「……」 サニー「クレアの見方、少し変わった？」レイニー「ユキは知ってるのか？」

サニー「双子ってこと？」レイニー「ああ……」 サニー「知らないと思う。けど、何か感じてるとは思う。クレアと自分には切っても切り離せない何かがあるってことは……」レイニー「どうして言わないんだ？」

サニー「真実を言ったら、『今』の関係が壊れると思ってるの、クレアは。ユキはきっと真実に耐え切れない。それに、自分のせいで、クレアが家を捨てたって罪悪

感を感じちゃうだろうし…」

レイニー「……クレアって意外と一途なんだな」サニー

「クレアのこと見直した？」 レイニー「見直したどころか……好きになったよ……クレアが俺とユキをつないでくれた花だったんだな……」サニー「ホン

ト？よかった！私もクレアのことが好きなんだよ！」レイニー「そりゃそうだろ？一緒に住んでるし

… … 」

サニー「私がクレアを『好き』っていうのは……レイニーがユキを『好き』って気持ちと似てる……」レイニー「うん？」

サニー「私、ユキのこと大好きでしょ？だから、あんなにユキのことを想ってくれる……双子の姉妹ってことも隠して友達でい続けてくれるクレアのこと、尊敬しち

ゃって……」

レイニー「……」 サニー「おかしいよね？女の子が女の子を好きになるなんて……」

レイニー「……おかしくないよ！俺とユキは勇者と魔王だ。だけど結ばれた。それに比べたら、女の子が女の子を好きになるなんて……ちっともおかしくない！」サニー「ありがとう……」

ユキ「クレアと寝るなんて久しぶりだね？あのとき以来？」クレア「また、モーアが出てきたりして……」ユキ「も～やめ

てよ！」クレア「……」

ユキ「ねえ、クレア？」

クレア「何？」

ユキ「私と出会ってくれてありがとう……」クレア「何？

どしたの？急に？」

ユキ「うんうん！それだけ！おやすみ！」

クレア「……ユキこそ、私と出会ってくれて、本当にありがとう」クレア・ユキ「おやすみ……」

短編小説集 風と雪が生む物語

和泉敏之著

第一部 短編小説 本物の魔王 第二部 短編小説 太陽の手紙 第

三部 短編小説 風と雪を繋ぐもの 第四部 短編小説 風と雪が結ば

れた日第五部

短編小説 風と雪が生む物語

第一部 短編小説 本物の魔王

第1 章初めまして第2

章 覚えてない

第 3 章 あなたがユキを苦しめたの第 4 章 行かないで

主要登場人物

レイニー、ユキ、クレア、サニー

2017 年 7 月 13 日。教会の部屋をユキは掃除していた。もうすぐレイニーが帰ってくるのを楽しみにしながら、部屋のゴミを片付けていく。部屋は数時間後、キレイになった。

第 1 章 初めまして

家庭教師の仕事を終え、俺は家に着いた。「おかえり」ユキが笑顔で迎えてくれた。「ただいま」俺は静かに言った。俺は机に置いてある薬を飲もうとした。だ

が、薬がない。おかしい。ユキに聞いてみた。

「薬、どこいったんだ？」ユキは机の上を見渡した。ユキの顔に焦りが見えてきた。しばらくユキは黙っていた。「どこ？ひ俺は少し声を高くして言った。

「……ごめん」「うん？」「掃除してるときに……捨てちゃった」 俺もユキも止まった。しばらく静止した後、俺は冷静になった。頭がパニックになるという冷静のなり方だ。「散歩してくる」俺は何も考えられず、言葉を

発するだ

けで精一杯だった。

「私も着いてく……」ユキの表情から申し訳なさそうな気持ちが見えた。その表情が俺を刺激した。「来るな、一人で行く」ユキは何も言わなかった。

2017 年 7 月 14 日朝、俺は家に帰ってきた。「おかえり」ユキが昨日と同じような笑顔で迎えた。だが、俺は何も言わずにベッドに座った。睡眠薬と精神安定

剤を一日飲まないと、こんなに頭が狂うのか。俺は頭を抱えた。横目でユキを見ると、心配そうな顔をしている。その顔が俺をまた刺激した。だから、「苦しい…

… 」と何度も言った。

「もうすぐ病院開くから、レイニーは寝てて！」ユキが焦っているのが分かった。俺はユキをもっと焦らしたいと思った。

「……誰のせいでこうなったんだ？」俺が冷たくそう言うと、ユキはただ「ごめん」と謝った。

「……薬がないと、俺が壊れるのを知ってるだろう？」一層冷たくした声にユキは同じ「ごめん」を返してきた。

「……ユキは俺の苦しみを何も分かってない」ただ俺は冷たい言葉をかけてユキを困らせるのを楽しんだ。今の崩壊しそうな俺はユキに怒りをぶつけることで崩

壊しないで済むと思った。「ごめんなさい」ユキはただ謝っていた。そのユキの言葉が俺をエスカレートさせた。

「ユキがもう少し頭がよかったら……」俺が何気なく発したその言葉にユキは黙り込んだ。やった、ユキを黙らせた。俺は快感だった。

「……ちょっとひどいんじゃない？」ユキがようやく謝るのを止めたことによって、俺はいよいよおかしくなった。「私、ずっと待ってたんだよ？」ユキが静かに怒って

いるのが声から分かる。俺はユキの怒りを強めようと思った。

「そんなの当然だろう？ユキのせいなんだから……」ユキの顔を少し見た。無表情だった。何も言わなくなったユキをつぶす気でいた。「お前なんかに出会わなきゃよかった……」俺は自分の頭の中にある言葉かどうかも分か

らないまま、ただ「お前」を強調して、自分の口から出る言葉を吐き出していた。ユキはやはり

何も言わなかった。

次の瞬間、俺はユキに「馬鹿」と連呼した。その間、ユキは何も言わなかった。俺は何も言わないユキを面白がって「馬鹿」を続けた。だが、いくら「馬鹿」と言っ

ても何も反応しないユキに少し腹立ってきた。ふん、かかってこいと思った。

ユキの顔を少し見ると、震えているのが分かった。試しに「馬鹿」と言って見た。ユキの口が少しだけ開き、上唇と下唇がゆっくり合わさって動いた。面白い。そし

て静かに言った。

「死ね」

ユキの顔が凍りついた。俺はユキに叩かれることを期待していた。ユキが叩いてくれたら、俺は少し安定すると思っていた。何もかもユキにゆだねていた俺だ。

だが、ユキを見ると、ユキはただ笑っていた。右目から一筋涙が流れていた。

予想外の事態に俺は何も言えなくなった。しばらくの沈黙の後、ユキが言った。「もうそろそろ病院開くから……レイニーは寝てて」先ほどと同じセリフをユキは笑顔で言った。俺はようやくユキに罪の意識が出てきて「いや

… … 俺が自分で行く」と早口で言った。ユキは俺に背を向けて静かに「うん……気をつけてね」と

言い、部屋から出て行った。

この間、俺は一言も「ごめん」を言えなかった。もし一言でも謝っていたら違う展開になっていたと悔やむ。

私は街の外れにある洞窟にいた。奥へ進んで行った。少し広がりのある空間に 1 つの石があった。私の狙いはこれだった。邪悪なる光の石。この世界にはこの

石が 2 つあることを私は知っていた。この石を持つと、私は私でなくなる。ただ自分が自分でなくなることを期待してその石を見ていた。もう耐え切れない。私の

ために命を捨ててくれたレイニーはもういない……。私はレイニーに逆らえないただの奴隷。

「レイニー、さようなら……」そう言って、その石を両手でつかんだ。

「何してるの？」後ろを振り向くと、クレアがいた。「ユキが変な顔してこの洞窟に入っていくのが見えたからさ」サニーもいた。私は 2 人をしっかり認識できた。お

かしい。私はあの石を持つと、悪になると聞いていたのに。でも私は何も変わっていない。クレアとサニーを見て、私は安心した。もし私が悪になっていたら、この

2 人に危害を加えていたかもしれない。私は自分のしようとしたことを心から恥じた。「変な石……帰ってレイニーに調べてもらおう」クレアがそう言うのをただ

聞くことで安心できた。

教会へ帰る道、クレアとサニーと他愛もない話をした。けど、話がかみ合わないことがあった。レイニー？誰、それ？頻繁に 2 人はこの名前を出すけど、私には

聞き覚えのない名前だった。

私は聞いてみた。「ねえ、レイニーって誰？」2 人は少しポカンとしていた。クレアが笑いながら言った。「また喧嘩したの？」喧嘩？誰と？私は本当に分からなか

った。でもクレアは真剣に受け取ってない。「じゃあそのまま忘れたってことにして帰ろうよ」クレアが言ってることの意味が分からない。サニーは私がおかしいと

思ったらしく、真剣な目で聞いてきた。「レイニーのこと、本当に忘れたの？」私は正直に言った。「忘れたというか……本当に知らない」サニーだけでな

く、クレアも真剣な表情になった。「一緒に教会で住んでる……」サニーのその言葉に私はぞっとした。「私、誰とも住んでない！ずっと 1 人でいた……」

病院でもらった薬を飲むと、俺は安定した。そして、ユキになんてひどいことを言ったのだろうという気持ちが出てきた。だが、ユキはきっと俺を受け入れてくれる

と信じていた。謝れば許してくれるだろうと。

教会の部屋から外へ出ると、教会の玄関周りの地面が水浸しだった。ユキが泣いて雪が降り、この炎天下の中、溶けた跡が残ってるんだと俺はすぐに分かっ

た。少し罪悪感が強まった。けど、きっと謝れば許してくれる。俺はそう信じていた。

遠くからユキが歩いてきた。サニーとクレアも一緒だった。皆暗い顔をしている。俺に言われたことを話したのだろう。俺の身体は自然にユキを抱きしめた。「ご

めん！あんなひどいこと言って……」そう言った俺の身体をユキははねのけた。俺は地面にしゃがみこんでしまった。ユキは本当に怒ってる。だから、謝るしか出来ないと思った。しかし、俺を見るユキの顔はいつもと違ってい

た。恐怖で震えている。 サニーとクレアがしばらく見つめ合った。サニーが言った。「ほら、レイニーだよ……」俺は起こっている事態がつかめないでいた。だが、次のユキの言葉でようやく異常事態が起こっていることに気

づいた。「初めまして……」

第 2 章 覚えてない

教会の外でクレアにこれまで起こったことを聞いた。そして、石を見せてもらった。見覚えがある。邪悪なる光の石。これをユキに持たせると、ユキは邪悪な存在

になる。ユキは表面的には何も変わっていない。だが、俺はこの石の存在によって、どんな異常事態が起こっているか理解した。ユキは俺を忘れたのだ。ユキの

記憶から俺の存在が完全に消えている。これなら邪悪な存在に変わった方がマシだ。俺の存在が消えたユキは、俺にとって本物の魔王のように見えた。

「どうしてこんなことが起こったの？」クレアは静かに俺に尋ねた。俺は全てを明かした。「目つぶって？」いつかと同じクレアの言葉だから、何が起こるのかは俺

は予期していた。俺は目をつぶり、クレアの平手打ちが俺の左の頬に飛んだ。前より強かった。倒れこんだ俺の胸倉をつかんでクレアは叫んだ。「たった一回

『馬鹿』って言われて傷ついた子に……あなたがユキを壊したんだからね！」クレアは少し泣いていた。

教会の部屋に戻ると、サニーとユキが話している。サニーがこっちに気づくと、暗い顔をして俺を情け深く見つめた。ユキは俺と目が合った途端に視線を下にず

らした。

「だめ、記憶の魔法でユキの記憶を見たけど、レイニーが出てこない。レイニーと会った日の記憶も変わってる。ユキは家に帰ったことになってる……」俺はつい

に絶望的になった。

俺の恐怖心を感じ取ったのか、サニーは少し笑って言った。「大丈夫！ほら、思い出の場所に行ったら、記憶が蘇るとかあるじゃん？行こう！」

その日、ユキに告白した病院の前庭に 4 人で行った。「どうだ？覚えてるか？」ユキは困惑したように見えた。「こんなところ、来たことない……」ユキが嘘をつ

いていないのが分かった。「ほら、俺がユキに告白した……」そう言うと、ユキは恥ずかしそうに口に手をやった。

その夜は、ユキを怖がらせないように、ユキはユキの言うとおり、1 人で教会に残すことにした。いつの間に、シングルベッドからダブルベッドに変わったのかと

不思議がっていた。ユキは笑顔でサニーとクレアに「お休み」と言った。そして、俺を見ると、顔をこわばらせて「おやすみなさい」と言った。俺はクレアの家に泊まらせてもらった。現実を受け止められなくて怖い夜を過ごした。

2017 年 7 月 15 日、エンデ島に 4 人で向かった。大きな木の下に着いた。「覚えてないか？」俺は無心で聞いた。「覚えてない……」ユキは下を見つめながら呟いた。「ここでキスしたんだけど……」ユキの

顔は本当につらそうだった。

2017 年 7 月 16 日、ユキと出会った川に行った。俺はこれでだめなら終わりだと思っていた。ここはユキとの思い出が色々と詰まった場所だ。「覚えてな

い？」俺は自信がなくなってきた。だが、望みを捨ててはいなかった。そんな俺に返したユキの言葉はこれだ。「覚えてない……」 教会に戻った俺たちは成すすべなしと言った感じだった。俺はあきらめていた。だが、サニー

が励ましてくれた。「ユキとよくデートした場所は？」俺はあきらめて

いたが、サニーに突き動かされて、本屋へ行くことにした。 本屋に着いて、ぐるぐると回ってみた。そしてユキに聞いた。「ここ、よく一緒に来たんだけど……」ユキはしばらく黙った後、大声で叫んだ。「私、本屋なんか来た

ことない！文字が読めないもん！」どうせこうなるだろうと思ったが、俺は悲しくて仕方なかった。

その後、クレアの家でユキ以外の 3 人で話し合うことにした。だが、俺の決心は決まっている。「考え事……？」サニーが心配そうに俺に尋ねた。「これからは

宿に泊まることにする……」俺のその言葉にサニーとクレアは何か言いたそうだったが、2 人が何か言う前に言った。「元通りに戻るだけだ……」

俺はクレアの家の近くの宿に泊まった。色々と考えた。俺は確かにユキになっていた。そして、ユキは俺になっていた。これは紛れもない事実だ。だが、今ユキの

中から俺が消えている。しばらく考えたが、何も感じなかった。どうしようもない。涙も出てこない。あの誕生日の前の生活に戻るだけだ。俺は本当に現実を受け

入れることにした。ベッドでただ横たわり、様々な事柄が頭の中で回転していた。それらは言語の形はしてなくて、俺はそれに苦しめられることもなかった。

俺は人形のように静かで動かない存在となった。

第 3 章 あなたがユキを苦しめたの

突如、部屋の扉が開いた。サニーがいた。俺が心配で後をつけてくれていたらしい。俺は新しい現実の世界でも生きていけそうな気がした。

「大丈夫？」「大丈夫だよ……」「まだあきらめないで！きっとユキの記憶は戻るから……」「いや、もういいんだ……」俺は諦めではなく、本心でそう言った。

サニーはしばらく俺を見つめた。そして俺にこう言った。

「最低だね……」俺は確かにな……と思った。「最低だね……人として」そう俺は人として最低なのだ。だが、それすらも受けいれている。だが、これは諦めでは

ない。俺は新しい自分になるだけだ。そう思っていた俺にサニーは言葉の剣を刺してきた。

「女の子ってそういうのすぐ分かるんだよ」俺はその言葉の真意が分からなかった。「私を好きになろうとしたって駄目だよ……」俺は身動きが出来なくなった。

そうだ。俺はユキのことを忘れて、サニーのことを好きになろうとしていたのだ。心を読まれた俺は何も言えない。

「先に言っておくけど、今のレイニーに何の魅力も感じない」俺は新しい現実の世界ですら生きられないのかと感じた。だが、それは全て他人に対する甘えだっ

たのだ。俺はユキを忘れてサニーと共に生きるという人間として最低な希望を持っていた。

サニーは静かに泣き出した。「どうしてこんなことになっちゃったの？」俺はサニーの涙をただ眺めるしか出来なかった。「あの時……黄泉の世界でユキを選ん

だレイニーはどこに行ったの？」俺は少し思い出した。「レイニー知らないだろうけど、たまにユキ、私のところへ来て泣いてたんだよ！ また、レイニーに寄り添えなかったって……。でも、レイニーの悪口なんて一言も言っ

たことない！いつも自分が悪いんだって、自分を責めて……」俺は初めて知った真相につぶされそう

だった。「自分の責任でユキを壊しちゃったのに、逃げるの？」そう、俺は逃げようとしていた。そして、まだ逃げたいと感じている。だが、次のサニーの言

葉が俺に突き刺さった。「あなたがユキを苦しめたの……」俺の身体がようやく動いた。「家へ帰ってくれ！教会へ行く！」サニーは涙をこすって笑った。

第 4 章 行かないで

俺は教会に来た。玄関をノックするとユキが出てきた。ユキは恐怖に満ちた顔をしている。「入っていいか？」ユキはしばらく静止したが、静かに「どうぞ……」と

言って、俺を迎え入れてくれた。 ユキはベッドに座り、俺は部屋の真ん中で立っていた。俺はもう戻れないと思って吐き出した。「俺のこと、本当に覚えていないのか？」ユキはしばらく下を見つめて黙り込んだ。そして本当に申

し訳なさそうに呟いた。「ごめんなさい……あなたのこと、思い出そうと努力したんだけど……やっぱり思い出せない……」 俺はやはり受け入れられずに、急いでユキの隣に座った。ユキはびっくりして俺から距離を置い

た。俺はその距離に傷ついた。それで頭の中の何かの回転が加速した。俺はまぶたが水滴で包まれながらも、平静にユキに尋ねた。「なあ、俺のこと好きか？嫌いか？」ユキは何を言っているの？という表情をしていた。何も言

わなかった。俺がユキを真剣な目で見つめると、ユキは横を向いた。そして怯えながらゆっくりと言葉を発していった。

「嫌い……私は覚えてないのに、告白しただとか、キスしたとか……あなたが……怖くてたまらない」俺はただユキの消えそうな声を聴いた。「もう、私には関わ

らないで……」 ユキのその言葉に俺は決心がついた。諦めよう。全て自分が犯した罪だ。「ごめんな、苦しめて……」そう言って俺は玄関へ向かった。「ごめんなさい……」期待

にこたえられないとでも言うようなユキの涙交じりの声が聞こえた。

ふと、机の上にある紙を見つけた。「レイニ」と書いてある。ユキが唯一書けた三文字だ。どうしてか分からないが、この文字が俺を突き動かした。

ユキの方を振り向いて語りかけた。「覚えてないと思うけど、ユキは俺を愛してくれてたんだ……」ユキは静かに泣き始めた。「俺もユキを愛していた……」ユキ

はベッドから立ち上がって部屋の隅に逃げた。「でも、俺は俺のことが好きだったユキが好きだったんだ……」ユキは横にある棚から杖をつかんだ。「俺は自分に酔いしれていた……」ユキの杖から光が出てきて、俺の肩を刺

した。俺の肩は少し焦げた。何を言っても、ユキには重荷になると分かっていた。だが、俺はどうしても言わなければ済まない言葉を口にした。「でも、俺はたとえユキが俺のこと嫌いになっても、ユキに忘れられても、ユキがいな

くなっても、ユキが死んでも、俺はユキが好きだから……」

満足した俺は玄関へ向かった。少し歩くと、後ろからユキが抱きしめてきた。「お願い……行かないで……」ユキは泣きながら俺に言った。俺は情けだと思った。

「私もあなたのこと好きだから……」ユキのその最大限の優しさにもう甘えるわけにはいかなかった。「俺とゼロから始めたって、俺はまたユキにつらい思いをさせる……俺は人を不幸にしかできない男だ……」俺はこれま

での罪をようやく受け入れたと思う。もうユキに苦しみは与えられない。頭の中の何かが回転がよ

うやく落ち着いて、ごめんなさいという 6 文字が、頭の中心でどかんと腰を下ろした。

「幸せだったよ……」うん？どういうことだ？「3 日間待っててくれたでしょ？」俺はユキの異変を身体で感じ取った。「確かにレイニーは私にとって、重荷だった。

だけど、それも楽しかった……レイニーが成長してくれるのが嬉しかった……」

「私の王子様でしょ？」

2017 年 7 月 19 日。教会の部屋をユキは掃除していた。もうすぐレイニーが帰ってくるのを楽しみにしながら、部屋のゴミを片付けていく。部屋は数時間後、

キレイになった。

レイニーが家庭教師の仕事から帰ってきた。「おかえり」ユキが笑顔でレイニーを迎え入れる。レイニーは「ただいま」と笑顔で言った。レイニーが机の上を見る

と、ユキは再び犯したミスに気づいたようだった。また、薬を捨ててしまった。前と同じことが起きるとユキは恐れた。

「ごめんなさい！また、薬……」レイニーの目が穏やかだったのが逆に怖かった。「明日こそ、私が買いにいくから……」ユキは恐怖に包まれた。

「いいよ……」「え？」「実はあの薬、この 5 日くらい飲んでないんだ……」ユキは涙目になった。、「大丈夫なの？」ユキはレイニーにまた寄り添えないと思った。

「夜、眠れないし、幻聴が聞こえてくるけど、大丈夫……現実でユキと向き合って、ユキの本当の声だけを聴くことにするから……」レイニーの冷静な言葉にユキ

は涙をぼろぼろと流し始めた。レイニーはこれからも全てを受け入れてくれるユキと目を離したら消えてしまいそうなユキに怯えながら生きていくのだろう。レイニーの人の愛し方は間違っているのかもしれない。いつかレイニーが

ユキを自然に愛せるときが来るかもしれないし、来ないかもしれない。だが、レイニーにとっての本物の癒しはユキであり、本物の魔王もユキだということだけは事実だ。

完

第二部 短編小説 太陽の手紙

2017 年9 月3 日

レイニーへ

久しぶり。しばらく会ってないね。体調はどう？ ちゃんと薬は飲んでる？ 私はクレアと仲良くやってるよ。この前ユキが来て、レイニーが最近優しいって言ってたよ！ まあ、レイニーが優しいのは昔からだけど。でも、ユキ不安

がってた。レイニーだって自分のこと忘れちゃうんじゃないかって？ そんなことないと思うけど、ユキをしっかり見守ってあげてね。一日一日を大切に……。落ち着いたらまたクレアの家に遊びに来てね。

サニーより

2017 年9 月5 日

サニーへ

久しぶり。手紙ありがとう。サニーは俺のこと怒ってるのかと思ってた。だからこうして手紙をくれたことが本当に嬉しい。前の事件で色々考えさせられたけど、や

っぱりユキのことが心配だ。俺のことまた忘れるんじゃないかって恐怖で怯えてる。ユキがいなくなるのが本当に怖い。今まで何でも受け入れてくれるユキに甘えてた。けど、ユキだって悪いんだ。俺を試してる気がする。俺の愛が

本物かどうか見てる気がする。俺はそんなユキが怖くてたまらない。いったいあいつが何者なのかが分からない。多分俺が弱いから、こんなこと考えるんだろうけど……。サニーは何か知ってるか？ 返事待ってます。

レイニーより

2017 年9 月7 日

レイニーへ 返事ありがとう。あなたのために言ってあげる。ユキは本当にいい子。確かに目を離すと消えてなくなりそうだけど、それはあなたの被害妄想じゃない？ どうして

ユキを信じてあげられないの？ あなたがユキを想ってるのは分かるけど、ハッキリ言ってやり方が間違ってると思う。ユキはかわいそうなあなたに合わせてあげ

てるだけ。あなたの支えになりたくて、あなたのために努力してる。そんなこと考えたことある？

ユキはあなたが起きて眠るまでずっとあなたを見守ってる。ユキは不器用な子だけど、最大限の努力をしてる。そんな気持ちあなたに想像できる？ 忘れないで。あなたがユキを苦しめたの。きっと今も苦しめてる。それはあな

たがユキに依存しすぎてるから。確かにユキもあなたに依存してるけど、そのきっか

けになったのはあなたでしょ？ あなたがユキにしがみついてるせいで、ユキもあなたから離れられないの。いい加減、ユキを自由にさせてあげて。あなたはただ

自分のことしか考えてないだけ。嫌われるのが怖くて、ユキに頼り切ってる。あなたが本当にかわいそう。あなたのせいで苦しめられてるユキはもっとかわいそ

う。

今のままじゃ、本当にユキはあなたの側からいなくなる。あなたが目を覚まさない限りはね。あなたがちゃんと自立すれば、ユキも自立できる。

ごめん、厳しいこと書いたけど、あなたとユキに本当に幸せになって欲しいの。

レイニー、あなたは弱くない。本当はとっても強い人だよ。夢を持って、レイニー。あなたに大きな「夢」になって欲しい。

サニー

2017 年9 月9 日

サニーへ

返事ありがとう。まず、素直な気持ちを言ってくれてありがとう。本当の愛っていうのは、お互いに自立していることなんだって分かった。依存するのは愛じゃない

って。

だから、俺はサニーが言ってくれたように、夢を持つことにする。将来、画家になる。絵を描いてユキを勇気づけるんだ。ユキには早く眠ってほしいって俺から伝え

るよ。

最後に、こんな俺のことを応援してくれるサニーやクレアに感謝してなかったことを謝る。本当にごめん。ユキだけじゃない。俺は皆の力で生きてるんだ。本当

にありがとう。これからも、ダメな俺やユキのことを見守って欲しい……。返事はいらないよ。ただ、自分の正直な気持ちを言いたかっただけ。本当にありがとう。

2017 年 9 月 10 日

レイニーへ

私が初恋をした相手があなたで良かった。がんばりすぎないで！ 少しずつ、少しずつ、ね。

サニー

2017 年 9 月 13 日、ユキはレイニーから画家のことを聞いた。「楽しみ！ レイニーがどう変わっていくのかが！」

第三部 短編小説 風と雪を繋ぐもの

プロローグ本編

エピローグ

登場人物

レイニー、ユキ、ミユ

プロローグ

2017 年10 月7 日

ミユ「この丘、きついーー！ あ、レイニーとユキの家はあそこだ！ 頑張ってもらおう〜っと！」

本編

朝

ユキ「おはよう！」 レイニー「おはよう……」

ユキ「良かった……起きてくれて」レイニー「……ん？

どうした？」

ユキ「なんでもない！朝ごはん作ったからね！」レイニー「相変

わらず、ユキは早起きだな……」ユキ「えへへ」 レイニー（うん？なんだ、この懐かしい感じがする匂いは？）

ユキ「あ、気づいた？」

レイニー「なんだ？この匂いは？」 ユキ「『においの魔法』って言って、願いを届ける匂いを出すことが出来るの！」レイニー「なんだ？

ユキの願いって？」

ユキ「……レイニーが私のこと忘れないようにってね」

レイニー（忘れるわけないだろう。世界中の人たちを忘れても、ユキのことだけは忘れない自信がある……）

昼

ユキ「じゃあ、花売り行って来るね！」 レイニー「ああ、行ってらっしゃい！気をつけてな…

… 」ユキ「はーい！」

レイニー（さて、家庭教師の準備でもするか……）

（突然、教会の部屋の扉が開く）

レイニー「うん？」ミユ「ハロ

ー！」レイニー「？」 ミユ「ちょっと、横座らしてね！」レイニー「あの……」

ミユ「私はミユって言うの！」

レイニー「ミユちゃん？君は……」ミユ「私は妖精なんだ！」

レイニー「？」 ミユ「妖精を信じないの？」 レイニー「信じるも、信じないも……」ミユ「夢がないね！」 レイニー「……まあ、

何が起こってもおかしくない世界だから、妖精がいてもおかしくはないか……」

ミユ「ほんと！？妖精はね、きれいな心の人しか見れないの！ラッキーだね！」レイニー「はあ……

で、妖精が何の用かな？」ミユ「あなたはレイニーね？」

レイニー「え？どうして俺の名前を？」 ミユ「だって妖精だもん！あなたのことは何でも知ってる！」レイニー「本当に妖精な

のか？」 ミユ「だから言ってるじゃん！しつこい男は嫌われるよ！」レイニー「……」 ミユ「で、あなたの恋人はユキちゃ

んね？」レイニー「え……？

どうして……？」ミユ「私は何でも知ってるの！」 レイニー「…………ところでその服は？」ミユ「妖精の服！

ノキモっていうの！」レイニー「その頭についてるのは？」ミ

ユ「これは妖精の髪飾り！」

レイニー「……」

♪♪♪

ミユ「この教会、丘の上にあって綺麗だね！ 真っ白だし！」レイニー「ああ……ありがとう」 ミユ「ところで、今日私の誕生日なの！」レイニー「え？

そうなのか？」

ミユ「お祝いして！」 レイニー「……誕生日おめでとう」ミユ「それだけ！？」

レイニー「いきなり来てそれはないだろう？」

ミユ「いいよ！エヘ！ありがとう！！」

♪♪♪

レイニー「ここだけの話、ユキは俺のことを全然寄り添ってないって考えたことがある」

ミユ「最低～！ユキちゃんほどレイニーを大事にしてくれてる人っていないのに！」レイニー「だよな……これからはユキに甘えられない……」ミユ「甘えたっていいんじゃな

い！？」レイニー「え？」

ミユ「ユキちゃんはレイニーが弱いの知ってるから、簡単には見捨てたりしないって！」

レイニー「……そうなのかな？」ミユ「そうそう！」

レイニー「それは安心した……」 ミユ「レイニーの方が全然ユキちゃんに向き合えてないね！」レイニー「確かに……」 ミユ「ユキちゃんに求めすぎだよ！」レイニー「……」 ミユ「レイ

ニー、ユキちゃんに自分の方にだけ向いてほしいって思ってるでしょ？」レイニー「……まあ」 ミユ「ユキちゃんのこと考えなよ！ユキちゃんは街の人気者で、いっぱいしゃべらないといけない人がい

るの！」レイニー「そりゃそうだけど……」 ミユ「それを自分ひとりのものにするなんてダメじゃないの！？」レイニー「そうだよな……」 ミユ「安心して！ユキちゃんにとって一番大事なのは

レイニーだから！」レイニー「……」 ミユ「いつも一緒にいるでしょ！？」レイニー「まあ、仕事以外は……」

ミユ「だったら大丈夫！」

♪♪♪

レイニー「ユキは恋人で、大切な人で、友人でもあって、ライバルだ」ミユ「ライバル！？」

レイニー「俺はいつかユキを超えたい……」 ミユ「なるほど！じゃあメロメロに

しなきゃね！」

レイニー「それは……無理だ……」ミユ「何それ！？」

♪♪♪

レイニー「ユキは俺を怖がってる気がする……」ミユ「被害妄想だよ！」 レイニー「いや、俺には分かるんだ……時々声が震えて、目がこわばる」ミユ「ふ～

ん！でもユキちゃんを笑顔にも出来るんでしょ？」レイニー「ま、まあ……」 ミユ「レイニーといるときのユキちゃんの笑顔は特別だよ！？」レ

イニー「どうしてそんなこと分かるんだ？」ミユ「なんとなく！」 レイニー「そうなのかな……？」ミユ「自信持って！」

レイニー「でもユキは誰にでも笑顔だろう？」

ミユ「レイニーは何気ない一言でユキちゃんを笑顔に出来るの！そこがすごいんだよ！？」レイニー「……そうか」

♪♪♪

ミユ「早く結婚しないとダメだよ！」レイニー「いきなりだな……」 ミユ「ユキちゃんみたいな娘、絶対にもう現れないよ！」レイニー「わかってるんだけど、お金が……」

ミユ「家庭教師と花売りでなんとかやってるんでしょ！？」

レイニー「その……結婚指輪が買えないんだ……」 ミユ「なんだ〜そんなこと？ ちょっと見てて！！」

ミユは両手を前にかざした。するとそこへ金色の光が集まりそれぞれの手の平を天井へと向けた。ミユの手に 2 つの輝く丸い物が現れた。

ミユ「はい！これ、指輪！」

レイニー「え！？」

ミユ「私の誕生日のお祝いしてくれたからお礼だよ！」レイニー「いや、悪いよ……こんな高級そうな指輪」 ミユ「これは『生む魔法』って言っていろんな物を作れるんだよ！」レイニー「……」

ミユ「早く！ 今日中に渡してね！」 レイニー「ま、出来ればだな……ありがとう」 ミユ「もし子供が産ま

れたら大事にしてあげてね！」レイニー「分かった……ありがとう！」ミユ「じゃーねー！ バ

イバイ〜！」

レイニー「もう行くのか？ まだいても……」 ミユ「レイニーに指輪を渡しにきただけ！ また会えたら会おうね！」 レイニー「ありがとう……」 ミユ「いい！？ 妖

精にもらったって言っちゃダメだよ！ 自分で買ったことにしなきゃダメ！」レイニー「わかった……ありがとう！」 （ミユ、教会から出て行く）

レイニー（不思議な子だ……あの笑顔、どこかで見た気がする……懐かしい笑顔……そうだ、ユキの笑顔だ……）

夕方

ユキ「じゃあ、家庭教師行ってらっしゃい！」レイニー「ああ

… … 行ってくるよ！」ユキ「気をつけてね！」

レイニー「ああ……ユキ？」 ユキ「ん？」 レイニー「……いや、なんでもない。行ってくる」

ユキ「行ってらっしゃい！」

ユキ（さ、晩ごはん作らなきゃ……）

（突然、教会の扉が開く）ユキ「あれ？」 ミユ「グッドイブニーング！」ユキ「あれ？

あなたは？」ミユ「私はミユ！」 ユキ「ミユちゃんね！どうしたの、こ

んな時間に？」

ミユ「私は妖精なの！」ユキ「え……妖精！？」

ミユ「妖精を信じないの？」 ユキ「う～ん、突然だからな……」ミユ「あなたはユキちゃんね？」

ユキ「え？どうして私の名前を？」 ミユ「だって妖精だもん！あなたのことは何でも知ってる！」ユキ「すご～

い……」 ミユ「さすがユキちゃん！レイニーなんかぼけ～っとしてたよ！」ユキ「え？

レイニーのことも知ってるの？」 ミユ「さっきお話ししたの！ 私は 2 人のことは何でも知ってるの！」ユキ「すごい

な～」

ミユ「妖精はきれいな心の人しか見れないんだよ！」

ユキ「えへへ……なんか照れるな……」

♪♪♪

ミユ「ユキちゃん、頭撫で撫でして！？」ユキ「いいよ！」 ミユ「……ありがとう」

(ユキ、ミユの頭を撫でる)

ユキ「えへへ！」

ミユ「いつまでも元気でいてね！」 ユキ「ありがとう！」

♪♪♪

ミユ「どうしてユキちゃんはレイニーと結婚しないの！？」ユキ「うーん、なんかまだ早いかな……と思って」 ミユ「レイニー、結婚指輪買ったらしいよ！」ユキ

「え！！！？」 ミユ「さっきレイニーと話して、言ってたよ！」ユキ「レイニーが……」 ミユ「貯金して買ったらしいよ！」ユキ「そうなんだ……」 ミユ「絶対レイ

ニーと結婚しないとダメだよ！」ユキ「……ありがとう」

ミユ「なんか心配でもあるの！？」 ユキ「あの人の……レイニーの弱さが心配なの」ミユ「例えば？」

ユキ「傷つきやすいし、すぐ怒るし……優しいんだけど、本当は……」 ミユ「あ〜そんなこと！？ 大丈夫だよ！ レイニーはユキちゃんのためなら強くなれるから！」ユキ「でもしょっちゅ

う喧嘩して心配なんだ……」

ミユ「大丈夫！ ユキちゃんは強いから！ レイニーがおかしくなったら今まで通り見守るだけでいいよ！」ユキ「でも、時々どこかに行ってしまいそうな気がする

… … 」

ミユ「大丈夫！ レイニーは絶対にユキちゃんのところに戻ってくるから！」ユキ「……うん」

ミユ「レイニーを信じてあげてね！」 ユキ「ありがとう……あ、ごめんね? こんな話をして」

ミユ「平気平気！ 今日、レイニーから結婚の話が出るから！」ユキ「え？

そうなの？」 ミユ「この教会で結婚式したらタダだよ！ レイニー、お金の心配してるから！」ユキ「ありがとう……ミユちゃん！」 ミユ「最後にもう一

回私の頭撫で撫でして！？」ユキ「うん！」

夜

レイニー「ただいま……」 ユキ「おかえり！ごめん！ちょっと夕方、用が出来て、晩ごはん作れてないの……だから…

… 」

レイニー「いいよ……バーでも行こう？」ユキ「ごめんね……」 レイニー「その前に話すことがある……」ユキ「え？」 レイニー「ユキ、家族になろ

う？」ユキ「え！？」

エピローグ

ミユ「良かった！色々あったけど、ようやくここまでたどり着いた！わざわざ未来から来た甲斐があったよ！明日は続いて行くからね！ ママに言い忘れたけど、パパが怒ったりしたらママが書いてあげたパパの名前見せてあげ

てね！ パパ、優しくなるから！ これからも頑張って！パパ！ママ！」

☆☆☆

ママへ

ママ！ママはママだけど、お姉ちゃんみたいなママ！そんなママが私は大好き！いつまでも優しいママでいてね！パパもママのことが大好きだよ！これからもパパを支えてあげてね！ママ、大好き！

ミユ

完

第四部 短編小説 風と雪が結ばれた日

登場人物

レイニー、ユキ、サニー、クレア、アルベル、マリア

2017 年10 月10 日

この日、レイニーとユキは夜、教会で結婚式を迎えようとしていた。レイニーは外で佇んでいた。

朝

（レイニー、教会の部屋の扉を開く）

ユキ「あ！ やっと来た！ 足音で分かった！」 レイニー「ごめん、丘の上から街を見渡していたんだ。ユキ、準備は出来てるか？」ユキ「大丈夫！」 レイニー「色々あったけど、とうとうこの日を迎

えたな……」

ユキ「ほんと！あっという間だったね！」レイニー「いや、俺

は長かったけど……」ユキ「そう？」 レイニー「まあ……そうだ、ユキに言いたいことがある」ユキ「どうしたの？」

レイニー「……いや、やっぱり後でいい」 ユキ「もう！言いかけたんだからね！それに後は多分時間ないよ？」 レイ

ニー「いや……ユキ、いつか言ってたよな？何に苦しんでるのって？」ユキ「……うん」 レイニー「俺が苦しんでたのは

… … ユキだ」ユキ「……」

レイニー「ユキに苦しんでた。けどそんな俺は間違いだって気づいた。誰よりもユキは俺のことを大事にしてくれてるってやっと気づいた……ユキの声を聞くだけ

で元気が出る。ありがとう」

ユキ「えへ！どういたしまして！」 レイニー「また迷惑かけちゃうだろうけど、これからもよろしくな？」

ユキ「これからの方が大事だよ！」レイニー「……そうだな」 ユキ「私ね、レイニーのこと心配だけど、やっぱり……」

レイニー「うん？」 ユキ「うんうん！ なんでもない！」レイニー「どうした？」

ユキ「やっぱり……レイニーは勇者だね！」

昼

レイニーとユキはサニーとクレアを呼びに行こうと教会の外へ出た。

レイニー「まあ、結婚式に招待してるのはサニーとクレアと父さんだけだけど……」

ユキ「小さな結婚式もいいよ！街中の人がお祝いしてくれて嬉しい！」レイニー「そ

うだな……」レイニー（うん？人影？）レイニー「ユキ、危ない！」

レイニーの胸に銃弾が走る。レイニーはそのまま倒れる。

ユキ「え……？いや、嘘？レイニ……？いやーーーーー！」

レイニーは病院に運ばれる。アルベルが担当することになった。そこへサニーとクレアも駆けつける。

サニー「ユキ、大丈夫？犯人は捕まったらしいけど……」 ユキ「……」 クレア「ユキ

を狙ってたみたい……」サニー「クレア！」 ユキ「……レイニーが」 アルベル「よく聞

いてくれ」サニー・クレア「はい」

ユキ「……」 アルベル「意識不明だ……」

ユキは泣き崩れ、鎮静剤を打たれ、眠りにつく。

夕方

ユキ（あれここどこ？夢の中かな？自分で夢見てるって気づいてるのって珍しいな……あれ？ここどこかで見たことが……？ここは……）マ

リア「黄泉の世界よ」ユキ「あ！お母さん？」

マリア「久しぶりね、ユキちゃん！」

ユキ「え？これは夢……ですよね？」マリア「現実よ！」

ユキ「え？」

マリア「あなたの意識とつながって、魂だけ黄泉の世界に連れてきたの。ごめんね……」ユキ「そうなんですか……でも、どうして？」マリア「もうすぐレイニーもここに来る……」

ユキ「……」 マリア「レイニーを救えるのはユキちゃんしかいない……」ユキ「レイニーを救えるんですか？」 マリア「これ、『いのちの石』。これを現世に持っていくの。こ

の石を右手で持って、左手でレイニーの手を握って。そうすれば……」

ユキ「レイニーは助かるんですか！？」マリア「……魂を分け合うの」ユキ「魂を分け合う？」 マリア「レイニーの魂はもう現世から消えかけてる。レイニーの身体にユキちゃんの魂を入れてあげるの。移植みたいなもんかし

ら？」ユキ「そうすれば、レイニー

は助かるんですね？」 マリア「そう。ユキちゃんとレイニーはつらい経験をしてきた、ずっと。そんな 2 人が出会って、強く引き合うことになってしまった……そういう複雑な関係だから、

ユキちゃんの魂をレイニーに分けることが出来るの……」ユキ「分けるとどうなるんですか？」 マリア「……ユキちゃんの生命のパワーが少なくなる。それに……レイニーと喜怒哀楽を共鳴することになるの」ユキ「共

鳴？」 マリア「レイニーが苦しめば、ユキちゃんにも苦しみが乗り移ってしまうの……だから」

ユキ「それでレイニーが助かるんだったらやりたいです！」マリア「……ありがとう」

夜

ユキは現世へ帰り、いのちの石をつかんだまま、レイニーの左手を握った。レイニーの意識が回復した。

ユキ「これで私たちはいつも一緒だよ！」レイニー「……ごめん」

ユキ「私、嬉しいんだよ？レイニーといつも一緒にいれるなんて！」レイニー「俺、もっと強くならなき

ゃ……ユキを苦しめてしまう」ユキ「苦しみは一緒に分かち合おう？もちろん、喜びもね！」

レイニー「……うん。苦しみだけじゃなくて、これからはちゃんと喜びも伝えるから……」 ユキ「いいよ、無理しなくて！ 平和にのんびりし

てるのが一番！ あ、結婚式、延期になっちゃったね！？」レイニー「でも、指輪は渡しておくよ……」ユキ「ありがとう！ 楽しみにしてたん

だ！」

2 人は薬指にそれぞれ指輪をはめた。

ユキ「ねえ、レイニー、牧師さん呼んで今から 2 人だけで結婚式しない？」レイニー

「え！？ もう夜遅いよ？」

ユキ「お願い！ 『10 月 10 日』の今日したいんだ！」レイニー「うーん……わかった」 ユキ「ありがとう！ ごめんね、わがまま言って。そうだ！ 結婚

式のスピーチで言おうとしていたこと、今言っていい？」レ

イニー「次じゃダメなのか？」ユキ「今、言いたいんだよ！」レイニー「分かった……頼む」 ユキ「レイニーへ。レイニーといたら、今まで出来なかったことが出来た。レイニーを想ってたら、1 人じゃない気がする。これか

らも一緒にいたい。また出会えた

季節になるね。レイニー、生きててくれて本当にありがとう……」

レイニー「…………ずっとお礼が言えてなかった。こっちの方がありがとう……ユキの声が途絶えないように生きていくから……」

完

第五部 短編小説 風と雪が生む物語

オープニング第 1

章 減退第 2 章 航海第

3 章 誕生エンディング

オープニング

「私が過去に行ってパパとママをくっつけたんじゃなくて、私の魂が過去に行ったの！」

俺はまるっきり意味がわからなかった。ただこの「娘」が黄泉の世界からやってきて、俺とユキを繋ぐ形で、俺たちと分かち難い関係があることだけは確かだっ

た。

「パパが結婚の約束をしたら、今パパとママが持ってる指輪が白と黒に変わるから！」

指輪？ 俺はユキと顔を見合わせた。俺たちが持っている指輪は金色に輝いている。この 2 つの指輪の色が変わると。よくわからないが、この「娘」が危険な

状態に陥るのではないかと懸念していた。そんな俺の顔色が目立ったのか、彼女は笑顔で言った。

「大丈夫！ マリアおばあちゃんから安全だって言われてるから！」

マリア。俺の母親だ。黄泉の世界で交信したと思われる「娘」と俺の母親の間にどのような交流があったのかはわからない。だが、今はやはり、母の言うことを

信じることにした。

「娘」は俺とユキが普段眠るベッドに仰向けに横たわった。

「One, two, three」

彼女がそう呟くと、部屋中が金色の光に満たされた。ユキはぽかんとした顔をして、さっきから黙ったままだ。ユキからベッドに横たわる娘に目をやると、娘は眠ってしまっていた。光は静かに消滅して行った。

「大丈夫かな？」 ユキは眉をひそめてそう言った。

「大丈夫だ。母さんとこの子を信じよう」 しばらく時間が経つと、俺の見ている画面の下部が黒く光始めた。目を下に向けると、薬指のあたりが黒い光に包まれていた。なんだこれは？ と感じながらユ

キを眺めた。するとどうだろう。ユキの薬指が白く光っている。俺の光る手はユキの光る手に導かれ、10 本

指が折り重なった。その 10 本の手はこの眠っている娘の右手に重なり、15 本の手が白と黒の光と共に混ざり合っている。

数分後、光は弱体化していき、指輪に色が写った。本当だ。俺の指輪は黒いものになり、ユキを見てみると、確かに彼女の指輪は白色に変わっている。

その直後、娘が目を覚ました。娘は口を左右に広げ笑顔を見せた。

俺の脳内に声らしきものが届いた。これで「儀式」は完了したらしい。俺の魂に神の魂 が振り分けられ、俺の魂とユキの魂は融合したと言う。そして、過去に行って現在に戻ってきたこの「ミユ」の魂も俺とユキの魂から生み出

されたということで調停がついたらしい。よく分からないと思うが、俺もよく分かっていない。だから、ここに至るまで。つまりレイニー、ユキ、ミユがどうやって「家族」になったのかを思い出してみる。

登場人物 レイニー、ユキ、ミユ、サニー、クレア、ルーマ、マリア

第1 章 減退

2019 年 12 月 23 日の朝、ユキは教会に隣接してある部屋のベッドの上で、疲弊したような状態で横たわっていた。そこにレイニーが声をかける。

レイニー「ユキ、どうしたんだ？ 顔色悪いぞ？」ユキ「うんうん、大丈夫」レイ

ニー「本当か？」ユキ「……」

レイニー「何かあったのか？」 ユキ「……ずっと調子が悪かったの」

ユキは 2018 年の雪花の季節から体調を崩していた。この日もユキは朝しばらくベッドにぐたりと横たわっていた。

レイニーとユキは 2017 年 10 月 10 日、結婚したのだが、同時にユキからレイニーへ魂の移植を行っていた。そのため、ユキの魂は減退していた。

レイニー「病院に行ったほうがいいんじゃないか？」 ユキ「うんうん、本当に大丈夫。それより、レイニーに相談したいことがあって」レイニー「なんだ？」 ユキ「……今はやめとく。やっぱり病院行こうか

な？」

レイニー「それがいい。一緒に行こう」ユキ「大丈夫！

一人で行けるから」 レイニー「ダメだ……心配なんだよ、ユキのことが」

ユキ「レイニーはいつも人のこと、心配してばっかり」レイニー「そんなこと問題じゃないよ。ユキ……」ユ

キ「……魂の問題なの」レイニー「え？」 ユキ「夢にマリアお母さんが出てきて言ってくれたの。魂が減ってるから、体調が悪いんだって。クレアのときも、もっと私がんばれたはず。でもできなかった」レイ

ニー「つまり……」 ユキ「違うよ！ レイニーのせいじゃない。私がもっとしっかりしてたら……」レ

イニー「魂って……回復の魔法じゃどうにもならないよな？」ユキ「……うん」

レイニーは頭を抱えた。病院に行ってもどうにもならないとも考えた。ユキは何かを話そうと口を動かす。声が小さすぎて、レイニーの耳には届かなかった。レイニーは顔をユキに近づけて、ユキの震えるか弱い声を聴いた。

ユキ「エンデ島にある木を見たら、魂がちょっと回復するってお母さんが言ってた」

レイニーは夢の中のマリアが真相を言っているのかどうか半信半疑だったが、現在は縋れるものがなく、そのマリアのことばを信じるしかなかった。

レイニー「あの木だな？」 ユキ「そう……あの木の下にある根に魂のパワーが宿っていて、見ると不思議なことが起きるんだって」レイニー「でも、ユキ、あそこまで行ける元気あるか？」 ユキ「私はいいの。でも、レイ

ニーが辛い思い出を思い出さないか心配」

レイニー「人の心配はするなよ。どうにかして、ユキを……」ユキ「『合体の魔法』を使おう」レイニー「合体の魔法？」 ユキ「いや、やっぱりいい……」

レイニー「なんだ？ ユキと俺が合体する……のか？」 ユキ「そうじゃない。レイニーの見てるものが私の心の中で見れるようになるんだ。そのかわり、私の心の

中で思ったことがレイニーの心に響いちゃう」レイニー

「あのクレアのときみたいだな？」 ユキ「クレアと家族になったから、私にできるようになった魔法みたい」ユキの発言はほとんどが夢の中での「伝聞情報」らしい。レイニーは徹頭徹尾否定することもなく、ユキの言うことに耳

を傾けた。むしろ苦笑いをしながら、ユキの話を聴いていた。

レイニー「じゃあ、エンデ島に行ってくるよ」

ユキ「大丈夫？ つらい思い出思い出さない？」レイニー「大丈夫さ」

ユキは杖を取り出すよう、レイニーに頼んだ。杖の両端を彼女の頭とレイニーの頭に密着させ、何か呪文を唱えた。すると、レイニーの頭の中がことばのサラダ状態になってしまった。

レイニー「なんだ、これは？」

ユキ「……私の頭の中。だから、やめよう。危険だよ。こんな状態で、レイニーに一人で旅に行ってもらうなんて……」

ユキの瞼に涙がたまり、レイニーにずきっとした頭痛が走った。

レイニー「……」

ユキ「魔法、解くよ？」

レイニー「……行く。エンデ島に」ユキ「……だめ」

ユキは涙を左目から流し、ベッドに横たわる顔面から左側のシーツへ落ちた。レイニーにさらなる頭痛が襲った。

レイニー「行く」

ユキ「レイニー……」

ユキは声なき声になりつつある声を発しながら、レイニーを引き止めようと嘆願したい心持ちでいた。それでもレイニーはエンデ島に旅立って行った。

ユキの心の中にレイニーの見ている画面が映る。教会がある丘を下る道が見えてきた。レイニーはやや早歩きで歩いているらしく、ユキの心の中も揺れに揺れた。

ユキ（レイニー、ごめんね）

そもそも夢の中の物語に突き動かされるユキとレイニー。あなたは彼らが無事問題を解決できると思うだろうか？

第2 章 航海

レイニーは街の港へと歩いた。教会から徒歩で 30 分。彼は頭の中がぐわぐわと動き、時折頭痛を感じながら港に着いた。そこでエンデ島への船を見つけた。エンデ島はマルク団に襲撃されてから、無人島の「神秘の島」となっ

ており、時折人がこの島へ訪れる。レイニーは久し振りにエンデ島へ足を運ぶことを決めた。

レイニー（エンデ島の大きな木か。サニーとの思い出もあるし、ユキとの思い出もある。本当にあれを見るだけで、ユキが治るのか？ 半信半疑の心持ちだ。そもそも魂の減退って一体？）

レイニーは舟入をした。果たしてこれから何が起こるのか、彼は訝しむだけだった。

レイニー（「大丈夫だよ」）

突如、レイニーの脳内にユキらしき人の声が鳴り響いた。

レイニー（ユキ？）レイニー（「うん」）

レイニー（あれ？ 俺の声がユキに聞こえるだけじゃなかったっけ？） レイニー（「どうも、私の声もレイニーに届いてるみたい。私もちょっと頭がいたいの」レイニー（俺の見ている画面は見えるのか？）

レイニー（「うん。見えてる。レイニーには見えない？ 私の見てる風景？」

レイニー（見えない。おい、ユキの方がつらいじゃないか！？ 画面も見えて、俺の声も聞こえて……）レイニー（「大丈夫。私、寝てるだけだから」）

レイニーは悩ましくなってきた。そのとき、レイニーの脳内に激痛が走った。

レイニー（「だめ。苦しまないで。私は大丈夫。ゆっくり歩いて行って」）

複雑な話なので、整理しよう。とどのつまり、レイニーの心の中で表示された内言がユキ へと届き、ユキの心の中で表示された内言がレイニーに届く。さらに、ユキの脳内にイメージとして、レイニーの見ている光景が映るという

ことだ。レイニーはユキの容体が心配でならなかったが、彼が悩む度に頭痛が起こる。これはユキがレイニーへの配慮の感情が通心したために起こるものだ。

レイニー（ユキ……）

レイニー（「どうしたの？」）レイニー（海が見えるか？）

レイニーは海の方へと顔を向けた。ユキはそれまでの人生で海をそこまで頻繁に目にしたことはなかったと感じていていたからだ。

レイニー（「レイニー……」）レイニー（「ありがと……」）

レイニーの頭に最上級の頭痛が走った。ユキが涙を流したのだ。お互い、心理的距離をある程度取りつつ、むやみやたらに悪い刺激を与えないように努めていた。

レイニー（「夢どうりじゃなかったんだ……」）レイ

ニー（聞こえてるよ）レイニー（「あ、ごめん」）

レイニー（大丈夫。母さんを信じよう。不思議なことは起こるもんだ）

先ほどの激痛を超える頭痛がレイニーを襲った。だが、彼は決して怯まなかった。

海の中に小さな島々が見える。

船はエンデ島に着いた。

第3 章 誕生

レイニーは荒廃した島を見渡した。彼の頭は常に痛みに覆われるようになった。まっすぐに、彼は大きな木へと向かった。

するとどうだろう。木がない。あの思い出の木が無くなっている。マルク団に襲われた後、レイニーたちは二度この島へやってきたが、あの木だけは大事なかっ

た。だが、あの木

なくなっているのだ。

レイニーの頭の中はパニックになった。なるべく、ユキを責め立てることばをあたまのなかに浮かび上がらせないようにしたが、頭痛は強くなるばかりだった。

レイニー（ユキ……）

レイニーは心はぐらついているものの、身体は冷静だった。心の中では、木が切り倒されたのかなどと悶々と妄想を膨らませていた。

レイニー（「レイニー、ごめん……ね」） ユキが泣きながらつぶやいているのが、レイニーに分かった。彼はどうにかしようと島を回ることにした。もちろん目的らしい目的などないのだが。

あなたはどう思うだろう？ 縋り付いていた審美なる対象に裏切られた時の気持ち。彼らはそのような状況と心境に立たされていたのだ。

レイニー（うん？ 何？）

レイニー（「え？」）

レイニー（なんか言わなかったか？）レイニー（「何も？」）

レイニーにユキのそれとは異なる声が聞こえた。幻聴だった。幻聴はこう言った。

「家の跡へ行きなさい」

レイニーは大急ぎで自分の家の跡に向かった。島は黒いトーンの色に覆われていて、緑色

は唯一と言っていいのが木が持っているものだったのだ。だが、レイニーは無心で自分の家の跡へと向かった。木製の家だったので、襲撃の際に焼けて、家は黒い木が絡み合っているだけだ。すると、その「黒い木」の真ん中に老婆がいた。

レイニー「誰だ？ あんたは？」 老婆「私はルーマといってね、この島の住人なんだよ……」 レイニー「おい、ここは俺たちが住んでた島だ。勝手に住みつくな」ルーマ「何か、困った顔をしておるね？」 レイニーは鞭を

取り出そうとしていた。だが、こんな老婆と戦ったところで、件の問題が完結するわけないというのも事実だった。しばらく互いににらみ合いが続く中、ルーマが口を開いた。

ルーマ「頭を出しな……」

レイニー「は？」

ルーマ「あなたの心の中を読み取ってあげるよ……」

レイニーは思考がうまく働かなくなり、言われるまま、ルーマの手に頭を寄せた。

ルーマ「魂で困ってるんだね……」 レイニー「……そうだけど……本当に心を読んだのか？」ルーマ「私が使える唯一の魔法だよ」

レイニー「魂さ。だから、どうした？ 俺の愛する人が魂（レイニーやめて）が消えかかって死にそうになってる。それをあんたがどうできるんだ？（レイニー…

… ）」

ユキの声を無視して、レイニーはこれまでの怒りをルーマにぶつけた。もちろん、こんなことをしてもどうしようもないとあなたは思うだろう。

ルーマ「ふう。秘伝を教えようと思ったのに、その態度ではねえ……」レイニー「なんだ？

秘伝って？」

ルーマ「もう教えないよ……帰りなさい……」

レイニーは何か糸口があるのかと直感し、様態を変化させて、ルーマに向き合った。

レイニー「悪かった。いや、申し訳なかった。今の態度は謝ります。秘伝をお教えいただけないでしょうか？」ルーマ「嫌だね……」

レイニー「俺の……大切な人が死にそうになってるんです。どうにかしてくれませんか？」

レイニーはふと涙を流した。すると、涙が雪に変わったのだ。

ルーマ「！！！ あんたは魔王かい？」レイニー（あれ？

どうして？）

レイニー（「『合体の魔法』だと思う」

ルーマ「魔王の生まれ変わり……なのか」 レイニー「そうだ」

ルーマ「申し訳なかった。魔王には逆らえない。秘伝を教えるよ」レイニー「頼む」

レイニーは強い口調でそう発声した。

レイニーが教えてもらった秘伝とはこうだ。ルーマからある種をもらった。その種を居住地、すなわち教会のそばに植え、教会でルーマから教えてもらった呪文に

よって、祈りを捧げる。すると、レイニーは神と交信できるようになる。その神、すなわち私とレイニーの魂を融合させるのだ。それから彼がユキと手を繋ぐと、ユキに魂が分けられるのだ。しかし、その代わりに、1 つ「課題」

が生まれる。どんな「課題」かはルーマからはとうとう教えてもらえなかったレイニーだが、とにかく頭痛を持ち合わせながらも、心を静かにし、島を出て、教会へと早歩きに戻った。

レイニーはその夜、種を教会の木の側に埋めた。すると、次の瞬間に黄色い実がなったのだ。

レイニーは教会の講堂で祈りを捧げた。すると、レイニーは金色の光に包まれた。苦しい。しかし、パワーがみなぎるような感覚も感じていた。私はレイニーに問いかけた。本当に魂を融合させて良いのかと。彼はすぐに肯定の相槌

を打った。こうして私はレイニーになった。俺はベッドに横たわるユキの手を握った。 「……」

ユキは目を瞑ると、すぐに飛び起き、まるで今までの状況が虚構のように、笑顔を見せた。

「ごめんね！ 心配かけて！」

「ユキ……」

俺の目頭に涙が溜まった。ユキはハンカチでレイニーの目を拭いた。そこへだ。俺の頭の中に声が走り、金色の光が消えた。

（「聴こえる？ レイニー？」）

（その声は？ 母さん？）

（「あたり！ ねえ、ユキちゃんと一緒に外に出て、さっき成った実を見てみて」）

俺は不可思議な気持ちでたまらなかったが、すっかり元気になったユキを連れて、外へ出た。ユキは何も言わず、ただ導かれるように部屋から出て行った。すっかり真っ暗な教会の周囲に金色の実が光に照らされて、その存在感を

保っている。

「あれは？」

ユキが今までのはしゃぐ態度を改めて、毅然として呟いた。

「なんだろう？」

つい俺は内言を外的世界に表出させてしまった。意味がわからない俺たちだったが、そのとき、俺の頭に母さんの声が響いた。

（「誕生の花よ。神様によって、あなたの魂とユキちゃんの魂が増えすぎたから、その残った部分を」）

（残った部分を？） 俺は半ば不安に、だが少しわくわくしながら母さんの声と対話していた。

（「ある子に託したの」）

金色の光は空へとつき放たれた。そして、何かが降りてきた。それは人のようだった。

「え？ 誰かがまた復活したの？」 ユキが眉をひそめて一人で呟

く。

「違う、あれは……」 俺は確信していた。 降りて

くるのは小さな少女だった。ユキはまっすぐにその「少女」

を見つめていたが、風貌が明らかになるにつれて、驚嘆の目

を見開いて行った。それもそうだろう。

レイニー「ミユ……」

そこに現れたのは、ユキと俺を繋いだミユだった。俺たち 3 人はしばらく黙っていたが、ミユがとうとう眉を逆のへの文字に変えながら、小さな声を出した。

ミユ「ママ……」 ユキ「ミユちゃん……」ミユ「ママ……」 レイニー「これが『課

題』らしい。その、つまり……」ミユ「パパ……」

レイニー「俺たちに子どもが産まれたということだ」

しばらく、ユキはがちっと硬直したままだった。ミユはユキをじっと見つめている。

ミユ「信じてくれないの、ママ？」ユキ「……突然のことだから」

ミユ「信じて……」

ミユの右目から一粒の涙が流れた。そして、それは雪に変わった。ユキの確信は深まった。

ユキ「ミユちゃん、いや、ミユ……」ミユ「ママ！」

ミユはユキに抱きつき、洪水のような涙を流した。ユキはそれまでのミユとの記憶、いや思い出といってもいいかもしれないそれらを一気に思い出し、やはり大海のような涙を流した。

ミユ「勇者と魔王が結婚するのはタブーなの！ だから、ママとパパにはこれまで試練が訪れてたんだよ！ で、子どもも産めないことになってたの！ そこを
… … 」

レイニー「2007 年 12 月 23 日に黄泉の世界で母さんが、新しい肉体を生み出したんだ。俺には昔、別の誕生日を教えて嘘ついたんだけどな。神様からの

贈り物みたいな感じらしい。でも、魂は宿ってなくて、眠ったままだった。それで色々とあって、今ユキと俺の魂が宿ったのが……」ミユ「私なの！」

ユキ「妖精じゃなかったんだ！」

ミユ「私ね、魂が自由に過去や未来へ行きき出来るの！ だから……」

これから過去へ行って、ミユは俺とユキを繋いでくれるのだ。それで初めに話題に出した出来事が起こったという流れになる。

エンディング

色が変わった指輪を見ながら、ユキはベッドに座って、目の前ではしゃいでいるミユとたくさん話をしていた。俺はその様子を絵に認めた。時折、ミユの頭をなでる。すると、俺の心に母さんの声が聞こえてきた。

（「私はね、あなたに本当に幸せになって欲しかったの。私が早く亡くなって、あなたは家族っていうものを味わってない。あなたに本当の家族になって欲しかったの」）

俺はベッドに座ったまま、涙を流し始めた。

「レイニー？」

「パパ！？ どうしたの？」

俺の涙はもう雪には変わっていなかった。あのときだけだったようだ。外でポロポロと降る雨音が聞こえてきた。俺は半ば強引にユキの肩に手をやり、ミユを撫でながら言った。

「生まれてきてくれて、本当にありがとう」

こうして、俺とユキとミユは家族になった。俺にとって嬉しいことに、様々な声は聞こえるものの、時折母さんが声をかけてくれる。父さんも生きている。3 人の家族と 2 人の両親。これで俺たちの物語は一括りだと言いたいと

ころだが、余談があるので語りたいと思う。

2019 年12 月24 日

朝

家族になった 1 日目の冬の朝はミユの突然の発言から始まった。

ミユ「ねえ、パパ、学校行きたい！」レイニー「え！？」

ミユ「ミユも友達欲しい！」 レイニー「でも、ミユは特別な子どもだろう？」 ミユ「そんなの関係ない

よ！ 学校行って普通に友達とおしゃべりしたいの！」

レイニー「でも、その……」ミユ「うん！？」

レイニー「その……お金がないんだ」ミユ「……」

レイニー「この国では学校に子どもを行かせるのにお金がかかるんだ」

ミユ「じゃあ、無理なの……？」レイニー「うーん……」

ユキ「学校を作ったらいいじゃない？」 ユキが朝食作りを中断し、突然入ってきた。

ユキ「この教会を学校にするの！ そうしたら、お金も増えるしミユに友達もできるよ！」

ミユ「ナイスアイディア！ママ！」レイニー「ユキ、ちょっと……」ユキ「うーん？」 レイニー「まず、教会を学校みたいに作り直さなきゃいけない。それに金がかかる。それから生徒の確保。これは俺の家庭教師の口コミだ

けじゃ無理だ。だから、

宣伝をしなきゃいけない。宣伝費にまた金がかかる。そもそも運営資金って言って、軌道に乗るまでしばらく金を確保していないといけない。その金が貯まっていない。うまく軌道に乗っても、授業料とか、この街の平均的な学校よ

り安くするのは当然だ。そういうのを考えると……上手くいきっこない」ミユ、少し怒って「パ

パ、難しすぎる！」ユキ「……ごめん」

ユキは目をつぶって下を俯いていた。

レイニー「前に話があるって言ってたのは学校づくりのことか？」ユキ「……そう」

ユキは目を開いたが、下を見つめたままだ。

レイニー「何事もじっくり考えてから行動に移さなきゃいけない。俺は反対だ。ミユは俺が勉強を教える」ユキ、ミユ「……」

昼

俺は外出した。

ミユ「パパって頑固だね！」 ユキ「なんだかんだで、頭が良すぎるんだよ……」 ミユ「ねえ、私、魂を自由に行き

来できる魔法使えるって言ったでしょ？」ユキ「うん！」 ミユ「物にはみんな魂があるって知ってる？」ユキ「あ、なん

か聞いたことがある！」 ミユ「だから、私色んな物を生み出せるの！」ユキ「え？」

ミユ「見て！」

ミユは天井に向かって両手をかざしたようだ。目をつぶって何かを唱えているらしい。すると、彼女の両手にカラフルな光が集まってきたという。ミユ「これ、学校

のためのパンフレット！」ユキ「すごーい！ これ、何枚あるの？」

ミユ「100 枚！ これ、町中に配りに行こう？」

ユキ「いいね！ パパには内緒で学校づくり始めちゃおうっか？」ミユ「うん！」

俺は街を歩いていた。少し雪が散っている。そこでユキとミユにばったりと出くわした。

レイニー「何やってるんだ？」

ユキ「いや、これは……」

俺はユキが持っている紙を乱暴に取った。学校の宣伝が印刷されてある紙だった。

レイニー「いつ、こんなの作ったんだ？」ユキ「その……」

俺はその紙を破いた。

ミユ「！！！！」

ミユはその光景を見て、足を落として泣き始めた。

レイニー「……ミユ？」

ユキ、怒りを露わにしながら「これ、ミユが作ったの。私ならともかく、ミユが作ったのを破るなんて……」ミユはさっきの態勢のまま号泣している。地面が真っ白

になった。

ユキ「レイニーは黙ってて！ 学校づくりは進める！ レイニーは一切口出ししないで！」

ユキはミユを抱きかかえて、俺の前から去っていった。

夜

ユキ「ミユ、大丈夫？ベッドで静かに寝ててね？」ミユ「大丈夫だよ。ママ、それよりごめんなさい……」 ユキ「いいの、ママは。私がきちんと調べてなかったから……ミユ、ごめんね」ミユ「ママは悪くないよ」 ユキ

「パパはホントは優しい人なんだけどね……」ミユ「パパも悪くない」

ユキ「え？」

ミユ「悪いのは私だよ……勝手にあんなもの作っちゃって……」ユキ「……（涙を一粒落とす）」ミユ「泣かないで、ママ……」

突然、ドアが開いたようだ。

クレア「やっほー！」 ユキ「あ、クレア！ サニーも！」クレア「あれ、

ミユちゃ

ん？」ミユ「クレアお姉ちゃん……」

ユキ「実はね……」

ユキは昨日と今日起こったことを一部始終、クレアとサニーに話したようだ。

クレア「そいつはひどいね！娘のミユちゃんを家で囲い込みたいのかな、レイニーは？」サニー「……」

ユキ「それは言い過ぎだと思うけど……」

サニー「……違うよ。レイニーは……」

そこへ俺が帰ってきた。4 人の女の人に囲まれて、俺は何も言えなかった。

サニー「昼間、レイニーに街で会ったの！ お金を集めてるんだって！ ユキには内緒にしてって！」ユキ「……え？」 ミユ「……それって学校のためのお金？」レイニー「まあ」

クレア「なんだ！ また、行き違いか！」

レイニー「それより、これを見てくれ……」

涙ぐみ始めたユキをそっと見つめながら、俺は大きな分厚い紙をみんなに見せた。

レイニー「昨日、ミユの顔を描いただろう？ それを国王に持っていったんだ。そうしたら、美しいって言われて……」ユキ、ミユ「……え？」

サニーが微笑んでいるのが分かる。

レイニー「この教会を学校にするのに許可が出た。一部だけど、支援をしてくれるって……」ユキ、ミユ「ホント！？」

レイニー「ああ、でもあくまで開校するまでの支援金だけだ。そこからは……」

（レイニー、聴こえる？）

レイニー（母さん？）

マリア（今からミユちゃんの魂を未来に行かせて。ミユちゃんも静かに休めるから）

俺は母さんの声が聞こえたことをみんなに伝えた。ミユはベッドに横たわり、ノキモに着替えて、昨夜の魔法を使った。

数十分後、ミユが目を覚ました。

レイニー、ユキ「ミユ！」 クレア、サニー「ミユちゃん！」ミユ「学校は作らなくていいみたい！」レイニー「え？」 ミユ「この教会をみんなの『居

場所』にする未来が夢の中で見えた！」ユキ「居場所……」 ミユ「子供達だけじゃなくて、おじいちゃんやおばあちゃん。それから障がいを持ってる

人とかにもこの教会に集まってもらうの！ 私にも友達がいっぱいできて

た！」

レイニー「居場所か……」 ミユ「パパの知識とママの笑顔がみんなの居場所になるの！ クレアお姉ちゃんにはおじいちゃん、おばあちゃんのお世話や親がいない子どもたちのお世話を手

伝ってもらうの！ それからサニーお姉ちゃんには……」

サニーは悟ったのか、静かに微笑んで「わかった！」と言った。

ユキ「じゃあ、みんなの居場所作り、がんばろ！」

ユキはとびっきりの笑顔を見せた。

おしまい

短編小説 陽花なる家族

登場人物

サニー、クレア、ユキ、レイニー

2018 年 2 月 27 日の夜、バーにて

ユキ「何〜話って？」 レイニー「サニーのことだよ」 ユキ「サニーがどうかしたの？」 レイニー

「クレアと一緒に住んでるだろ？」ユキ「うん、それで？」 レイニー「その、なんというか……」ユ

キ「どうしたの？」 レイニー「サニーはクレアのことが好きなんだ……」ユキ「うん、それで？」

レイニー「いや、それだけだ」 ユキ「別に普通の話じゃない？ あ、紅茶お願いします！」 レイニー「ユキ、聴いてくれ。ただ『好

き』なだけじゃないんだ」ユキ「つまり……恋愛感情として

好きってこと？」レイニー「……そうなんだ。ユキはどう思う？」 ユキ「……この国では女の子同士の結婚とか反対されてるし……」レイニー「俺はなんとかしたいんだ！」

ユキ「でも……」

レイニー「ユキ……」 ユキ「私だって応援したいよ！でも後が不安なの……お互い傷つかないかって……」レイニー「どうしようか……」 同じ夜、

サニーとクレアのアパートにて

サニー「お帰り、クレア！」クレア「ただいま、サニー！」

サニー「ごめんね、お家に住ませてもらって……」 クレア「急にどうしたの？ 気にすんなって言った

じゃん！」

サニー「悪いな〜って思って」クレア「気にすんな！」

サニー「ねえ、ちょっと座って？」

クレア「うん」

サニー「話があるの……」 クレア「何？ お金ならいいよ！ 花売りでなんとかなって

るっさ！」サ

ニー「お金じゃないの！もっと大事な話！」クレア「どしたの？ 急に

… … 」サニー「私……」クレア「……」 サニー「私、クレアのことが好きなの！」クレア「あはー照れるな、

そんなの！」サニー「真面目に聞いて！」 クレア「まじめさ〜 私だって……」

サニー

「愛してるの！」クレア「……うん？」 サニー「レイニーがユキを想ってる気持ちと一緒なの！」クレア「えっと……」

サニー「クレアと結婚したいの！」

クレア、急に立ち上がり、外へ出て行く。サニーは何もできずその場で泣き崩れる。

次の日の朝、レイニーとユキの住む教会にて

（ドアをノックする音） ユキ「はーい！ あ、サニー……」サニー「ちょっといい

かな？」

ユキ「うん、もうすぐ花売りに行くんだけど……」サニー「レイニーはいる？」

ユキ「いるよ。レイニー！」

レイニー「あ、サニーか。どうしたこんな朝早く」 サニー「ユキ、レイニー、今日からここに泊めてくれない？」レイニー・ユキ「え！？」

サニー「昨日、クレアに告白したの……」 サニー、昨夜のことを話す。レイニーとユキは氷の冷たさほどの悲しみと共に許可をする。

昼、ユキは花売りに出かけた。

サニー「クレア、もう戻ってこないかも？」 レイニー「いや、そう悲観するな。クレアだって大人なんだ」 サニー「もし、クレアに会って結

婚できないって言われたら、私……」レイニー、頭を抱える。

サニー「私、この町を出て行く！」 レイニー「待てよ！そんな衝動的に動くな！」サニー「レイニーは分

かってくれ

るよね？」レイニー「サニーの気持ちだろ？」 サニー「さすがだね……でももう限界。クレアと一緒にいるだけで苦しいの。頭も痛くなるし、胸の辺りも痛い。とにかく痛いの……」レイニー「とりあえず、考えるなってい

うのは無理だから、ここでしばらく休みな」サニー「ありがと……」

夜、レイニーは家庭教師を休み、ベッドで横たわるサニー見つめる。そこへ、ユキが帰ってきた。

ユキ「ただいま！」 レイニー「おかえ……」クレア「お邪魔します」

ユキは花売りの途中でクレアと合流し、強引に連れてきたようだ。

サニー「クレア……」 クレア「サニー、昨日のことだけど……」サニー「うん……」

クレア「やっぱり結婚は無理！」 サニー「（涙ぐみながら）うん……」ユキ「サニー……」

サニー「じゃあ、私この街を出て行くね……」

クレア・ユキ「え！？」レイニー「……」 クレア「私、苦しいの。クレアを見てるだけで苦しい。遠く離れないとこの感情は収まらない……」クレア「いやだ……」

サニー「（涙を流しながら）ごめんね……」

クレア「いやだ！サニーと離れるなんて嫌だ！私たち、ずっと一緒にいたじゃない！家族なんだよ！サニーがいなくなったら私、私……」ユキ、涙を一粒流し雪に変わる。

クレア「サニーがいなくなるんだったら、私一生誰とも結婚しない！」サニー「家族……」

クレア、両足を地面に落とし、泣き崩れる。

サニー「……私たち、『家族』なんだね……」 クレア「……そうさ、家族だよ。お金じゃ買えない家族だよ！」サニー「嬉しい……ありがとう」

クレア「（涙をぬぐいながら）気にすんな！」

クレアは一輪の花をサニーに渡した。その後、彼女たちは手を繋ぎながら一緒にアパートへ帰った。2 人の背中を見届けたレイニーとユキはバーを訪れた。

ユキ「なんとかなって良かった……レイニーが話してくれたおかげだよ」

レイニー「いや、どうしたことでもないよ……それより」ユキ「うん？」

レイニー（俺が本当に幸せになって欲しいのはユキなんだ……次はユキが家族になる番だ）

続く

短編小説 雪花の季節

和泉敏之 著

プロローグ
第1 章 春

第2 章 夏
第3 章 秋
第4 章 冬
エピローグエンディング

おわりに

主要登場人物

ユキクレア

サニーミユ

マリア

レイニー

プロローグ

2018 年、ある街に 1 人の女性がいた。名はクレアという。21 歳の女性で、サニーという女性と共にアパートで安住している。このアパートは茶色の様相を施

した姿で、小さなそれである。コンクリートに塗られた茶の色が古びた様子を描いている。彼女が住む部屋には、至る所に花が飾られてあった。このアパートに住

むクレアという女性は動き始めたら静止できないという特性を持つ。

髪は長く、少し目がとがってはいるが、大きく綺麗である。現代の日本の女性が好むいでたちをいつもしており、話すことを好み、動くことを好む。彼女は花売り

を行って生計を立てている。 クレアには双子の姉妹がいた。名はユキといい、クレアとは二卵性のそれである。少し丸顔が特徴的な童顔の顔の形状をしており、クレアといくぶんか類似する

顔つきはしているが、背も小さく、見るからに弱弱しく映る。だが、このユキという女性は波乱な人生を送ってきたため、悲しみに耐える力が強く、意志の強い性格をしている。彼女は赤子の折に親に教会に捨てられた。その後、奴

隷として拾われ壮絶な体験をした後、クレアとこの街の丘の上にたたずむ教会で出会い、お

互いを認め合い、生きる力を得た。彼女は教会で住むことになり、クレアの勧めで花売りを行うようになった。

この物語はこの 2 人の女性が自分たちの運命をどう受け入れ、どう乗り越えたかという記録である。クレアはユキに双子ということを明かしておらず、ユキもま

た、クレアと双子の姉妹であることを知らないままにいる。

季節が変われば、吹く風も変わる。風がそよぐ間に変わる者もいれば、変わらぬ者もいる。少なくとも、このユキとクレアという 2 人の女性はこの物語が切り取

った間に若干ながら変化した。それは人間個体の変化というよりも関係の変化である。他者から切り離された変化でなければ事の次第は潤滑に進んだが、まるで他者を否定した上での自身らの世界を主役化させた上での変化故、事態

は複雑になった。

第１章春

春は桃色の花が咲き乱れる。そのような暖かい季節を肌で感じながら。クレアは一人部屋の中で居座っていた。時分は夜。花売りの仕事を終え、一息ついてい

たところの彼女は、まるでその一日の疲労を外界からは感じさせないほどしなやかな振る舞いだ。彼女の志向は毎日の生活を送りながら、常にユキへと傾いていた。彼女はユキのへの字に曲がる目を特徴とした笑い顔を誰よりも愛す

る。そんなユキと双子の姉妹でありながら、真実を打ち明けられずにいる自分をもどかしい気持ちで見つめていた。

ユキは記憶の魔法という他者の記憶を覗くことが出来る魔法を使うことが出来るが、クレアに自身の記憶を見せることを拒否されてきた。秘密を明かすと

現在の関係が崩れるとクレアは感じていたのだ。しかし、何も新しい展開をもたらす行動を起こしたくないというのも嘘だった。彼女はユキと毎日のように会い、

ユキを見守る習慣を掴んでいた。その間、何度か真相を語ることばが彼女の心によぎるが、口からは出てこなかった。喉が塊になり、ことばを生成することが困難のようだった。心とことばはまるで別の世界に住む者達だと彼女はい

つも感じていた。制止するのが難解な課題である彼女にとってこれほど不条理で不可解

で役に立たない事柄はなく、彼女の頭を悩ませていた。

そういう時間ばかり過ごす彼女の中には常にユキがいて、ユキ以外の人間を寄せ付けないよう努めていた。もちろん、人間である限り、他の事象が彼女にとり

つくことはあるのだが、彼女はユキを第一優先的に思慮することにしていた。ユキはクレアにとって相互浸透を希求する女神のような存在だ。そんなクレアに突然「声」が聴こえるようになったのがこの日だ。

「クレア？」

私は何が起きたのか不可解でいた。突然、頭、というより脳の中に声が響き始めたのだ。しかも、この声は馴染みのある声だった。

「ユキだよ」

私は何が何だか不明なまま、臆病な心でベッドの上に座っていた。ユキ？何故ユキの声が聞こえるのか？私はおかしな原因不明の病気にかかったのだと思っ

た。そういえば、レイニーにも幻聴と呼ばれる声が聞こえると聞いた。私にもそのような状況が起こったのだろうかと不気味な感情を抱いていた。 「クレアったら、もう～、私のこと忘れたの？」ユキのことを忘れるわけがない。

確かにこの「声」は毎日聴いているユキの声だった。不思議な高さの魅力的な声。悲壮さと陽気さが入り混じったような声。ただ何故ユキの声が私の頭に鳴り響いているのか、少し怖くなった。突然なのだ。突如として起こったこの

状況をどう説明すれば良いのだろうか。私はコンピュータを使いこなせない人間のようにじっと動かないままでいるしかなかった。「クレア、本当にユキだよ。魔法で声を届け

ることができるようになったの！」 魔法？この世界には魔法があるからそれもおかしい話ではないと思い始めた。私はこの「声」が本当にユキなのか知りたかった。好奇心旺盛な性格をしている

から、ただ尋ねてみたいと考えた。しかし、どうすれば良い？

「心の中で語りかけて……しゃべってもいいよ」

私は心の中まで読まれていることに驚愕の心持ちでいた。だが、今はこの「ユキ」の言うことに従ったほうが可笑しいと感じた。そこで声をかけてみた。もちろん

心の中で。

「ほんとにユキ？」

「だからさ、何度も言ってるとおりユキだよ！」

「ユキと話せるようになったの？」

「そうだよ！」

私は突如嬉しくてたまらなくなった。「あのユキ」と今度こそ一心同体になれたのだ。私はこのことを願っていた。ずっと。ずっと。私は欲深い人間だから、ユキが

まるで常に側にいてくれる状況を好都合だとまで見做していた。ユキの笑顔が自分のイメージの中でうごめくのを、私は自分を外側から見るように眺めた。

私はユキと色々な話をしたいと思った。だが、どうだろう。一つ、気にかかることを聞いてみた。

「私の心の中まで読めるの？」

「うんうん、さっきのはクレアが気付かないうちに言ってたんだよ」 そうなのかと納得してしまった。私が何故この件について尋ねたかというと、双子であることを知っているかどうかということが理由だ。私はその点について

は触

れないようにして尋ねてみた。

「ユキの誕生日は？」

「もう～12 月 23 日だよ！」

「初めて会ったのはどこ？」

「教会！」

「私の好きな匂いは？」

「知ってるよ〜花でしょ？」 確かにユキだと再確認した。私は嬉しくて飛び上がりそうだった。ユキと「ずっと一緒にいる」気持ちでいた。もちろん顔は合わせていないのだが。

そこへサニーが帰宅してきた。サニーは手に画家の道具と桃色に光る一輪の花を持っていた。

「ただいま！」「おかえり！」

私は今起こっていることをサニーと共有したいと思った。だが、そこへユキが歯止めをかけてきた。

「あ、私と喋れるようになったの、サニーには言わないで！」

「どうして？」

「えへへ、後で教えてびっくりさせたいんだ！」

「そうなんだ！ わかったよ！」

サニーは常よりテンションの高そうな私を少しばかり心配そうに見つめていた。桃色の花が少し陰って見えた。

「何かあった？」

「うんうん、何にも！」

頭のイメージの中でユキの笑顔の花が咲いていた。

第2 章夏

夏は黄色の花が咲く。新緑の木々が顔を覗かせる。そんな季節にユキとクレアの対話が盛り上がった。波乱という名の風を巻き起こしながら。

この頃、毎日のようにクレアがユキ達の住む教会を訪ねてくる。ユキとクレア達が和やかに時を過ごすことが出来れば話は別だが、常に問題が生じる。事の発端は春に起こった下記のような出来事だ。

クレアが夜、突然サニーと一緒に私とレイニーの住む教会にやって来た。サニーがまず目に入った。サニーの目には少し涙が浮かんでいた。サニーが何か話始

めようと口を開く前にクレアが口を開いた。

「ユキ、ありがとう！こんな魔法使ってくれて！」

「魔法？」

「『声の魔法』だよ！魔王にしか使えない魔法だって言ってたじゃん！」 そこへサニーの遮りの声が入る。

「クレア、だからユキに魔王だなんて言わないで……」 サニーの声は消え入りそうだった。私は自分のことよりも何日も眠っていないような表情をしていて、目の下に黒い影が残っているサニーの方が心配だった。

「ユキ、最近レイニーと一緒にお風呂に入るようになったんだね！よかったよ！そこ、心配してたんだ」 私は恥じらいなのかわからない感情のまま、目をこわばらせてクレアを見つめていた。それは羞恥という感情ではなく、

言語化できない感情だったのだろう。た

だこのぶわっと浮き上がった感情を何とか言語化したかった。私は文字が読めないけれども、幸いなことにことばを口頭で話すことはできる。頭の中で言語を用

いて操作することも、人並みにではないができる。だが、ベッドに座っているレイニーがそれを許す前にさえずるように語った。

「……なんでそれを知ってるんだ？」 サニーが叫ぶように語っ

た。

「だから、ユキが言ってたじゃん！」

サニーの左目から涙が一滴こぼれ落ちた。私はどう言っていいのか不明なまま、ただ一言口にした。

「そうだね！」

レイニーとサニーのぽかんとした顔がまるでイメージできるようだった。クレアの隣にいるサニーはそうとは言うより涙の量を増やしていたし、後ろを瞬間的に振

り向くとレイニーは驚いている様子だった。台所のヤカンが音を立てて鳴り響いた。 私は昔奴隷にされていたときに受けた虐待の傷をレイニーに見られるのが嫌で、彼とは入浴の時を別にしていた。だが、最近画家の学校に通い

始めたレイニーやサニーたちの努力に報いようと私も私なりの努力を始めたところだ。クレアが何故それを知っているのか、不可解なままだったが、先ほどクレアが言ったことが

答えなのだろう。

「じゃーねー」

クレアはただ天真爛漫な笑顔で手を振り、去っていった。サニーが目をこすり、私たちに瞬間的に背を向けて彼女を追いかけて行った。

2 人が退出した後、レイニーが私に不機嫌そうに話しかけた。

「なんで嘘ついたんだ？」 レイニーはさすがのセンシティブの特性によって全てを察しているようだった。私は辛さと憤りの入り混じった感情のまま呟くように言った。

「だって、かわいそうじゃん。あんなに喜んで」 レイニーのやはりと言うような表情に、私は情を感じて涙を一粒こぼした。その涙はクレアに向けての物でもあった。桃色の花たちは何故そんな色をしているか

分からない程切なく、しかし揚々として写っていた。暖かい春の気候で、私の雪の涙は数秒後に溶けた。 それからこの夏の季節になるまで私たちの住む教会にクレアが訪ねてきた。もはやサニーは一緒にいない。クレアとは毎日昼

くらいに花売りで合流するが、その時は「私の声」の話はしなかった。私にそう言われたというのが彼女の言い分だった。私はクレアを不用意に刺激したくなかったので彼女の言うことに自分を適応させてばかりだった。そんな私は

彼女の奴隷だった

のだろうか？ ある日の会話だ。

「あの子……レイニーは？」

「家庭教師だよ」

「そっか！じゃあユキと二人きりだね！」 初めはレイニーとは顔を合わさず、私一人に会いに来るのが狙いだと思っていたが、どうも異変が起こっていることに気がつき始めた。それは後に明確な形式

で判明する。また、彼女の朦朧とした意識が気になり始めた。さらにおかしなことが起こり始めた。春から夏へと進む時期に彼女が花を売っているところへ 1 人

の少女が現れたという。その少女は不思議ないでたちをしており、終始笑顔だという。

クレアとその少女とすっかり意気投合したようだった。なんでも私とその少女は話したことがあると言うのだ。が、誰だかは一切明かしてくれなかった。クレアが

私を大切にしてくれているのは分かる。自分と相手の中に共通項があると妙に話は盛り上がるものだ。

クレアにその少女とのやり取りを聞いてみた。すると、言いたくないが、嫌な感情が芽生えてきた。

「お姉ちゃん、この黒い花珍しいでしょ？」少女がそう言ったのだという。

「凄いね、その色！」 クレアが無用心に答えた。

「この花弁一つちぎってみて！」

そう言われたクレアは黒い花弁を 1 枚ちぎったのだという。

それからが本当におかしな話だ。可笑しいのではなく、異様なおかしさだ。クレアが黒い花弁をちぎる度に、私に関する記憶が消えていくのだった。

まず忘却の空に消えたのは私の誕生日。

「ユキの誕生日いつだっけ〜？」

「どうして覚えてないの？」「忘れちゃった〜

あはは」

無邪気に笑うクレアに誕生日を再び教えた。というより、私と同じ誕生日だから忘れるはずがないと思っていたため、不意の一撃だった。

しかし、何度、私の誕生日を教えても彼女は覚えてくれなかった。

クレアは突然怒り出した。

「いつも心の中でユキと話してるのに急に教えてくれなくなったじゃん！」 私の頭の中には疑問符が満たされていた。クレアが支離滅裂なことばかり言うものだから私なりに解釈すると、彼女は脳内で私と会話をし、謎の少女と

顔を合

わせ、黒い花弁をちぎる度にその内容を思い出せなくなるのだと言う。しかし、私が意地悪く、彼女を錯乱させてばかりだと彼女は強情にも言うのだ。

心配になった私はある日、クレアたちの住むアパートへと向かった。下っていく丘が私の感情の下降を意味するようだった。彼女たちのアパートは丘の麓に位置

しているため、すぐに着くのだが、その道は果てしなく遠い航海を行うように長く感じた。途中で道の脇に咲いている輝かしい黄色の花たちが皮肉にも私には悲

壮に満ちたオブジェにしか見えなかった。芳しい花の香りたちもまるで私の心を嫌に刺激する協奏曲のようだった。

クレアの家に辿り着いた。狭い階段を上がり、彼女の家のドアをノックした。が、誰も出てこなかった。後日聞いた話では、クレアが私との「会話」に夢中になり、

サニーがそれに対してあらゆる手法で対処しようとしていて気付けなかったのだと言う。初めは緊急事態でなくホッとしたが、その間にも彼女が私の記憶を喪失

していることに後で気が付いた。

私にはどうしてもクレアの「会話」が、脳内での彼女の独り言としか思えなかった。だが、そのようなことは到底言えなかった。彼女は時に私と脳内で口喧嘩を

すると言う。さらにはこんなこともあった。

「ユキは家でどうやって過ごしてるのか全然教えてくれない！ 意地悪！」 これまで私がレイニーとの結婚生活をクレアに伝えることは頻繁にあった。その記憶が

彼女からすっぽり抜け落ちているのだ。私は彼女の怒りに似た声に耐えていた。

彼女との意味不明な対話は続く。

「ユキってさ〜、『違う』って言う時に『ギグ』って言うんだけど、あれ何語？」 私はそんなことばを開発したことはなく、色々と想像を巡らしてみたが、恐らく「逆」が変態したことばなのだろう。その謎解きめいた物を彼女

と共に楽しめれば

と心から願ったが、彼女は私を振り回すばかりだった。そのような時間の経過だけのやり取りに耐えきれず、ある日私はついに彼女に嘆願した。

「黒い花ちぎるの辞めたら？」 だが彼女の答えは以下のようなものだった。

「でもその女の子ちぎってちぎってってお願いするんだよね〜！花ちぎるたんびにその子が笑ってくれるのが嬉しくてさ〜」

クレアが私よりその謎の少女の笑顔を優先させていることに多少の苛立ちは感じたが、彼女の存在を成立させている要因であるその少女や黒い花について否定することは避けたいと感じていた。クレアの声の色が少し嫌々しく私

の耳を通じて頭に彩るようになった。

私はクレアの中で鳴り響いていると思われる私の「声」に恐怖心を抱くようになってきた。私は閉じた扉のように固定化されつつあるが、その「声」の持ち主

が誰であるか、その「声」が扉がパタパタと開いたり閉じたりと躍動しているようで怖かった。真夏の暑さが私の混沌とした気分を悪化させていくように感じられることにも嫌悪感を感じた。

私はクレアを始めとした様々な人間との関係から成立すると気付いた。が、それは私の自己中心的な考えだったのだろうか。彼女達がいてくれるだけで私は

自身を肯定し、彼らのことも肯定することが出来た。否定的な関係になることもしばしばあるが、大袈裟ではなく、彼女達の存在が有り難かった。 私は感情に侵出されつつある自分という自己を持ちながら、すっかり付属品になっ

てしまった理性を取り戻そうと必死だった。だが、クレアが私の中から消えようとしている実態に、背を向けながら後ろの気配を意識的に感じる人のように無力になっていった。

その分、レイニーの存在は私にとって大きかった。クレアのことに関して悩み事を何でも聴いてくれる彼がいてくれて、私はどれだけ助かったことか。彼もま

た、正体不明の「声」と闘う戦士のようだから、たとえこの件に関する解答を持ち合わせてはないとは言え、今まで以上に頼もしかった。その分、「レイニー」をクレアと共有できなくなってしまった自分に棘が刺すような痛みを感

じないではいられなかったのだが。

ある晴れた日、レイニーが私に静かに伝達してくれた。

「クレアに好きな物を見せて気をひいたらどうだ？」

私は混乱状態に陥りつつあったため、レイニーに乱暴な言語を発してしまった。

「嫌だよ！ そんな手使うの！」

私はこの発言を口から勢いよく発出させた瞬間に後悔の念に囚われたが、レイニーは私の頭を、静かに撫でて癒してくれた。私は嬉し涙を流した。レイニーだけは私の周囲から消失して欲しくなかったからだ。涙は気温によりす

ぐに雪から水滴へと変化した。

この頃から、クレアと私には蟠りとは言えないものの、灰色の壁のようなものがどっしりと根を下ろすようになった。考えれば考えるほど袋小路に迷い込む私

は、未来を読解する魔法があればと無い物をねだる子どもになってしまった。私の涙腺はどうにかしたのではないかというくらい緩み、涙から変容した雪は夏の暑さにも負けぬほど、その白い色彩を見せていた。

第3 章秋

ユキとクレアは夏から秋にかけて絡まった糸のような関係を続けていた。クレアは次々にユキのことを忘れ、ついには二人が一本の道に現れた出会いの日まで

忘れてしまった。さらにユキに追い討ちをかけたのが、クレアが花売りを仕事に休暇を入れるようになったことだ。すっかり傷心したユキを奈落の底へ突き落す

「忘却」が起こった。秋になるとクレアは昔のような陽気な性格は衰えてしまい、少し冷静といえば聞こえはいいが、静かになったようだった。この季節になり、風が音を強め、冷たくなるのに呼応するかのような変貌ぶりだった。

この日も教会にて夜分に話す時間を作っていた。教会の周りに住む秋の枯葉たちが真っ黒い

夜の色の中でじわっと眠っている。

高い動作性を示すことが頻繁にあった彼女が動きを抑制しているように見える。彼女の動作が彼女の個性であり、彼女を彼女ならしめさせる特徴だっただけに、彼女がすっかり老いた木のように見えてしまうのだ。

私もそんな彼女に共時的にかどうか不明だが、彼女に対する能動的な対応を減少させていった。私は彼女が黒い花の少女と出会う度に、彼女を善悪のど

ちらかで言えば、悪の方へと向かわせているような心情になり、その少女を憎憎しく思い始めた。憎しみと言えば言い過ぎだが、とてもとてもその不可解な少女に対して好意的な向きを取れなかった。

だが、私はその少女と相対することはクレアによって許されず、そんな彼女の言動にまた私も静止する状況に追いやられるのだ。秋の涼しい風がさらに冷たく感じられた。

このような緊迫感のある状況下、私の感情を表面化させる出来事があった。それは彼女の次のことばだ。

「あなたの名前……なんだったっけ、忘れちゃったんだけど……」 これまで私を怒りや苛立ちの感情が大きく支配していた。接近したくても接近できない固形物同士がぶつかっては跳ね返るようにすれ違う毎日。

ここに至って、私は何故サニーにもっとクレアのことを相談しなかったのかと悔やんだ。サニーは常にクレアの側にいて大変な労力に圧迫されているため、彼女には声をかけないようにせねばというのが私の持論だった。が、どこ

かクレアとサニーの近接的な関係性にもどかしさを感じていたのかもしれない。

私にはレイニーがいて、クレアにはサニーがいる。共有できる人間は互いに他に存在する。そのある種の嫉妬じみた私の弱性的な心の出来上がりにより、
私は自分で自分を追い詰めたのではないだろうか。クレアに手を差し伸べることもほとんど出来ずに。クレアと喜びの感情を共有することを心の片隅で拒もうと
もがいていた自分を恥じた。

次の瞬間、瞬時的に次のようなことが私の頭を過った。私はことばを知っているようで知らなかったのだ。私はクレアのことを知ろうとした。だが、それは坂を転
がり落ちるように失脚の連続に終わっていった。彼女が記憶の喪失という名で「私」ということばを失っていく度に、自分の中にある感情を頭の中で顕在化したかったが、それは今の今まで出来ないままに終わっている。私の中にあ

る感情は「憎しみ」でも「辛さ」でも「恐怖」でもなかった。ようやく私はことばを少し覚えたようだ。明瞭な言語にはならないが、ボワっと浮き上がる感情。それは「悲しみ」だった。

私が動作を停止するに至らせようとするのもこの悲しみからだと気付いた。それは動作性を弱体化させたクレアと呼応する形で、現世に現れた。私の欲と彼女の欲が動かないまま折重ならずに漂った故なのだろうか。それともその中間くらいに潜む魔物が私たちをこんな運命へと導いたのだろうか。疑問点という虫が飛び回って終着点へと辿り着かない。私は居ても立っても居られなくなった。これまでの積み重ねからか、私の心の中にあるありったけの悲し

みの感情を吐き出すことしようと努めた。

「どうして……そんなこと言うの？」
「だって……忘れたんだもん、ごめんよ」
「どうして……ひどいよ！ 私たち、ずっと一緒だったじゃない！今まであなたに合わせてきた！本当はしゃべってたなんて嘘！あなたに合わせてきただけ！私の名
前……ユキを忘れたの？」
「ユキっていうんだ……そんなに怒るなよ……」 私の瞼から涙が零れ落ち、すべて雪に変わった。クレアは何故か私が魔王の生まれ変わりで涙が雪に変わることだけは忘れていないようだった。だから、この

光景を驚きもせずただ傍観するだけだった。
「私たちが初めて会った……日のこともやっぱり覚えてないの？」
「ごめんよ……」 私を救ってくれたクレアは一体何処へ行ったのだろう？ 私は立ち止まることはもはや出来なくなり、棚から 1 輪の赤い花を取り出した。 「これ、クレアと出会った日にくれた花……」
「そうだっけ？私、花は好きだけど……」 私は涙が洪水のようにただれ落ちるのをじっと立ったまま感じるだけだった。クレアは申し訳なさそうな表情をしていたが、私はクレアを許せなかった。
不意にクレアがその赤い花に触れた。そしてすっと掴んだ。
クレアはその花の香りをかいだ。私は涙を拭うので精一杯だった。
「この花の花ことば、『ありがとう』だったよね？ 文字が読めないユキが教えてくれた……」 クレアのそのことばを聞いて、私は涙を流しながら彼女に抱きついた。

第4 章冬

秋が終わると風はさらに冷たくなり、冬が訪れる。その間、クレアはサニーと共に毎晩教会を訪れた。冷たい風や空気と時折降る氷雨は、体温に感じられる冷た
さとは裏腹に、彼らが同じ時空を共有する為に用意された少し意地悪だが優しい贈り物のように思えた。クレアの「声」は冬が始まった頃に聞こえなくなったという。クレアはユキの肉声の方を絶対的に愛すると語ってくれた。

私はクレアとサニー、そしてレイニーと一緒に教会の部屋で食事をしていた。何気ない会話。こんな奇跡があるのかという気持ちだ。当たり前の日常という奇跡
が私をほんのりとした温かい感情にさせていた。外には白い花たちが私たちの「事件解決」を静かに祝福するようにそっと存在を明るくしていた。

食事と話が盛り上がる中、入り口のドアをノックする音が鳴った。誰だろう、こんな時間に？

「グッドアフタヌーン！」「あれ？

あなたは？」

目の前には少女がいた。見たことのある少女だ。

「ミユちゃんね！」

「ありがとう！ユキちゃん、私のこと覚えてくれてたんだ！」 そう、ミユという不思議な少女。不思議な衣装を身に纏い、私とレイニーの前に現れた自らを妖精と名乗る少女だ。

「あ、ミユちゃん、どうしたの？」 そう言ったのはクレアだっ

た。

「え？2 人知り合いなの？」

「知り合いじゃないよ、友達だよ！」 意外性をつく関係が判明した私にミユが笑顔で答えた。

「ほら、前言ってた黒い花の子だよ！」 すっかり元気になったクレアが笑顔でミユの頭をなでながら言った。

ということは、この「忘却の事件」はミユの仕業だったのだ。黒い花はクレアと私の共有する記憶の一部を取り出した象徴で、その量が減ると私が彼女から遠ざかると言う仕掛けだった。私はミユにはどうしてか怒りの波を立てるこ

とはできず、彼女の肩に触れた。ミユを愛でた私を見て、クレアは喜びに溢れた表情を浮か

べた。

「ごめんね！私がある人に頼まれて魔法使ってたの！それでその人から伝言なんだけど！」 私たち 4 人は食い入るようにミユを見つめ

た。

「クレアの記憶を皆で見て！特にユキちゃんは！」 私は訳が分からなかった。しかし、サニーとレイニーははぎょっとした顔つきをしていた。季節が前進するにつれ、脳が疲れていくように見えたクレアはまだ自分の過去をしっ

かりとは思い出せないようだから、ポカンとした顔つきをしていた。

私は今回の事件を起こしたミユの意図を知りたかった。そして、これまで見てこなかったクレアの過去を知りたかった。それをレイニーたちにはどのような目で

見るかを想像する余裕はなかったが、何か善行とは呼べないことをしているような後ろめたさはあった。 サニーとレイニーはお互いを見つめあった。そしてレイニーが静かに言った。

「もう時間は来たんじゃないか、クレア？」

クレアの頭の上に「？」のマークがついているようだった。

「クレア、大人になろう！」

そうサニーに言われたクレアは訳の分からぬ様子で承諾の会釈をした。私は杖を取り出し、クレアの頭の上にかざした。光が集まってきて、大きくなり、そこに画

面が映し出された。私たち 5 人はその画面を注視した。クレアが家出をするところからだった。

私はクレアが家出をしていたことすら知らず、そんな自分が情けなかったが、興味津々にクレアの過去を見つめた。どうやら双子の妹を探しているらしい。児童

養護施設での話や、ずっとこの教会で双子の妹を待っているクレアの姿勢が私に突き刺さった。その度にクレアが私をちらちらと見つめてくる。

ある日の記憶だ。クレアが教会でお祈りをしているところへある少女が現れた。その少女に見覚えがあるどころか、私が誰よりも知っている人物だった。私は茫

然として少し震えた。寒気のような震えではなく、温かい気持ちとともに身体の底から湧き上がってくる震えだ。記憶の魔法はそこで途絶えた。

するとミユが両手を上空にかざした。そこへ銀色の光が集まってきた。それは四角の形になっていき、段々と紙になっていった。

「見て！」

ミユが満面の笑みで言った。

それは白黒の写真だった。中を覗くと 1 組の夫婦が似た顔をした赤ん坊を抱きかかえる風景が見えた。クレアが全ての記憶を取り戻したのだろう、涙をこぼし

ながら呟いた。

「私とユキだよ」

クレアのその言葉に私は温かい涙を流し始めた。

エピローグ

ユキとクレアはある家の前で立っていた。辺りには雪が花の上に白い色を輝かせながら降り積もっている。夏に見た黄色い花をユキは思い出したが、それを振り解くような高揚感とカチンとした緊張の狭間に立ちながら、口元を緩ま

せていた。クレアはここから飛び跳ねていくというような覚悟ができているというような

顔つきでどしっとしていた。

「これから、お父さんとお母さんに謝りに行くよ」

クレアが少し凍えながら白い息を吐いた。

「違うよ」

ユキがそう言うと、クレアが首を傾げた。

「お父さん、お母さん、初めましてって言いに行くの！」 クレアが家の呼び鈴を鳴らした。

エンディング 少し荒療治が過ぎたようだが、これでよかったのだ。時の旅人であるミユと交信し、この方法しかないことが判明した。私はユキに恩返しがしたかった。私の息

子であるレイニーをここまで大切にしてくれたユキに「家族」というものを体験してほしかった。記憶は「ある」ものではない。「残す」ものでもない。「作る」ものだ。記憶は何も悲しみのみではない。喜びという記憶も様々な人

の関わりという動きによって作ることが出来る。そして人は新しい行動を生み出す。それは深い悲しみを味わった者だけが掴むことのできる宝のようなものなのかもしれない。私はこれからもレイニーやユキたちが作っていく記憶を

ずっと見つめていきたいと思う。季節の移り変わりと交わりながら、雪が降りしきる季節に本当の家族になった若者たちを見つめつつ、私は紅茶を一口飲んだ。

完

DEMO

血生臭い生命の囲いから離れるには時間がかかり過ぎた。充実した瞬間が脳裏に宿り、まだ俺を呪い続ける。どうしてか愛おしいとしか思えない時代の連続

に、そこに張り付いているのは人、人、人の顔。俺が自分を人たらしめたのは人。また自分を置き去りにするまで精神を急がせたのも人。ただ恨みなどはない。ただ記憶と恍惚を抱きしめる。どうしてこんなことを反芻しているだろ

う。わからない。だが、俺は熟知とまでは言えないが、直感的に理解している。俺の生命に残された時間は後わずか。残された時間は限りあるものである。こうして暗闇に舞い戻り、俺は人の生き死にを淡々と眺める。もちろん、架

空の空想の中ではあるが。ただここに辿り着き、ある人へ手紙を書いている。その人はユキ。君である。

風の記憶
和泉敏之・著

１ 妖精

ある朝目覚めると、ぼくは妖精になっていた。

男の子の妖精って珍しいみたいだけど、
ぼくは不思議に思わなかった。

空を飛びながら、島を見渡す。

「こんなに大きい島だったんだ…」

思わずため息が飛び出す。

今までいったことのない場所。

そうだ。サニーが教えてくれた洞窟。

彼女の笑顔を思い出しながら、

洞窟のいちも思い出す。暗闇に包まれた穴に入っていく。 すると、暗闇は光に包まれ、

ぼくの羽にぶつかる。

羽は消され、

光は人の形になった。

「妖精の世界にきて？私たち、勇者が必要なの！」

勇者？だれ？

ぼくは人間に戻った。

光の中へ進んでいくと、そ

こは妖精の世界だった。

２ はいいろ「妖精の世界は雪がいつも降ってたの！」

「だけど、変な魔女がやってきて、、、」

「雪が降らなくなっちゃって！」 ぼくは妖精に囲まれて、次々に声をかけられた。

「純真な子なら、魔女を倒せるだろうってみんなで話し合ったの！そうしたらあなたとつながって・・・」

ぼくは妖精に囲まれて、

すっかり困ってしまった。

ぼくが魔女を

倒す？

ムリだよ。

ぼくは泣き虫のレイニー。

すると、あたりが冷たくなって、灰色の光がぼくの前に照らされた。「魔女

だ！」

妖精たちは飛んで、一気に逃げ出した。

「あ、あ・・・」ぼくは涙ぐんだ。

だって、光が人の形になって。

恐ろしい魔女になったんだ。

３魔女

「あんたが勇者かい？震えてるじゃないかい！？」

ぼくは涙を流した。

魔女はぼくを見て、高笑いをした。「雪がほしいんだね！？」

ぼくは涙をぬぐって、少しだけ頷いた。

周りから妖精たちが

「がんばって！」と声をかける。

でも、ダメだよ。涙が止まらない。

「雪をくれてやる！」

「え…？」

「あんたに全部くれてやる！！」

ぼくにめがけて、吹雪が舞った。ぼくはからだの中が凍っていくのを感じた。

「ハハハハハ！」

魔女の高笑いが聞こえた。

目をつぶって、ぼくはさえずった。

「かわいそう…」

「はぁ？」

「あなたが…かわいそう。妖精さんを苦しめて、楽しんで…」

魔女を片目を開けてみつめると、

涙を流していた。

－

気がつくと、洞窟に倒れていた。気がつくと、お母さんがいた。

ぼくは泣きながら、お母さんに抱きついた。

「帰ろっか？」お母さんは一筋の涙と一緒に、

パアッと笑った。

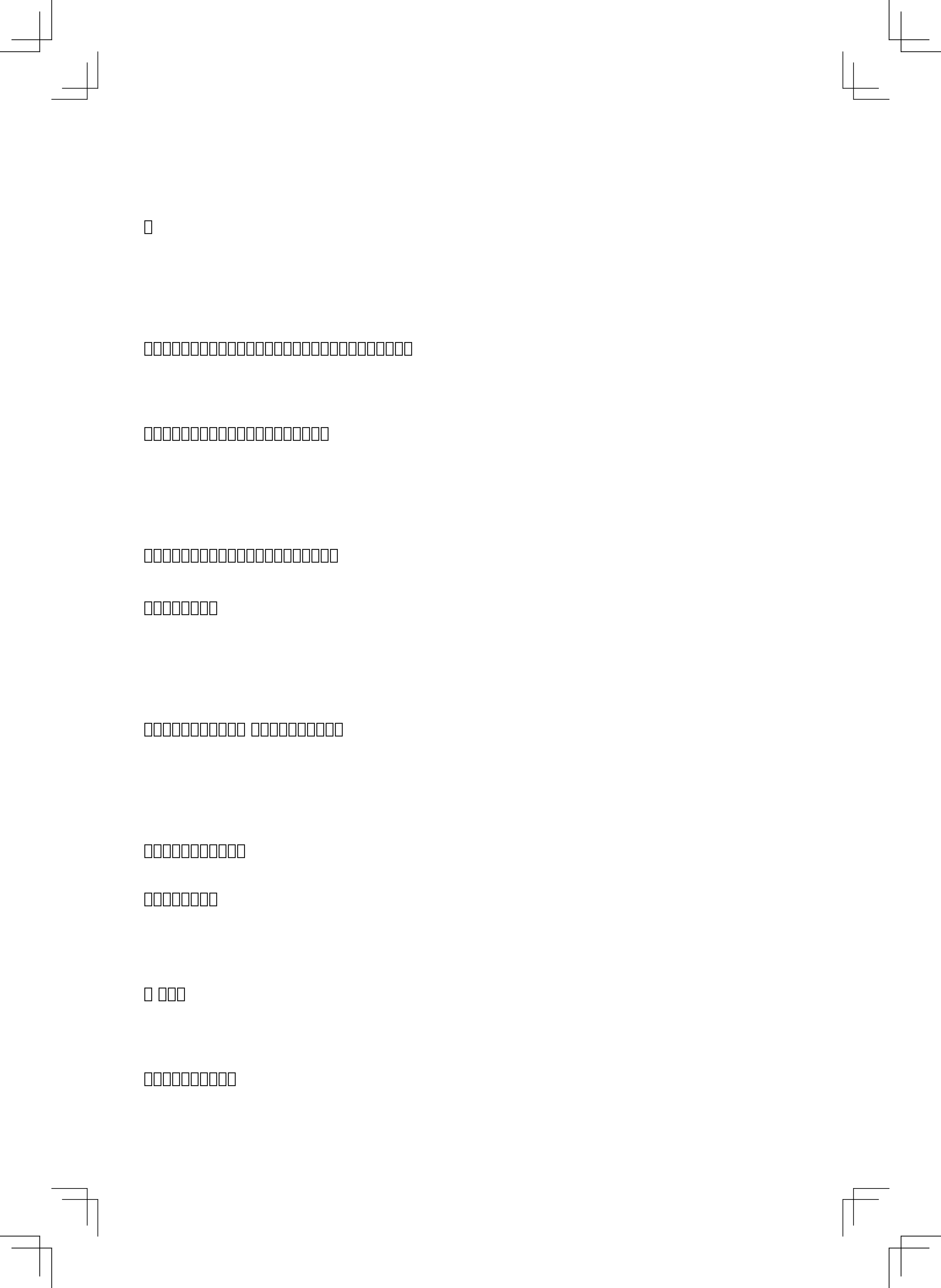
「すごい夢をみたんだ！帰ったら教えるよ！」

ぼくらは手をつないで、

足をすすませた。

４雪と氷

ぼくのからだの中では



雪が降っている。

そう、お母さんが教えてくれた。

でも、ぼくはあたたかい子ってはげましてくれた。

ちょっと、照れくさかったけど。

いつか、ぼくのからだの中の氷と雪が

とければいいな。

おしまい

短編小説 風雪の再会

和泉敏之著

❄短編小説 風雪の再会
❄ミユの日記

❄短編小説 風雪の遺言
❄詩集 雪と氷のファンタジー

短編小説 風雪の再会

<主要登場人物>

レイニー、ユキ、ミユ、ドレミ

第Ⅰ部

1. 少女

風の音色を聴くために私はただ歩く。足が進むと、身体にゆるやかな風がぶつかる。私はそれを心地いいと思いながらも、特に重要視せずに歩く。歩けば、歩くほど思考は進むものだ。私は自分の頭の中で観念を育てては、また外へやり歩く。この道は私をきっと開放へと導くに相違ないと特に頻繁に思う。

森を抜けて、街の郊外へと出た。視野の奥に点のような街が立っている。私はそれを標的にして、またひたすら歩く。少し休もうか。いや私は気が落ち着くまで自分の動作を止めないことにした。どうやったら気分が楽になるのだろう? ただ歩くことに身体は慣らされてしまったため、私はその術を知らない。だからただ前を見つめて歩き続ける。

時分は朝。鳥の鳴き声は聞こえないが、朝特有の太陽とも言うべきか、とにかくぎらぎらし始める前の太陽が私を見つめている。私はそれに挨拶をすることはもちろんなく、足を進めていく。

徒歩の速度が急になったり、かと思えば、ほとんど静止しているのと変わらないくらいの運動でのらりくらりとしたりする足。この足が私の脳から放出される電波により、私の意思をもっと反映してくれればと思ったりもした。

街が見えてきた。私は手前から 2 番目に見える家の外に置かれた椅子へと腰掛けた。久しぶりに足が止まる。そこで自分をどうしてここまで歩かせる物があったのかを振り返った。

2. 過去

私の名前はドレミという。どうしてこういう名になったのかは知らない。私は幼い頃に馬車が崖から落ち、両親が亡くなったと聞いている。赤ん坊の私は意識不明なまま、近くの街――それがこの街なのだが――にある病院へと運ばれたという。私の記憶にはない。私が意識を取り返したときには既に私の身をどうするかという議論も交わされたという。ただ私の恐らく一番古い記憶は病室のベッドで天井をみつめ、歌声を聞きながらうつろうつろとするところだ。私はこの歌が誰のものか知らなかった。やがて、私を育てているのは病院の人間で、実の親ではないということを知った。その 1 人が歌っているのだろう。

無責任な子どもだが、それにしてはこの歌声を気に入り、私は音楽をしたいと言い始めた。年老いた女性の医師が私を毎日昼食後に講堂へと連れて行くことになった。そこで私はオルガンを学んだ。

後にこの病院に嫌悪の念が浮かび、私は遠くへ行くことにした。申し訳ないが、ここで私は考えるのをやめた。病院を出た理由は再開する徒歩の途中で思い出そうと決めたからだ。

3. 秘密

病院。そこは本来人を治療する場だと私は弁えている。ただ、人を育てることに慣れているそれはあまり多くないのではないかということをそこで学んだ。

私は一休みをやめて、また歩き始めた。私を引き取り、つい少し前の時間まで育ててくれた病院には申し訳ないのだが、私はそこで自由な時間を保証されなかった。ずっと見つめられているような気がした。ずっと私は見張られているのだと、子どもなりに思った。私は毎晩ベッドですすり泣いた。

だが、ある日、病室のテレビでもっと過酷な身に置かれている子どもたちの存在を知った。その子どもたちを遠くから見物していると、私は彼らに感情移入してしまい、自分もまるで大人たちに見放された子どもではないかと疑心暗鬼になった。

そのような不安定な精神になり、悪化する前に病院を出る旨を院長に間接的に伝えた。許可はすんなりおりた。あまりにあっさりとしていて、感動的なお別れの場面は用意されなかった。着替えなどを用意してくれたが、私はいらないと言った。不必要に荷物を掲げていくのは本来の筋から外れているきがした。

私の本当の目的はユキという大人の女性に出会うことだ。

4．教会

街をずっとずっと歩いていく。のっしりとした足取りになったが、私は構わなかった。私はただ自分の目的――ユキと出会うことのみを目指していた。けっして丈夫な身体ではないが、私は所々で休息をとり、また歩いていく。病院が森にあったことは幸いだった。森の静けさの中でこの旅が始まったのは、私の精神を落ち着かせるには十分だった。そして街では朝早くの時分に、人々が活動を始める――言わば街が目覚めるときであり、これもまた、私の健康をそれほど悪い意味で刺激しなかった。

小高い丘に着くと、私はこれが最後の休憩だと言い聞かせた。これから丘の上の教会に住むユキに会う。緊張とほんの少しの喜びとまたそれよりは微々たる興奮が私をとり囲んでいた。ふうっと息を吐き、丘を登る。木々や花たちが私を温かく迎え入れてくれた。少し私は涙ぐんだ。これでいいのか。私は病院に迷惑をかけたのではないか？そう思ったが、息苦しい部分もあるあの病院。私はこの丘の登道にいなければ、複雑な気持ちで押しつぶされてしまっていたのかもしれない。これもここから始まる展望が私の期待感をすーっと外へ水を流す桶のような存在で停留してくれていたからだろう。

とうとう私は教会に着いた。扉をノックした。鍵はしまっている。

後ろ側へ回った。小さな木の扉があった。ノックしたが、誰も出てこなかった。ドアは古く、ぎぃーっと鳴り、開いた。私は恐る恐る中へと入っていった。教会に隣接してある住居のようだった。「もしもしー？」私はできる限り大きな震える声を発した。誰も答えてはくれなかった。

5．演奏

私「もしもーし？」誰も答えない。

私は周囲を見渡した。だが、何の気配も感じられなかった。私は住居から講堂のようなところへと出た。少し広いこの場で私はとうとう独りぼっちになった気がした。一人きりにならないために外へ出たのに、独りぼっち？私は涙を流し始めた。

「だめだよ、泣いちゃ！」 人の声が聞こえた。誰でもいいから声をかけてほしいと思い、声の方に身体をゆっくりと向けた。すると小さな少女が立っていた。

私「あ、あなたがユキ？」その少女はこう言った。「いいえ、小人！」 小人？本で読んだことはあったが、本当に存在するとは。しかも、私が見た小人は男性だったため、とにかく意表を突かれるばかりの瞬

間だった。

小人「ここへ来た理由は知ってるよ！」私「え？」小人「ユキに会いに来たんでしょ」私「う、うん」小人「あいにくだ

けど、ユキはいないの」私「え！？」 私は再び突き放されたかのように感じた。それを見据えて、小人は言った。

小人「落ち着いて！多分すぐに帰ってくると思うから！」 私の安堵の表情が伝わったのか、小人も笑っていた。どこかでこの顔を見たような気がした。

小人「そこにあるオルガンを弾いて待ってて！」小人は私を講堂の右奥にある古いオルガンへと連れて行った。私は椅子に座り、呼吸を落ち着かせながら、オルガンを演奏し始めた。本格的なオルガンを弾くのは生まれて始めてだったが、逆に私の精神を安定させて、笑顔になって演奏し続けた。

気づくと、先程の住居の扉が開いた。

第Ⅱ部

1．日常

何も変わらない日常。変わったことといえば、俺とユキに娘ができ、そして次が厄介なのだが、俺の情緒と天候がリンクするようになったことだ。ユキはそれを少し怖れているようだった。娘であるミユとの時間を多く割くようになり、俺に面するときはこれまでより表情が少し固くなった。俺はそれを敏感に察したが、何も告げずに暮らしていた。

ある日。朝、ユキは花売りの仕事に出かけた。俺は学校へ行けないミユに勉強を教えることになっていた。ミユは言うことをまるで聞かない。学びを開始しても、すぐに飽きる。そして部屋の中で走り出す。机に向かわせては、少し時間が経つと、彼女は動き出す。埒があかない。今日は家庭教師の仕事が休みだから、一日中ミユと向き合う事になっていた。俺は娘が好きだが、この破天荒ぶりには手を焼いた。

夜までその格闘は続いた。ユキが帰ってきた。ユキが見た光景は、俺が機嫌を損ねたミユをなだめているものだった。ユキはただいまと言ったが、その声は少し震えていた。怯えではない。少し笑いをこらえていた。俺は自身の指導力のなさを不甲斐ないと思い、落胆していた。その落胆を見て、ミユは舌を出してにやっとした。嫌な笑い方ではなかった。愛のある笑いだった。俺は彼女が全てを見透かしていたと察した。その証拠に、その後の彼女は態度が 180 度移行し、優等生のようになった。ユキとの関係はこれによって改善した。

俺とユキの関係性はミユの存在によって、より明るいものになったのだ。これが日常になった。そしてある日、俺は夢を見た。

2．変身

俺はベッドから目を覚ました。ユキもミユもいなかった。俺はベッドから身体を起こし、キッチンへと出ていった。ユキが言った。「おはよう！昨日は良く眠れた？」いつものユキだった。「ああ」と俺が言うと、彼女は俺を睨んだ。「何、その言葉遣い？」うん？いつもの言語使用なのだが。

ユキはいつから反抗的になったのかとまるで母親のような口ぶりで俺を説教した。俺は意味がわからなかったが、すぐに事態を少し理解した。そのきっかけは鏡だ。

俺の容姿は子どものときのそれになっていた。確かに先程ユキに投げかけた声も変声期の前のそれだった。
大人が子どもになるおとぎ話を俺は本で読んだことがあったので、俺は子どもに変化したと了解した。ユキは？大人のままだ。困惑する俺はユキに問いかけた。「ミユは？」彼女はこう答えた。「ミユ？誰？」俺は事態を理解していたが、まだ謎が多いので尋ねてみた。「俺たちの娘だよ？」ユキはいよいよ怒った表情で声を荒げた。「あなたが私の子どもでしょ！？」

3．母親

つまり、俺の身体は小さくなり、ユキが母親になったのだと判った。ユキが母親？彼女は俺の妻のはずだ。納得しては反旗を翻す思考を反復させていた。そんな思考の無秩序な回転が止まらない俺にユキは何気なく語りかけた。「朝ごはんの準備、手伝って！」

俺は「母」に指示されたように、コップを机に運んでいた。すると、小さな手に不慣れなためか、コップを床に落としてしまった。コップはガラスで作られていたため、ガシャンと泣いて砕け散った。

俺はそのガラスの絨毯の上で立ち往生していた。するとユキが走ってこちらにやって来た。「大丈夫？ケガはない？」ユキは準備良くタオルを手に持っていて、小さなホウキでガラスを片付け始めた。これがユキなのだ。そう、母親としてのユキだ。他者がトラブルを起こしても、それを責めることなく、心配する。自分の子どもだと思ったらなおさらだろう。俺はまだ彼女の子どもになったことには納得してはいなかったのだが。
ミユにもこんな気持ちで接しているのだろう。

そして俺の予想通り、一悶着が過ぎると、ユキは笑顔をこちらに向けた。

4．小人

ユキとの食事は無言で過ぎ去った。時折、彼女が俺に声をかけてくるが、笑顔の彼女に俺は「うん」とか
「そう」とか当たり障りのないことばしか発しなかった。食事が終わると、後片付けをさっさと済まして、彼女は花売りに出かけた。俺は一体どうしたらいい？ユキは勉強するようにと子の俺に話してすぐに出ていってしまった。勉強机の上を見ると、つい先程かいつかわからない時分にミユと一緒に使っていた本が乱雑に置かれていた。これが俺の勉強用のものになったのか？

俺は部屋の中をくるくると歩き回っていた。どうしてしまったのだろう？俺は夢を見ているのか？だとしたら、そろそろ目覚めるときだろう。だが、一向にベッドから飛び起きる光景は現れなかった。

しばらく部屋の中で回転していると、声が聞こえた。「もしもし？レイニー？」

聞き覚えのない小さな小さな声だった。その声の方を見ると、小さな少女が立っていた。小人だ。本で読んだことがある。小人は通常ヒゲを蓄えた男性が多いのだが、少女の小人も本で登場したことがある。不思議なことは連続して起こるものだ。

俺は小人に声をかけた。「君は？」小人は言った。「小人！」当たり前の答えで、期待はずれなため俺は目を別の方角へと向けた。すると彼女は唐突に言い始めた。

「元の世界に戻りたくないの？」俺はこのことばを誰かが使ってくれるのを待っていた。小人と語り合うことにした。

5．描写

小人「レイニー、神様と魂をくっつけたでしょ？」レイニー「あ、ああ……」小人「それで、世界がおかしくなって、レイニーたちだけ放り出された

の」レイニー「どういうことだ？」小人「聴いて！元の世界、あ、『現世』って言われてるんだけど、それはちゃんとあるから！」俺は安堵した。しか

し、俺とユキだけ放り出されたとは。ミユは？疑問に頭が包まれる、

小人「レイニーの魂が強くなりすぎて、世界に混乱が起きたの！現世ね！それで現世にはレイニーとユキとミユちゃんがいないの！」なんてことだ。異次元に投げ出されたというわけか。しかも、子どもに姿を変えて。

小人「聴いて！私の絵を描いて！」俺「絵？」俺は自分の高い声に戸惑いながらも、真剣に彼

女に耳を傾けた。

小人「私は現世とこの世界をつないでるの。私の絵を書くと、混乱が収まっていく。全部じゃないけど」俺はその理論の意味がわからなかったが、とりあえず言う

通りにすることにした。

勉強机の上から紙とペンを取り出した。それらは待ってましたかというように輝いて見えた。

小人は朝食を食べた机の上に座った。俺は小人の絵を書き始めた。絵を書いている途中、様々な情景が頭に浮かんだ。

小人「終わったら、神様とレイニーの、えっと融合？それは終わり！もちろん、ユキとミユちゃんと魂を分け合うのも終わり!」俺が彼女の絵を一通り書き終える

と、小人は姿を消した。

レイニー「うん？」

とっさに飛び出した声は変声期を過ぎた元のそれになっていた。鏡を見ると、大人の姿に戻っている。これで世界の混乱は終わったのか？昼、それは明らかに

なった。

ユキ「ただいま！」昼食を摂りに帰宅したユキに試しに話してみた。レイニー「お母さん？」

ユキは呆気に取られた顔をして、俺の額に手をやった。熱の確認。普段無愛想な俺がめづらしく冗談を言ったときに彼女が取る行動だ。

俺は通常の世界――小人の言う「現世」に戻ったことを知り、心の静寂を取り戻した。

第Ⅲ部

1．再会

直後、外で遊んでいたのだろう、ミユも部屋へ帰ってきた。安心できる家族の再会だ。一番初めに不思議に気づいたのは彼女だった。「オルガンの音がする！」確かに誰もいないと思しき講堂で鳴り響く音。誰かがオルガンを弾いている。ユキは護身用に杖を片手に持ち、俺と共に音の方へと足を運んだ。するとそこでは何も危険味のない少女がオルガンを弾いていた。彼女は俺たちに走って近づいてきた。

「ごめんなさい！勝手にオルガンを弾いて……」そういって頭を下げた後の彼女の顔に、ユキは見覚えがあるようだった。 「あ、ドレミちゃん？」ドレミと呼ばれたその少女は照れながら少し口角を上げ、ユキにお辞儀した。その後、オレの方に向いてまたお辞儀をした。礼儀正しい子だと思った。

どうもユキと俺が出会う以前に出会ったそうだ。気づけば、先程の小人とよく似た顔をしている。ユキと知り合いということで俺は安堵したが、そのドレミがどこに今までいたかを聞いて腹の中が痛くなった。

「そこは病院じゃない。悪い研究所だ」

ドレミは研究対象として、研究所に管理されていたのだ。俺の父は医師だ。病院は弱き人を助ける場ということを知っている。医師という仕事の尊さもわかる。

俺はドレミが哀れになった。どうしてユキたちが顔見知りなのかと言うと、研究所の庭で遊んでいるドレミにユキは花を渡したことがあるという。彼女はそっとドレミを抱きしめた。ドレミは泣き出した。

2．居場所

人間は神ではない。いくら力を持とうといつかは土に還る存在だ。レイニーは神との魂の融合を辞め、ユキとミユとのその共有も幕を閉じた。レイニーとドレミが見た小人は何だったのだろう？幻覚かもしれない。
しかし、不思議なことは起こるものだ。日常の中でも不可思議なことがあると、人間はそれに興味を打たれる。

余談だが、親のいないドレミは教会で引き取られることになった。この出来事が後の彼らの大きな仕事の発端になるのだが、それを振り返るにはまだ早すぎるだろう。

完

ミユの日記

これから私に起こったことを説明しまーす。私は神様に作ってもらったの。神様に魂だけ作ってもらって、パパがホントにいっしょーけんめいに頑張って神様と合体して、身体ももらったの。マリアおばあちゃんは私が黄泉の世界で生まれると、すぐにクレアちゃんたちのところへ行ってと言ってきたの。初めは意味が分からなかったけど、なんか私が眠って夢を見ると、魂が過去に戻ることができるって聞いたんだ。それで、クレア姉ちゃんとママを家族にするお手伝いをしたの。それから誕生の種を使って、パパが現世？だったけ、今いる世界に送り込んでくれたんだ。ママは私を娘って受け入れてくれた。すっごくうれしかった。雪の涙はママゆずり。それから過去に行って、パパとママをくっつけたの。指輪の色が変わったのはおばあちゃんからの合図らしいよ。あ、そうそう私が持ってる「生む魔法」っていうのは、パパの魂が少し私に入ってたから、出来る魔法みたい！パパは絵をかくのがうまいから、いろんなものをデザインする魔法なんだよ。いつか、ママ、この日記読めるようになるといいな。今日はこれくらいにしよ。じゃあ、おやすみなさーい。

〇月◎日ミユ

短編小説 風雪の遺言

主要登場人物 レイニー、ユキ、クレア、サニー、ドレミ、マリン、ハル、リオ、マイ、ヴィルヘルム、アルベル、モーア、ミユ、マリア

プロローグ

「あの女で間違いないな？」

「はい、あいつです」

「小娘め……私の道具を滅茶苦茶にしやがって」

「レイニーですね？」

「そうだ」

「レイニーがいなくなって、団は壊滅。私とヴィルヘルム様しかかろうじて残ってない」「いちいちうるさい」

「申し訳ありません」

「だが、本当に奴を狙ったのか？」

「はい……銃で狙撃しようとしたのですが、変な風に揺られて……」

「レイニーに当たったというわけか……」

「どうしましょうか？」

「あの娘の名前は？」

「『ユキ』です。この街で知らない者はいません」

「そのユキという小娘を亡き者にする」

「どうするんですか？」

「レイニーを使う」

「結局、彼は道具だということですか？」

「いや、レイニーのためだ。あの小娘がレイニーを乱している」

「では、再び狙撃しましょうか？しかし、あの風が……」

「私が出る」

「ヴィルヘルム様が……」

「私がユキを殺す」

1． 超能力

俺たちの元にドレミという少女がやってきたのは昨年のことだ。それから妙なことが起こる。誰もいないところで音がしたり、何より俺の頭に走る痛みが日に日に激しくなったりしているのだ。彼女の存在はユキとミユには良い刺激のようだった。ユキにとっては昔馴染みの妹。ミユにとっては唯一の友達ができたというところか。では俺はどうだ? あのドレミという少女を見ると頭痛がひどくなる。俺にとって彼女は大河の流れを遮る雨のようだった。状況はすぐに悪化した。やはりドレミの存在が不可思議な現象を引き起こしていることが明白になった。俺はある日、ミユとドレミに勉強を教えていた。ドレミは病院を怖がっている。病院ではなく、研究所だと言ってもあまり効果はなかった。つい、教科書をめくると病院の写真あ現れた。すると、ドレミは泣き叫び、、部屋中の物が飛び交い、ダンスを始めたのだ。そう、彼女は超能力を持った少女だった。

2． 導かれる者

病気を抱えれば病院へ行く。それが人の常だろう。しかし、超次元的な力とくれば、頼れるところはない。
俺は頭痛を抱えながら、ユキと口論の日々を繰り返した。ユキはドレミをなんとかしてでも自分たちの「家族」として迎え入れようと言う。俺は反論した。ドレミをきちんとした養護施設に送ることをせがんだ。だが、ユキは聞かない。俺たちの関係も悪化した。

そこに拍車がかかるように、出来事がおこった。ユキが知らない娘を教会に迎え入れたと聞き、2 人の少女がやってきた。これもまた、課題を抱える者たちだった。

1 人はマリンという。ミユと同世代くらいの少女だった。突然教会横の部屋に入ってきて、こう言った。「ユキさんはいますか？」俺は何か不安定な気持ちで答えた。「生憎、花売りに行ってるんだけど？」すると彼女は捲し立てるように話し始めた。「私はマリンと言います。親に捨てられました。私、ユキさんと一緒に暮らしたいんです」困った表情の俺にまさかの壁が立ちふだかる。「私、レイニーさん、あなたが憎いんです」は？ 突然何を言い出すのだ？確かに俺はこれまで他人に恨まれるような人生を送ってきたのは否定できない。しかし、こんな小さな少女に？俺はしばらく反芻したが彼女は予想外のことばを投げかけてきた。
「私、ユキさんが好きなんです。愛してます。ユキさんと結婚したいくらいの気持ちです」

もう 1 人はハルという。ある日、教会の講堂に人の気配がして、俺とユキとミユ、そして新しい仲間とは言いたくないのだが、そう言わざるを得ないドレミとマリンと共に覗いてみると、短髪の少女がデカデカと座っていた。「誰、あなたは？」ユキが丁寧に尋ねると彼女はこう言った。「私、ハル。申し訳ないけど、今日からここに住ませてもらうわよ！私はユキちゃんに興味があるだけ！」俺とユキは互いに見つめ合い、沈黙が発射された。

3． 過去

「研究所がない？」

俺は仰天した。今いる場所は馬車の中だ。クレアの友人のリオとマイと共に森の中にある研究所を目指し
た。俺はドレミの能力を軽減する鍵は研究所にしかないと考えていた。しかし、その研究所は森の中にはなかった。

3 人で街の図書館に出かけた。そこで地域誌を調べていると、なんともはや研究所は 5 年ほど前に火事で燃え尽きたというのだ。では、ドレミは？確かに研究所（彼女は「病院」と言い張る）から歩いてきたと語った。リオは震えている。恐怖だろう。マイがそっとリオの腕を握って励ました。

俺は開けてはいけないパンドラの箱を開けていくような気がしていた。町役場に出向いた。そこで、俺の不安は的中した。ドレミという少女の出所を調べてもらった。俺たちの住居に安住して権利はあると思った。しかし、町役場の係りの女性は震えながらこう語った。「そのドレミっていう子は 10 年前に研究所で亡くなっています。不慮の事故で。ちゃんと届が出ています」

「ドレミちゃんの過去を変えればいいんだね！？」 ミユは怖がるどころか、威勢のいい声で言った。要するに、ドレミは亡くなっていて、森から歩いてきたというのは、そう俺もいたことのある「黄泉の森」のことだった。そこからどうしてか謎なのだが、黄泉の世界から現世へ歩いてきたということだ。つまり彼女は亡き者と生きる者の真ん中所に位置する少女だ。

俺はミユに託した。彼女にドレミを救ってもらう。だが、ユキは反対した。「ミユにそんな危険なことさせたくない！それにドレミちゃんの過去を変えたら、今のドレミちゃんがどうなるか分からない！」ユキはなんとしてでも俺の計画を止めさせようと諭してきた。だが、俺は相槌すらせずに無言で返した。怒ったユキは外へ出て行ってしまった。まあ、これで俺の計画がやりやすくなったと軽く考えていた。ミユをベッドに寝かせ、過去へ帰る魔法を使用してもらった。

結論を言うと、ミユはドレミの事故を防ぐことに成功し、しかもドレミは無事現世にいる。俺は夢中になったように彼女に病院の写真をデリカシーなく見せたが、何も起こらなかった。これで一件落着だ。あとは教会にやってきた少女 3 人を無慈悲に養護施設に送るだけだと考えていた。俺はようやく平穏な日々が帰ってくると信じていた。

ドアが開いた。父のアルベルの病院の者だった。突然どうしたのだろうと言う観念は、俺の謎解きへ向けたような好奇心で打ち消された。しかし、その病院の者から発せられたことばで、ようやく俺は冷静さと現実につき交わされた。

「ユキさんが重体です」

4． 涙

レイニーは最近自分のことで精一杯になってる。私はそれを止められない。ミユは私たちの娘だよ？危険なことさせて、それにドレミちゃんがどうなるかもわからない。私はレイニーについていけない。

私は街を歩いていた。レイニーに昔もらったシューズを裸足で履いて。あの時の彼はどこへ行ったんだろう？ロングスカートとシューズの隙間の肌に風がぶつかり、冷たい。私が歩いていると、2 人の男性がこちらに向かってきた。その 2 人は私を囲んで睨んできた。「あの……どうしました？」

男性の 1 人が低い声で答えた。「ヴィルヘルムという」私はその名前を聞いた途端、逃げ出そうとしたけど、それをもう 1 人の男性が阻止した。

「レイニーを殺す」

「え？」

「レイニーの居処を言え」

教会に住んでいることまでは知らないのか、と少し安心したけど、ヴィルヘルムはすごい剣幕で私を脅した。

「言え」

「誰が、あんたたちに……」

「そうか、じゃあこうだな」

私は次の瞬間放尿をしてしまった。ヴィルヘルムが持っていたのは重たそうなムチ。私は逃げようと必死になって動作を続けたけど、冷酷に彼のムチが私を打ち付けた。

何度も何度もムチで殴られた。私は血をはいた。それでもムチは止まらない。ほとんど意識がなくなって少しヴィルヘルムの声が聞こえた。

「レイニーもこうしてやる。お前が証拠だ。レイニーに伝えておけ」

私が目を覚ますと、病院のベッドの上だった。レイニーがずっと手を握ってくれていたみたい。私は涙を流して、雪に変わった。

「ユキ、ごめん……俺のせいで」

「……え？」

「ヴィルヘルムだろう？」

「……」 お父さんのアルベルさんの姿も見えた。

「来たんだ。俺たちの教会に。あいつは俺の住んでいる場所まで知っていた。あいつの狙いは……ユキなんだ」

「……そうだったんだ」

「俺、教会を出ていくよ」 当然と仰天のはざまで私は飛び起きた。横にいるクレアに寝かされた。ミユは大粒の雪の涙を流してる。

「俺とユキが一緒にいるのが気に食わないとか言ってた。俺を『人間』にしたユキが憎いのかもれない」 私は目が充血した。

「じゃあ、ユキ……」

「やだ……」 私は何とか離れていく彼を制止しようとした。

「私もついていくよ」 私に声にならない声を超えたもの、それはサニーのそれだった。

「レイニーが心配。けど、2 人はしばらく一緒にいないほうがいい。私がレイニーの面倒をみる！」

前夜、俺とユキは出会った川にいた。

「いよいと明日だね……」

「ごめんな、俺のせいで一生消えない傷を残して」

「うんうん……レイニーの優しさがまた伝わってきたから、それで嬉しいよ」

「……」

「先に帰ってて。私しばらく水を眺めてる」 俺はユキを残した。3 歩くらい歩いて振り返ると、ユキが体育座りでしゃがんでいた。

「ユキ、絶対帰ってくるから……」

ユキは号泣していた。無力な俺は彼女を抱きしめるしかできなかった。

5． 別れ

「じゃあ、サニー？レイニーをよろしくだよ？」 クレアはいつもの元気な声で言った。無理しているのかわからなかった。

「もちろん！クレアこそ、ユキたちをお願いだよ？」 今度は無理しているのが明確なサニーのその声に、クレアは飛び跳ねることで応えた。

馬車の背中についている幕が降り、走り出した。

ユキとミユの泣き叫ぶ声がただ走っていた。涙を流すしかできない俺をサニーはただ抱きしめた。

エピローグ

その夜。

ユキ「また、2 人になったね？」クレア「まあ、姉妹だからさ〜」ユキ「これか

ら 2 人であの子たちを育てようね？」ミユは泣き疲れて眠ってしまっていた。

すると、突然暗闇の中を光が走った。

クレア「何？」ユキ「え？これって？」クレ

ア「まさか……」

「ご無沙汰だね」 ユキ・クレア「モーア！」モーア「すっかり傷心していると思ったが、まだ元気そうだ」私は杖を取り出した。それをモーアに向けた。

クレアは予想外のことが起こりすぎて、すっかり身動きが取れないようだった。

モーア「目を瞑って……」ユキ「何言ってるの？」モーア「見え

ないか？」ユキ「！！」クレア「どうしたの！？」ユキ「……レイニーが見える。サニーも」クレア「へ？」モーア「マリア様、ご説

明を」

「ユキちゃん聞こえる？」ユキ「お母さん？」

マリア「ユキちゃんが杖を持って目を瞑ると、レイニーと交信ができるようにしたの！あいつに喋りかけてみて？」ユキ「……レイニー？」画面に映るレイニーは

驚いているようだった。

レイニー「ユキ？」サニー「うん？」レイニー「ユキの声が

聞こえた……」サニー「ちょっと、大丈夫？」ユキ「私だ

よ、サニー！」サニー「え？ユキ？」レイニー「これは

… … 」

ユキ「お母さんからの贈り物！」

モーア「じゃあ、私は帰るよ」クレア「まって、モーア！あんた、何者？」モーア「私はマ

リア様の役に立ちたいのだよ」ユキ「でも、どうしてこんなこと？」モーア「……」マリア「モーアと私はユキちゃんとクレアちゃんと同じ関係なの！生きて、ユキちゃん？」私

はポケットに隠していたナイフを取り出した。クレアはカンカンに怒っていた。

マリア「宿命は変えられないけど、運命は変えられる。ユキちゃんたちはそれをホントに私に教えてくれた。未来はね、わからないの！ミユが見てきた未来ももしかしたらくるかもしれない。ユキちゃん、最後にレイニーに一言言ってあげて？」

ユキ「そうだなぁ・・レイニーの声って本当に素敵だね？」

了

詩集 雪と氷のファンタジー

ある日、ユキが目覚めると、世界が氷漬けになっている。
ユキとクレアは原因を探り、問題を解決しようとするが、どうも遠く離れたレイニーが関係していることが分かった。その際のユキのレイニーに馳せる気持ち。

Void Volition

天空から流れ落ちてきた ひとひれの希望
誰も そんなおとりに飛びつかない

運命から逃れ出ようとした ひとときの不安
誰か ここで鼓動を閉ざさないで

Lala……
溢れ出る涙 誰が誓う？空虚な声で
遊んでいる子ども 誰が誘う？空虚な喉で

脈拍は 波打っているまだ見ぬ希望のために蒙昧は 恥じらっている
もう来ぬ記憶を捧げに

Lala……
溢れ出る涙 誰が誓う？空虚な声で
遊んでいる子ども 誰が誘う？空虚な心で

裸足で履いた シューズ 指の先まで
剥がれ落ちてゆく ルール 行く末を見て

天空から流れ落ちてきた ひとひれの希望
誰も そんなおとりに飛びつかない

Painful Past

レイニーの秘密を探りに、過去の世界へやってきたミユ。
そこで待ち受けていたものは、サニーと共に病んでいく父親の姿だった。

あの人は どこに行ったの？ この時を どこで過ごし
たの？ あの人は ここで待ってたの？

この時に どんな気持ちだったの？

嵐が吹き荒ぶ 風の少年は もう魂綻びていく 崖の声援が ほら

あの人は ここを見ていたの？
あの友と どんな気持ちだったの？

嵐が吹き荒ぶ 風の少年は もう魂滅んでいく 影の共鳴が ほら

あの人は 心は・・・

あの人は
ここで・・・

Force

レイニーとサニーを救うため、ヴィルヘルムを倒すことを決意したユキとクレア。姉妹で誓いを立てる瞬間の詩。

描いていた夢 打ち砕かれて 今ここで ああ
目指していた運命 打ちひしがれて今きみは ああ

力がみなぎっている さあ空をとぼう 今ああ 光は輝いている その声を聞こう さあ 一
緒に

打ち込んでいた胸 打ち乱された 今ここで ああ
望むものは永遠 浮き始めた 水 きみと ああ

力がみなぎっている さあ空をとぼう 今ああ
希望が差し込んでいる この声よ届け さあ きみに

力がみなぎっている さあ空をとぼう 今ああ光は輝いている その声を聞こう さあ 一緒に 希望が差し込んでいる この声よ届け さあ 一緒に・・・

絶望

ヴィルヘルムと対峙するユキとクレア。だが、彼から放たれたことばは、レイニーとユキが一緒にいることの危険性だった。勇者と魔王が同じ時空を共有することにより、世界が歪められ、そこに苦しんでいるレイニーの心が作用し、氷の世界となったのだという。

一人ぼっちの 宇宙滲み出てくる blue 更新される 憂鬱

愛の歌は 皮肉なことに世界を 掻き乱し 愛し合った 絶望へと

ひとときだけの 夢中切り取られた blue 恍惚
という報酬

愛の歌は 皮肉なもので世界を 握りしめ 愛奪った 絶望へと

愛が溢れ 非常な運命 世界よ 帰ってきて？愛し合った 絶望へと

So dear……

悲壮にくれながらユキは指輪を外す。すると、世界の半分の氷が溶けたという。レイニーと交信し、彼にも指輪を外してもらうと、世界は元に戻った。互いに心で交信しながら、運命に翻弄されながらも前を向くユキに、レイニーはあることを託す。
ドレミの物を動かす力、ハルの周囲に雪を降らせる力、マリンのユキの心を読む力を活用し、教会の隣に小さな古屋を立てた。そこは訪れる人を拒まない居場所になったという。レイニーとサニーとの再会を願い、クレアはユキに詩を送った。

We we got here. Be be not there.

Ice made us together. Nice gate is to mother.

Till the end, we do go. Still the end, we don't know.

Faces fix us together. Race, sex is no matter.

Till the end, we do go. Still the end, we don't know.

We are not air. Be be hot weather.

So dear…

【別の次元での話】

ユキはミユの話を聞いて、レイニーとサニーと別れることを決意した。すると、夢にマリアが現れ、

「意図の世界」について教えられる。ここは色んな人の糸（意図）が絡まった、現世の裏世界で、黄

泉の森の奥深くにある。ここにあるレイニーの糸が切れてしまい、世界に異変が起こったのだとい

う。ユキは夢の中でこの糸を結びにいく。

意図の世界

何かを変えたくて ことばを踊らせるけど

誰かを求め続けて こころは戻らないの

私が見つめる その先には

灯りは見つかるのかな？

やっとここに来てくれた こころ

もっとそばにいてほしい どこでも

自分を変えたくて ことばは走ってくけど

何かが戻り続けて こころは求めてくの

私が見つめる この先では

光は見捨てないのかな？

やっとここに来てくれた こころ

ずっとここで見てくれた こころ

もっと声にしてほしい ようこそ

もっとそばにいてほしい どこでも

私が見つめる その先では

光はきっといつまでも・・・

世界は元に戻ったが、ユキはレイニーと交信できなくなっていた。すぐに彼の元へ出かけようとした

が、教会の出口を開けると、そこにはヴィルヘルムが待ち構えていた。彼はレイニーをユキから遠ざ

け、レイニーの心を壊すことに成功し、世界が氷漬けになったとあっさりと暴いた。ユキたちを 1 人

ずつ横一列に整列させ、ポケットからピストルを取り出した。

Sad Song

My heart is broken.

I hurt my heaven.

Is your name what?

Is my face white?

I keep on singing this song.

I need the sinking ring.

Saw sight. So sad.

I keep on singing this song.

I need the wining wing.

Saw sight. Saw sad……

ミユに目掛けて、ヴィルヘルムは拳銃を放った。

ところが、それは風に吹き飛ばされた。ユキは涙を流しながら、その男の顔を見つめていた。ヴィルヘルムの真後ろにレイニーが立っていた。サニーが警察を呼んでおり、ヴィルヘルムは捕まえられた。

さて、氷が解けて暖かくなった現世。ハルは雪を周囲に降らせる能力を持っていた。これを求めて、教会に集う人々。マリンはユキの心を読み取る能力を持っており、彼女の真意をレイニーに話した。そして、ドレミの物体を動かす能力を活用して、教会の隣に小さな小屋を建てた。そこは「エンデ」と名付けられ、訪れる人を拒まない居場所になったという。ここまでが私の知る「風と雪」の記録である。

THE END.

After Work

I’ve done tough.　No more work.
I’ve se**en enough.**　No more lack.

Just let them run.　Take the shining sun.
Just give them mine.　Time is seven nine.

Just let them run. Like the smiling son.
Just give them none……　Life is staying one……

Life is just like this one.　Life is just like this one.

　　レイニーとユキは出会った川に赴いた。彼が言う。「川の流れは変わらないけど、出会ってからずいぶんと時間が経ったんだな」ユキは笑う。「人って変われるんだよ。レイニーがそれを証明してくれた。レイニーと一緒に勉強しちゃった」

2 人はじっと互いの目を見つめあった。ユキがそっとつぶやく。「レイニー？」「うん？」次に彼女から発せられることばを想定していなかった。「大好き」ユキはそう言って、レイニーにキスをした。

https://youtu.be/R67oGi7gjLQ

ミユ「うーん、なんだか変な夢見たな……」
「ミユちゃん？」ミユ「誰！？」
「私よ…」ミユ「あ、おばあちゃん！？」マリア「久しぶりね、ミユちゃん！」ミユ「どうして？ ここは……どこ！？」マリア「ユキちゃんの記憶の中」ミユ「ママの……？」マリア「ミユちゃんの意識にアクセスして、ユキちゃんの記憶と繋いだの、っていっても意味わかんないわよね？」ミユ「なんか、魔法使ってる？」マリア「そう！ 今まで見たのがユキちゃんの前世の記憶。ごめん……残酷なもの見せて…
…」
ミユ「こわかった……」マリア「ごめんね……でも、ミユちゃんには見せる必要があったの！」ミユ「どうして……？」マリア「大昔、世界が滅んだ後、世界はそれぞれ引き離されて、魔界は地獄へと変えられた。あと、現世とは別にもう一つの世界が作られたの」

ミユ「もう一つ？」マリア「それが黄泉の世界」ミユ「あ！」マリア「その世界を作った人がいる……」ミユ「かみさま？」マリア「そうとも呼べるわね……でもあなたの知ってる人」ミユ「？？ どういうこと？ 大昔の話でしょ？」マリア「……」ミユ「おばあちゃん？」マリア「あなたなの……」ミユ「へ！？」
マリア「あなたが黄泉の世界を作ったの！」

❄❄❄

マリア「古代の人たちが持っていなかったもの……まずは生み出す力」ミユ「だから……私が……生む魔法を……？」マリア「泣かないで、ミユちゃん！大丈夫だから！あと……」ミユ「泣かない… … あとは？」マリア「ミユちゃんだけが使える魔法……ミユちゃんにとって大切なもの……」ミユ「時間……」マリア「うん。そうだな……神さまって呼ぶね？神さまは人々に時間を与えた。これで現世には四季が訪れるようになった……」

ミユ「うん。あれ？」
マリア「そう、全ては……」

❄❄❄

ミユ「ママの悪の魔力を弱めるために……」マリア「そして。真っ赤になった目。傷ついたユキちゃんのその眼を癒すために、涙が雪に変わるようにしたの。そして、あなたはやがて現世を生み出した……」ミユ「知らないよ、そんなこと！私、私……」マリア「大丈夫だから……聴いて？もう少しだけ」ミユ「うん……」マリア「人はね、亡くなると黄泉の世界にいくけど、魂のちぎれた部分があちこちに飛んでいくの」ミユ「魂？」マリア「それは大地になったり、海になったり、草原を耕したり……その魂のかけら？みたいなものかなぁ？それが今のミユちゃん！」ミユ「他の部分は？それに誰の生まれ変わりなの？私……」マリア「生まれ変わりとは違うわね……魂のかけらだから、その人の一部。ここでピンと来ない？」ミユ「わからないよ！」マリア「あなたがこの世で一番好きな人よ」ミユ「え！？」マリア「そう……デビルとトッシュの魂が息を引き取った後、合わさって……」ミユ「ということは？」マリア「ね？安心した？」ミユ「私は……もしかして！？」
マリア「古代のレイニーとユキちゃん！ね？大丈夫！」

❄❄❄

マリア「やがて現世も黄泉の世界も整ってきてから、これは〈神〉って呼んでいいわね！
〈神〉が頑張って疲れ切った神さま……ミユちゃんの魂を休めることにした」ミユ「それで神さまの魂とか、そんなこと言われてたんだ！」マリア「そう、だから知っておいて欲しかったの！」ミユ「でも、その〈神〉って誰？」マリア「この世界」ミユ「え！？」マリア「現世も、黄泉の世界も、地獄も含んで魂を持った。それが神……あなたが産んだ最大の宝物よ」ミユ「世界は生きてるの？」マリア「そう！むづかしいけど聴いてね？この世界は呼吸もしてるし、涙も流す。風が吹いたり、雪も降ったり……生きてるから、成長もしたり、時折挫けたり … … 」ミユ「世界を大切にしないといけないんだね！」マリア「そうよ！世界は生きてる。だから誰かが真似をすることもできる。けど、世界は世界だけ！」ミユ「うん？難しくなってきた……」マリア「ごめん、ごめん！でも世界をいたわること。それが一番伝えたかったことよ」ミユ「私に何かできるかな？」 マリア「みんなで考えるの！みんなが魂を通わせるとき、世界も喜んでイキイキとするから……」ミユ「おばあちゃん？」マリア「うん？」ミユ「ありがと……」マリア「え！？」 ミユ「なんか言いたかったの！ありがとう！！」